

意見書

椋山女学園大学文化情報学部

教授 黒田由彦



目次

0 意見陳述者の履歴、専門領域、学位および研究業績

1 はじめに

2 区域外避難の合理性

2-1 「状況の定義」

2-2 避難の合理性

2-3 避難継続の合理性

3 区域外避難がもたらした被害

3-1 「強いられた避難」としての区域外避難

3-2 「ふるさと喪失」、あるいは「地域生活利益の喪失」

3-3 存在論的安全の喪失と希望剥奪

3-4 社会関係の剥奪——別離・喪失・決裂

3-5 二次被害としての自責感情と周囲への警戒心

4 おわりに

付録Ⅰ 2011年 愛知県広域避難者質問紙調査の分析

付録Ⅱ 2012年 愛知県広域避難者質問紙調査の分析、および自由回答

付録Ⅲ 2013年 愛知県広域避難者質問紙調査の分析、および自由回答

付録Ⅳ 2018年A家インタビューのまとめ

付録Ⅴ 2018年B家インタビューのまとめ

付録Ⅵ 2018年C家インタビューのまとめ

0 意見書陳述者の履歴、専門領域、学位および研究業績

0-1 履歴

0-1-1 学歴

1980 年 3 月 名古屋大学文学部社会学研究室卒業

1982 年 3 月 名古屋大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了

1984 年 3 月 名古屋大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程退学

1984 年 4 月～1987 年 3 月 名古屋大学文学部社会学研究室助手

1987 年 4 月～1991 年 3 月 椙山女学園大学人間関係学部専任講師

0-1-2 職歴

1991 年 4 月～1993 年 9 月 名古屋大学教養部専任講師

1993 年 10 月～2001 年 3 月 名古屋大学情報文化学部助教授

2001 年 4 月～2010 年 10 月 名古屋大学大学院環境学研究科社会学講座助教授

2010 年 11 月～2017 年 3 月 名古屋大学大学院環境学研究科社会学講座教授

2017 年 4 月～現在 椙山女学園大学文化情報学部教授

0-2 専門領域・・・地域社会学、都市社会学、災害社会学

0-3 学位・・・博士（社会学）（論環境博第 48 号、名古屋大学）

0-4 災害社会学関連の研究業績

0-4-1 著書・論文等

黒田由彦, 2012, 「ポスト 3.11 の地域社会」を問うことの意味, 地域社会学会会報 No. 175.

黒田由彦, 2012, 「『愛知県に広域避難された方の支援のあり方を考えるためのアンケート調査』の結果概要」,

<http://aichi-shien.net/modules/d3downloads/index.php?cid=6>, .

黒田由彦・浅井南, 2013, 「『広域避難をされた方々の現状を正しく理解し今後のより有益な支援等につなげるためのアンケート調査』調査結果のご報告」,

<http://aichi-shien.net/modules/d3downloads/index.php?cid=6>, .

黒田由彦, 2014, 災害復興のビジョンと現実, 地域社会学会会報 No. 186.

黒田由彦, 2014, 「特集に寄せて」, 『東海社会学会年報』第 6 号, 5-6.

黒田由彦, 2014, 解題 東日本大震災: 復興の課題と地域社会学, 地域社会学会年報. 第 26 集.

黒田由彦, 2015, 「ポスト 3.11 の地域社会」の成果と課題, 地域社会学会年報. 第 26 集.

黒田由彦編, 2015, 「脆弱性とプリペアードネス」研究会活動報告書, 科学研究費・基盤研究(B) (研究代表者: 黒田由彦) 報告書.

自治体間支援研究会編, 2015, 東日本大震災 自治体間支援調査報告書, (科学研究費・基盤研究(B) (研究代表者: 黒田由彦) 報告書).

KURODA, Yoshihiko, 2016, The Great East Japan Earthquake and Change of Disaster Management in Japan: Toward Community-based Approach, International Comparative Study on Mega-earthquake Disasters: Collection of Papers Vol.1.

黒田由彦, 2018, 『『名古屋市南区における防災に関する社会調査』報告書 [概要版]』.

0-4-2 学会報告等

黒田由彦, 2012, 愛知県における避難の現状と支援, 社会学系 4 学会合同集会 「原発避難を捉える/考える/支える」(2), 法政大学.

黒田由彦, 2013, 異郷の被災者—愛知県における広域避難者の現状と被災者支援, 山口大学研究推進体公開シンポジウム「東日本大震災 3 年目の課題」, 山口大学.

黒田由彦, 2013, 東日本大震災における自治体間支援の研究 I—問題意識と分析視角, 地域社会学会第 38 回大会, 立命館大学.

黒田由彦, 2013, 復興の何が問題か—東日本大震災からの復興プロセスとガバナンス, 地域社会学会第 38 回大会, 立命館大学.

黒田由彦, 2014, 災害復興のビジョンと現実, 地域社会学会 2014 年度第 1 回研究例会, 首都大学東京.

辻岳士・黒田由彦, 2014, 原発立地地域における復興と「再稼働」—宮城県女川町・石巻市および女川原発 UPZ30 km 圏の自治体を事例として—, 日本社会学会第 87 回大会, 神戸大学.

辻岳士・黒田由彦, 2015, 地域復興と生活再建に対する住民の評価と意識—宮城県女川市における質問紙調査から—, 日本都市社会学会第 33 回大会, 静岡県立

大学.

辻岳士・黒田由彦, 2016, 原発立地地域住民の災害経験と原発への態度——宮城県女川町における質問紙調査の分析, 地域社会学会第 41 回大会、桜美林大学.

黒田由彦, 2016, 支援の創発性を生む社会的条件—災害支援の新しいかたち (大会シンポジウム報告), 日本社会学会第 89 回大会、九州大学.

黒田由彦, 2017, 南海トラフ巨大地震被害予想地域における住民の防災意識と防災対策の現状と課題, 第 107 回地域調査研究会、名古屋大学.

なお、意見書陳述者の研究業績全般については、下記を参照されたい。

<http://yskuroda.com/papers.html>

1 はじめに

本意見書の目的は、東日本大震災および福島第一原発事故後に愛知県に避難した世帯を対象として、2011 年、2012 年、2013 年、2018 年に実施した社会調査の結果に基づき、次の 2 つを明らかにすることである。

区域外避難の合理性

区域外避難がもたらした被害

なお、質問紙調査については、質問項目毎の単純集計表、一部のクロス集計表、その分析、および自由回答を付録として収録している。自由回答は、本文中でも引用しているので、適宜参照されたい。

各年の調査の概要は以下のとおりである。

2011 年

本調査は、愛知県被災地域支援対策本部被災者受入対策プロジェクト・チームによって実施された質問紙調査である。調査方法は、郵送による無記名調査である。2011 年 6 月 30 日に配布し、7 月 11 日を回収期限としている。調査対象は、受入被災者登録制度に登録する全世帯、407 世帯（2011 年 6 月 30 日時点）に配布し、174 世帯から回答を得た。回収率は 42.8%である。

調査結果は記入された調査票ごと愛知県被災地域支援対策本部被災者受入対策プロジェクト・チームから名古屋大学大学院環境学研究科黒田由彦研究室に提供された。

2012 年

本調査は、愛知県被災者支援センターの協力を得て、名古屋大学大学院環境学研究科黒田由彦研究室が実施したものである。調査方法は郵送による無記名調査、調査期間は 2012 年 5 月 11 日～5 月 31 日である。受入被災者登録制度に登録する全世帯、546 世帯（2012 年 4 月 30 日時点）に配布し、157 世帯から回答を得た。回収率は 28.9%である。

質問紙調査の調査票の末尾で面談形式での調査をお願いしたところ、2 名の世

帯に受け入れていただき、非構造化インタビュー調査を行った。以下本文中で引用する際は、2012 年 A 家インタビュー、2012 年 B 家インタビューと称する。

2013 年

本調査は、愛知県被災者支援センターの協力を得て、名古屋大学大学院黒田由彦研究室を調査責任者として質問紙調査を行った。調査方法は、郵送による無記名調査である。2013 年 9 月 5 日に配布し、9 月 30 日を回収期限として行った。2013 年 9 月 5 日現在で愛知県被災者支援センターが住所を把握している 511 世帯に配布し、213 票が回収された。回収率は 41.7%である。

2018 年

原告団を構成する世帯から 3 世帯を選択し、非構造化インタビュー調査を行った。以下本文中で引用する際は、2018 年 A 家インタビュー、2018 年 B 家インタビュー、2018 年 C 家インタビューと称する。

2 区域外避難の合理性

2-1 「状況の定義」

ここでは避難指示区域以外の地域における避難を区域外避難とよぶ。区域外避難に合理性があるかどうかについて検討する。

社会学では、人間は事後的に振り返って確認された客観的事実としての環境で生きているのではなく、その時点で認知可能な情報を元に組み立てられた「現実」で生活していると捉える。社会学ではその意味での「現実」を「状況の定義 definition of situation」と呼ぶ。「状況の定義」は個人の「状況の定義」の単なる総和ではなく、当該地域社会で生活する平均的な人々によって意識的・無意識的に共有されている集合的な現象として捉えられる。

したがって、考えなければならないのは、原発事故という想定外の事態に直面した原発周辺地域に住む人びとにとって、「状況の定義」がどのようなものであったかである。その上で、その「状況の定義」に対して、避難という行動を起こしたこと、また避難を継続しているということ、この両者に合理性があるかどうか判断されなければならない。

2-2 避難の合理性

「状況の定義」がどのようなものであったかについて、調査に基づき再構成してみよう。

最初に前提として、2つの事実を踏まえておかねばならない。第一に、原発事故に伴う危険性の客観的な性格である。飛散した放射性物質は、目に見えず、匂いもなく、色もないので、専門の測定機器を使用しなければ、被曝しているという事実自体が認知されない。

第二に、今回のような深刻な原発事故が起こることが住民にとって想定外だったということである。それは行政関係者ですら同様であった¹。原発は安全だという東電および政府の長年にわたる広報の下、「福島第一原発でまさか事故は起こらない」という考え方が当該地域の人々の意識に浸透していたと考えられる。下の語りが物語るように、インタビュー調査に応じてくれた人すべてが、原発事故が起こることを予想していなかった。

¹ 「事故以前に策定していた「原子力防災計画」（原子力安全委員会「原子力施設等の防災対策について」）は、今回のような深刻な事故を全く想定していなかった」（大島堅一・除本理史『原発事故の被害と補償-フクシマと「人間の復興」』大月書店、90頁）

一番ショックだったのが、国を信じていたのに裏切られたこと。日本は安全大国だと思っていた。(2018 年 A 家インタビュー)

事故前、わたしたちはあまりに原発に関心だった。…3 月 11 日に海岸線に（福島）県庁から避難命令が出たときも、原発のことは何も考えなかった。事故が起こるなどとは想像もなかった。福島は関係ないでしょ、と考えていました。(2018 年 C 家インタビュー)

ましてや、どの程度の原発事故が、どの範囲に、どの程度の危険性をもたらすかについて、原発周辺地域の住民は事前に科学的に正確かつ十分な知識をもっていたとはいえない。

以上の 2 つの前提の下で原発事故が勃発したのであるが、事故発生後、福島第一原発の周辺地域の避難指示区域外に住む住民の「状況の定義」に影響を与えたと考えられるのは、次の 4 点である。

第一に、刻々と変化する原発事故の状況について、十分な、かつ混乱のない首尾一貫した情報が、原発周辺地域の住民に対して、責任ある主体からタイムリーに与えられたわけではなかった、ということである。住民は TV などマス・メディアやパーソナル・ネットワークを通して得られる断片的な情報を頼りにする以外に選択肢がなかった。

3 月 12 日は夕方のニュースで爆発を知った。1 時間くらいまえからうわさは流れていた。…13 日に飯野町の避難所に行った。栃木、茨城の友人に電話したが、どこも混乱状態だった。…看護師仲間の間では、200～300km は離れた方がいいといううわさが飛び交っていた。(2012 年 B 家インタビュー)

第二に、時間の経過とともに、避難指示区域が変化したことである。3 月 11 日に福島第一原発の半径 3km 圏内に避難指示、3～10km 圏内に屋内退避指示が出されたが、翌日には半径 20km に避難指示が拡大した。3 月 15 日には屋内退避指示が 20～30km 圏内に拡大され、4 月 22 日には計画的避難区域と緊急時避難準備区域という新たな区域が設けられ、福島第一原発から 30km 以上離れた飯舘村等が指定された²。以上から、放射性物質の飛散に関してどのような状況にあるの

² 原発災害・避難年表編集委員会編『原発災害・避難年表-図表と年表で知る福島原発震災からの道』す

か政府が把握しきれておらず、対応が後手後手に回っているという印象を与えた。

第三に、事故直後における当時の政府のリスク・コミュニケーションの稚拙さである。原発事故発生後、政府は原発周辺地域の住民および国民に対して、「(原発事故は周辺住民に対して) 直ちに健康に被害を及ぼすものではない」というメッセージを送り続けた。しかしながら、避難指示区域が頻繁に変更され、政府の現状把握能力と対応力に疑問符がつけられている状況のなかで行われたために、「直ちに影響はないが、将来的にはあるかもしれない」という疑念を原発周辺地域の人々の心のなかに生み出したと考えられる³。

第四に、被曝の許容基準の設定に関する政府部内の非一貫性である。まず福島第一原発事故以前、通常時の一般公衆に対する線量限度は 1 mSv とされていた⁴。事故後、4 月 13 日に学校施設の放射線量の測定結果を巡り、どう対応するかの判断基準を国が示さないことへの混乱と戸惑いが福島県内の教育現場に広がり、それへの対応として 4 月 19 日に文部科学省は校舎と校庭の利用について基準を年間 20mSv にすると発表する。ところがその決定に対する国民からの反発を受け⁵、文科省は 5 月 27 日に校庭利用の基準を年間 1mSv に方針転換する。原子力災害対策本部が 2011 年 12 月 26 日に出した避難区域再編では、年間 20mSv 以下になると見込まれる地域を避難指示解除準備区域とし、避難指示を継続しつつも、復興のための対策を迅速に実施するとしている。他方で、環境省のウェブサイトでは、政府の除染の長期的目標は、年間 1 mSv 以下とされている⁶。ちなみに、3 ヶ月で 1.3mSv (年間 5.2mSv 相当) の実効線量を超えるおそれのある区域は、電離放射線障害防止規則により管理区域とされ、必要のある者以外は立ち入ってはならないとされ、(同規則第 3 条 1 項 1 号、4 項) かつ 18 歳未満の者を管理区域で労働させてはいけない (年少者労働基準規則第 8 条 35 号) とされてい

いれん舎、2018 年、27 頁。

³ 社会的コンテキストの変化を考慮に入れず、同じメッセージを発すると、意図したことは反対の効果をもたらしてしまうというのはコミュニケーションに関する社会学の公理である。

⁴ 「放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律」、「放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律施行令」、「放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律施行規則」、「放射線を放出する同位元素の数量等を定める件」の一連の法による。最後の「放射線を放出する同位元素の数量等を定める件」の第 14 条 4 項に、「規則第 1 条第 1 項第 2 号ハ及び第 5 号ハに規定する線量限度は、実効線量が 4 月 1 日を始期とする 1 年間につき 1 ミリシーベルトとする」とある。

⁵ たとえば、内閣官房参与の小佐古敏荘東京大学教授は年間 20mSv を上限に学校の校庭使用を認めた政府の安全基準に抗議して参与職を辞任した。

⁶ 環境省除染情報サイト http://josen.env.go.jp/about/method_necessity/goal.html

る。

以上から、福島第一原発の周辺地域の避難指示区域外に住む住民にとっての事故発生後の「状況の定義」は、最大公約数的に表現すれば；

- ① 知覚できない放射線による被曝に脅威を感じながらも、
- ② 信頼できる情報がなかなか得られず、
- ③ 事故対応に責任のある行政が一貫性のある対応をしておらず、
- ④ その結果原発周辺地域は区域外であっても将来重大な健康被害にみまわれるリスクのある状態に置かれている

以上のようなものだったと考えられる。

このような「状況の定義」の下では、原発周辺地域の避難指示区域外に居住する住民が、とりあえず予防的に避難しようという行動を起こしたとしても、それは十分に合理的な行動であったと評価することができるだろう。

2-3 避難継続の合理性

次に、原発周辺地域の避難指示区域外に居住する住民が避難を継続したことの合理性について検討しよう。避難を継続した人々の「状況の定義」に影響を与えたと考えられる要因は次の 3 点である。

第一に、福島第一原発事故以前、通常時の一般市民の年間被曝量は 1 mSv で規制されていた、という事実である。すでに述べたように、福島第一原発事故後、4 月 13 日に学校施設の放射線量の測定結果を巡り、どう対応するか判断基準を国が示さないことへの混乱と戸惑いが福島県内の教育現場に広がり、それへの対応として 4 月 19 日に文部科学省は校舎と校庭の利用について基準を年間 20mSv にすると発表した。ところがその決定に対する国民からの反発を受け、文科省は 5 月 27 日に校庭利用の基準を年間 1mSv に方針転換した。他方で、原子力災害対策本部が 2011 年 12 月 26 日に出した避難区域再編では、年間 20mSv 以下になると見込まれる地域を避難指示解除準備区域とし、避難指示を継続しつつも、復興のための対策を迅速に実施するとしている。さらに、環境省のウェブサイトでは、政府の除染の長期的目標は、年間 1 mSv 以下とされている。原発事故発生後も、政府が年間 1mSv という基準を意識しているのは明らかである。

第二に、総被曝量が 100mSv 以下の被曝に関して、科学的知見が確立されてい

ないということである⁷。科学的知識に限界があるのであれば、市民に対するリスクの見積もりとその処理を決定するのは、政治の役割になるが、すぐ上に述べたように、政府部内の見解は一貫性が欠如していた。もしも政府が、避難指示区域外の住民に対して、年間 1mSv 以上の被曝は科学的にリスクが否定できないことを理由に、放射線量の多寡に応じて、住み続ける場合はその後の起こりうる健康被害に対して補償し、他方避難する場合は移動と生活費用を補償する、というような方針をいち早く打ち出していたとすれば、リスクが集団化され、個々の家族に対する負担が軽減されたと思われる。しかし政府はそのような方針を打ち出すことはなかったため、事実上、リスクは家族を単位として個別化されることになった。つまり、原発周辺地域の避難指示区域外においては、個々の家族が、低線量被曝のリスクを抱えた地域に留まって低線量被曝による健康被害に留意しながら生活し続けるか、あるいは低線量被曝リスクのない場所に避難するか、という決断を迫られることになった。さらに、その決断がもたらす結果も個々の家族が引き受けることになった。

第三に、被曝の影響を受けやすいのが新陳代謝の活発な乳幼児から未成年の若者世代であるという事実である。それは、放射線によって傷つけられた DNA を参照して身体の再生が頻繁に行われるため、被曝の影響を受けるリスクが高まるという生物学的理由もさることながら、それを越えて彼らに精神的・心理的負担がかかることを見逃してはならない。具体的には、彼らはこの先被曝による影響が将来あるかもしれないという自分自身の身体の健康に関する不安とともに生きていかねばならない。また実際に数年から数十年後に何らかの病気が発症したとき、その先の教育や職業キャリアに制約がかかるという社会生活上のリスクを常に考慮に入れて生活しなければならないのである。

以上の 3 点を前提にして、原発事故から数ヶ月が経ち、原発事故の状況がある程度社会に明らかになった段階において、原発周辺地域の避難指示区域外に居住する住民の集合的な「状況の定義」がどのようなものであったか。それを再構成するならば、次のようになるだろう。

① 1mSv 以上被曝しても将来健康上の被害がないということは科学的に立証

⁷ 国際放射線防護委員会 (ICRP) は、「これ以下なら安全」と言える量はないとする「しきい値なし」モデルを採用している。そのモデルによれば、100mSv 以下の被曝についても健康影響がないとはいえず、むしろ被曝線量に応じた影響があると考えべきである。忘れてはならないのは、日本政府はそのモデルに準拠した ICRP2007 年勧告を考慮してきた、ということである。

- されておらず(逆に、被害があるということも科学的に立証されていない)、
- ② もしも将来ガンに罹患したとしても、それがこのたびの原発事故に伴う被曝が原因であることをその時点で証明することは極めて困難だと予想され、
 - ③ したがって、それら起こりうる健康被害に対する東京電力からの損害賠償や政府の公的サポートはほとんど期待できないと考えられ、
 - ④ 病気で苦しむのは自分だし、治療にかかる費用等一切も自分たち家族の負担となり、その後の教育や職業キャリアに少なからぬ制約がかかる

このような「状況の定義」から導きだされる一つの結論は、「確率は大きくないかもしれないが、もしも将来本当にガンに罹患したらその被害は極めて重大であるので、その事態を避けるためにはやむを得ず避難生活を継続するしかない」というものであったと推察される。原発事故以前の一般公衆の線量限度を超える被曝が見込まれる原発周辺地域の避難指示区域外に居住する住民が、避難生活の継続を選択したとしても、それは十分に合理的な行動だと評価することができるだろう。

もちろん、将来被曝が何らかの健康被害をもたらす可能性を意識しながらも、福島に留まるという選択肢もある。その選択肢の背後には、避難が生み出す経済的コスト、精神的コストが負担できないという理由、健康被害のリスク認知を低く見積もるといった理由等、様々な事情が考えられる。しかし、福島に留まるという選択肢が存在している事実は、避難という選択肢の合理性を否定する根拠にはならない。

さらに、事故の全貌が判明し、被曝がどの程度のものかという情報がほぼ地域社会に行き渡った後に、被曝リスクの少ない地域に避難する行動にも、合理性が認められる。

追加して強調しておきたいのは、事故直後避難した人々が避難を継続したこと、および原発事故後一定時間が経過した後での避難は、とりわけ未成年の子どもをもつ家族にとって重い課題だと受け取られた、という事実である。調査から明らかになったのは、避難継続・避難が低線量被曝による子どもの将来の健康被害を防ぐ予防的措置として行われたということである。

インタビューで繰り返し聞かれたのは、自分は被曝のリスクを抱えるとしても福島に住み続けていいが、子どもにはそのリスクを背負わしたくない、という親の声であった。次の語りは、もしも福島に留まり、将来子どもに被曝が原因と

疑われる病気が発症してしまったら、という脈絡でのものである。

子どもに、あのときなぜ逃げられなかったのと聞かれたら、親として何も答えられない。でも、なぜ逃げたのという問いには、(お前の命を第一に考えたからと) 答えられる。(2018 年 C 家インタビュー)

質問紙調査からは、核家族(夫婦と未成年の子ども)単位で避難するケースだけでなく、それが何らかの理由でかなわない場合は、どちらかの親が福島に留まって働いて家計を支え、片親と子だけが愛知県に避難するケースが少なくないことが明らかとなっている(多くは母子避難)。2012 年の質問紙調査によれば、被災前に福島県に在住であった回答者のなかで、核家族単位で避難したケースが 30.4%、母子(父子)避難が 29.4%であった。以上から、福島県から愛知県に避難したケースの 6 割が子どもの被曝を防ぐための予防的措置だった事実が浮かび上がってくる。

3 避難がもたらした被害

3-1 「強いられた避難」としての区域外避難と責任の所在

避難することによって何が剥奪されたかという第 2 の論点に移りたい。

最初に 2 点確認しておく。第一に、区域外避難の当事者にとって避難は決して望んだものではなかったということである。避難指示区域以外の避難は「自主避難」と呼ばれることがあるが、それは極めて誤解を招く言い方である。というのは、「自主避難」というと、あたかも自分から望んで避難したかのような印象を与えるからである。事実は、慣れ親しんだ土地を離れたい人はいなかったということだ。彼らは、やむを得ず泣く泣く避難したのである。

原発事故以前、福島第一原発周辺地域は年間 1mSv 以下の被曝という条件であった。それは全国的にみて、平均的な値である。ところが原発事故が起こり、年間 1mSv 以下の被曝という環境が失われた。年間 20mSv 以上の地域の住民は、原子力災害対策特別措置法に基づいて、政府によって避難させられ（これは、「自主避難」との対比で、「強制避難」とも呼ばれる）、それによって生じた損害は賠償され、また避難生活に伴う精神的苦痛には慰謝料が支払われている。年間 20mSv～100mSv の被曝のリスクに関して、すべての科学者が同意する知識は確立されていないにもかかわらず、である。将来癌に罹患する確率が統計学的に有意に高いと証明されていない被曝水準の地域に避難指示が出されていることを見た福島第一原発周辺地域の区域外に居住する人々の中から、被曝リスクを避ける予防的措置として避難という選択を行った人が出たことは、既に述べたように合理的な選択であった。しかしそれはいわば「強いられた選択」であった。

第二に、「強いられた」不本意な避難に責任をもつのは誰かという問題であるが、避難の原因は原発事故であったことを忘れてはならない。逆にいえば、原発事故が起こっていなければ、彼らは「ふるさと」を離れて避難する必要はなかったのである。突然の原発事故が、避難という現象の原因である。年間 1mSv 以下の被曝という原発事故以前の条件が回復された後にも、避難生活を継続するのであれば、それは避難者の自発的選択であり、その選択の結果生じる様々な損害に関して自己責任原則を適用するのが妥当である。しかし、年間 1mSv 以下の被曝という原発事故以前の条件が回復されない以上、自己責任原則を適用するのは妥当ではない。

避難指示区域内の避難であろうが、区域外の避難であろうが、原発事故が避難

という現象を生んだという事実が変わりはない。避難に伴う被害に関しても、年間 1mSv 以下の被曝という条件を破壊したことに責任を負う事業者に、損害賠償の責任があると考えられる。

原発事故から 1 年 2 ヶ月経過した区域外避難者の声を引用しておく。

私の福島の家は屋内にて線量が 0.2 マイクロシーベルト/時、屋外で 0.6～0.7 マイクロシーベルト、側溝の中は 4.0 マイクロシーベルトもあります。除染は学校等の公共施設や通学路だけで、一般住宅はそのままです。子供の帰郷しての就学率は小学校で 30%、中学校 40%、高校で 60% (24.4 現在) といわれています。昨年の 9 月 30 日に避難準備区域から一部解除になりましたが、幼い子供がいる世帯では不安に思って戻れないのです。子供や若い人のいない老人の多い町になってしまいました。働く場所もなく、病院は医者、看護師不足で安心して暮らせないからです。放射能物質を取り除くのに 40 年も 50 年もかかるといわれております。それとて完全に除染されるとは誰も思っておりません。原子力は 100%完全にコントロールできないことをこの事故で初めて知りました。私たちの故郷はいつ再生できるのでしょうか？子供達はいつ故郷に戻れるのでしょうか？ (2012 年質問紙調査・自由回答 12)

上の例では、放射線量を年間に換算すると、屋内は 1.752mSv、屋外では 5.256mSv～6.132mSv、側溝の中は 35.040mSv となる。故郷に帰りたいが、「幼い子供がいる世帯では不安に思って戻れない」というやるせない思いが表明されている。区域外避難は「自主避難」ではなく、「強いられた避難」であり、そこから生じた損害の賠償責任は原発事故を引き起こして事故以前の水準を越えた被曝をもたらした事業者にある。

3-2 「ふるさと喪失」、あるいは「地域生活利益の喪失」

では、この「強いられた避難」によって何が剥奪されたか。その剥奪によってどのような被害が生じたのか。

法学者の淡路剛久氏によれば、避難者は「地域での元の生活を根底からまるごと奪われた」⁸のであり、それは包括的生活利益としての平穩生活権の侵害である。ここで包括的生活利益としての平穩生活権は生存権、身体的・精神的人

⁸ 淡路剛久、2015、「包括的生活利益」の侵害と損害」(淡路剛久・吉村良一・除本理史編集『福島原発事故賠償の研究』日本評論社) 21 頁。

格権、身体権、財産権からなる権利である⁹。今回の原発事故のケースでは、包括的利益としての平穩生活権の侵害が引き起こした損害は、①被害者住民が高濃度汚染地域にとどまっていた間に放射能汚染に曝露したことによる深刻な健康被害の不安（危惧感）、②被害者住民が避難生活中に被った、そして被りつつある精神的被害、③放射能汚染によって元の地域から他の地域へ移住を余儀なくされた被害者住民の地域コミュニティの喪失（「地域生活利益の喪失」と精神的苦痛）、④移住を余儀なくされた被害者住民が他の地域で居住するための不動産損害、⑤環境損害である、と淡路氏は説く。ここで地域生活利益とは、□生活費代替機能、□相互扶助・共助・福祉機能、□行政代替・補完機能、□人格発展機能、□環境保全・自然維持機能であり¹⁰、地域生活利益の喪失とはそれらがすべて失われることである¹¹。

淡路氏とほぼ同じ論点を提出しているのが、環境経済学者の除本理史氏である。氏によれば、「原発事故によって失われたものとは、地域を構成していた『自然環境、経済、文化（社会・経済）』の一体性であり、さらにいえば『地域』そのもの…そこに住んでいた人々にとっては『ふるさと』¹²である。除本氏は、この「ふるさとの喪失」によって生じた被害とその補償について、次の表にまとめている¹³。

	① 地域レベルでの被害回復措置(原状回復に準ずる措置)	② 個別の被害者に対する措置	
		③ 金銭賠償で比較的容易に回復可能な被害	④ なお残る被害への措置
土地・建物	除染、維持・管理	再取得の費用を賠償	「ふるさと喪失」の慰謝料
景観	維持・管理	事業者の利益に反映されていた場合などに減収分を填補	
コミュニティ	セカンドタウン、二重の住民登録、帰還政策	コミュニティの諸機能に代わる財・サービスの費用を賠償	
諸要素の一体性	除染、帰還政策など		

⁹ 淡路剛久、前掲論文 23 頁。

¹⁰ 淡路剛久、前掲論文 23～25 頁。

¹¹ 淡路剛久、前掲論文 23～25 頁。

¹² 除本理史、2012、「被害の全面補償を求めて」（大島堅一・除本理史『原発事故の被害と補償』大月書店）91 頁。

¹³ 除本理史、2015、「避難者の『ふるさとの喪失』は償われているか」（淡路剛久・吉村良一・除本理史編『福島原発事故賠償の研究』日本評論社）200 頁。

除本氏のいう「ふるさと喪失」とは、人々が地域でつくりあげてきた生産・生活の諸条件を失ったことを意味する。人間は地域において、与えられた環境と自然資源のなかで、家屋、農地などの私的資産、各種インフラなどの基盤的条件、経済的・社会的諸関係を日々年々の営みを通じてつくりあげている。「ふるさと喪失」とは、それらすべてが失われることに他ならない。除本氏の「ふるさと喪失」は、淡路氏の「地域生活利益の喪失」と多少のずれはあるがほぼ重なっている。

意見陳述者は両氏の主張を首肯するものであるが、両氏によって十分に展開されていない被害が存在している。それは何か。

「ふるさと喪失」、あるいは「地域生活利益の喪失」による被害には、金銭賠償で回復可能な損害と金銭賠償では回復が困難なものがある。後者はさらに、景観や環境などのようにコミュニティ単位で回復措置が図られなければならないものと個別被害者単位で賠償などの措置が図られなければならないものに分かれる。上の表で、「④なお残る被害への措置」の「ふるさと喪失」の慰謝料に当たる部分である。

「ふるさと喪失」に伴う被害で、個別被害者単位で金銭賠償では損害回復が困難なもので想定されやすいのは、「ふるさと」が失われたという喪失感であろう。言い換えれば、「ふるさと」に対するノスタルジーのような主観的心情である。

しかし、「ふるさと喪失」に伴う被害で、個別被害者単位で金銭賠償では損害回復が困難なものは、「ふるさと」の喪失感にとどまらない。原発事故によって、突然住み慣れたコミュニティから引き離されたことは、個々人にとって意味ある人生を成り立たせている中核的な条件が剥奪されるという重大な結果をもたらした。これについては、淡路氏も除本氏も十分に触れているとは思われない。

次項で社会学の視点から明らかにしたい。

3-3 存在論的安全の概念と「希望剥奪」

20 世紀後半以降、社会理論の分野で最も功績を残している英国の社会学者 A. ギデンズは、日常生活において社会秩序が安定的に再生産される基礎は、社会的行為のレベルにおいて存在論的安全が成立することだと論じている。存在論的安全 ontological security とは、自己と社会的アイデンティティに関わる基本的な実存的条件を含めて、自然的世界ならびに社会的世界が、いまここに現れているまさにそのままのものであることへの確信 confidence あるいは信頼

trust である¹⁴。

私見によれば、存在論的安全には 3 つの側面がある。第一に身体性の側面であり、明日も明後日も、これまでどおりこれからもずっと健康状態が続いていくという確信である。第二に環境の側面であり、明日も明後日も、これまでどおりこれからもずっと変わらずそこにあるという確信である。第三に社会関係の側面であり、家族・親族・親しい友人との関係が、明日も明後日も、これまでどおりこれからもずっと続くという確信である。

存在論的安全は普段の日常生活においては自明性のなかに埋没し、意識されることがない。意識されるのは、存在論的安全が脅かされるとき、あるいはそれが失われそうになったときである。日常生活における自明な前提が脅かされると、人々は存在論的不安の状態に置かれる。逆に存在論的安全は人々に安心の感覚を与え、その上で日常生活における様々な制度を前提とした意図的な社会的行為がなされるが、現在の延長線上に将来設計や生活目標を明確に、あるいは漠然と思い描くという精神的営為がその中核にある。前者は短期的現象であるが、後者は時間の長期的持続を前提とする。人間の生活は過去から現在へ、現在から未来へと続く連続的時間に沿って営まれているのであって、現在という一時点だけが孤立して存在しているわけではない。

以上説明してきた存在論的安全の概念を用いるならば、原発事故が剥奪したのは、存在論的安全、およびその上で取り結ばれていた将来設計や生活目標すべてであると表現できるだろう。

第一に、避難以前に被曝したことによって、この先健康状態に病変が生じるかもしれないという不安に常に苛まれるようになった。自分のことだけでなく、家族の健康についても同様の不安が消えなくなった。次の語りにあるように、子どもに関する親の不安は健康被害に留まらず、将来の人生にまで及ぶ。

(検査で) 子どもの甲状腺に嚢胞があることがわかった。これが一生尾を引く懸念材料。昔の原爆みたいに、あいつ福島から来たと差別されるかも。結婚に影響しないかと、長期にわたって不安。原発事故がなかったら、こんなこと心配する必要はなかった。親として一生不安の種です。(2018年B家インタビュー)

第二に、すぐそこにあった自然環境は、放射性物質によって汚染され、これま

¹⁴ Giddens, A., 1984, *The Constitution of Society*, Polity Press, p. 375.

でいつもそうだったように自分に恩恵を与えてくれるものではなくなった。見かけは原発事故前と全く変わらないにもかかわらず、次の語りにあるように、手を触れることさえはばかれるよそよそしい存在に変貌してしまった。

地元で（周囲の農家から）貰っていた食べ物、そういう自然からの恩恵に触れることもできない。いわきに行くと、（この食べ物）大丈夫かと思ったりする。どうしても、汚染された土地だと疑いの目で見てしまう。（2018 年 B 家インタビュー）

第三に、自分を取り巻く安定した社会関係が失われた。避難は空間的移動であるので、社会関係の喪失を必ずしも伴うものではない。家族は空間的に離れても家族であるし、親族関係も同様である。しかし近接性が関係成立の条件であるような近隣との関係、あるいはもっと広くコミュニティの中での社会関係は、原発事故によって失われる。原発事故以前のようなつきあいはできないのである。近隣やコミュニティだけでなく、福島 of その場所と結びついた職場の同僚や知人・友人との関係も、原発事故以前のようなつきあいはできないという意味において、失われる。実は、被曝を避けるための区域外避難に特有の社会的メカニズムによって、単なる空間的移動であれば起こらなかったであろうと思われる社会関係の劇的な変化が、親族関係、同僚、知人・友人との関係において起こったのであるが、これについては項を改めて述べる。

最後に、原発事故は、過去から現在、現在から未来へと連続する時間の流れを現在で遮断した。避難者自身が時間の流れを遮断したのではない。彼らに責任を負わせることのできない原発事故によって、ある日突然遮断されてしまったのである。それによって、個々の人々、個々の家族が思い描いていた固有の将来設計や生活目標が奪われた。将来設計と生活目標を「希望」と言い換えれば、原発事故は人々から未来の「希望」を剥奪したと言える。

（福島の家では）外を眺めるだけで癒やしがあった。野ウサギがいたりして。（子供が乳幼児だったので）子どもに福島の記憶すらもたせてあげられなかった。（福島で）こんな経験をさせてあげられたのに、と考えるとくやしい。（2018 年 A 家インタビュー）

（福島で）あれだけの家をつくって、夢がかなって、老後が楽しみだった。孫が家に来て、とび跳ねるように歩くところを想像して。・・・友人も多い方だった。毎日楽しくて。（原発事故で）滝から落ちた。（2018 年 B 家インタビュー）

子どもの教育を受ける権利が半分以上奪われた。福島ではお金の心配がなかった。どういう勉強をしたくても、全てをカバーできた。こっちに来て収入が半分になり、ローンで家を買ったので、貯金がゼロになった。私立の高校は無理、旅行はできない、エアコンもない。子どもにも我慢させている。(福島では通っていた) スイミング、公文、塾、英会話、すべてだめ。…大学受験の選択肢もお金の面で狭くなる。(2018 年 C 家インタビュー)

3つの語りが示しているのは、福島でのその時点における生活の延長線上に当たり前のように描いていた未来が、自分には責任のない原発事故が起こり突然遮断されてしまったことに対するやりきれない思いである。

以上論じてきたように、原発事故がもたらした放射性物質による地域社会の汚染は、原発事故以前の水準以上の被曝を避けるという当然の権利を行使した避難者から存在論的安全を奪い、さらに彼らの人生の意味の中核に位置していた未来の「希望」を剥奪したのである。

3-4 社会関係の剥奪-分離・決裂・喪失

上述したように、原発事故による避難は、人々から安定した社会関係を剥奪した。注意を促したいのは、社会関係の剥奪のされ方は一様ではないということである。以下、分離、決裂、喪失の3つの様態に分けて説明する。

第一に、分離とは家族・親族が空間的に離れて分かれて暮らすことを意味する。分離の場合、つきあいの質に変化はない。多くの母子避難(父子避難)がこれに当たる。また、すぐに会いに行ける距離にいた父母と離れたケースも含まれる。距離は移動時間と移動コストに比例するので、原発事故以前のように気軽に会えなくなる。会う回数が限られるだけでなく、ふれあう時間も短縮される。なによりも、原発事故がなければ一緒に暮らせていたはずの家族と離ればなれで生活するのは、余分な経済的コストがかかると同時に、精神的苦痛が伴う。

離れている家族とはやくともに暮らしたい。子供二人を連れての生活で不安であったり張りつめたり、時に子供にあたってしまうこともありつらい。(2012 年質問紙調査・自由回答 4)

高齢の親が福島に残った場合、分離はより深刻になる。次の語りが示すように、避難による分離は、大切な家族と共に過ごす貴重な時間を奪ってしまう。

嫁に行くときに父母に「長女はずっとそばにいてくれるものだと思っていた」と言われた。でも車で行けば 35～40 分ですぐだったから。福島を離れるとき、父母が「(そんなに遠くだと) もう会えないわ」と。父と母、あと何年生きられるだろう。いざ離れると年に 1～2 回しか会えない。死に目に会えるかどうかわからない。(2018 年 B 家インタビュー)

第二に、決裂とは人間関係が壊れることを意味する。平たくいえば、「喧嘩別れ」である。決裂は家族、親族、職場の同僚、友人・知人など、誰との間でも起こる。この決裂による安定した社会関係の剥奪は、区域外避難特有の現象であるといつてよい。避難指示区域内の場合、避難は否応のないものなので、異論を差し挟む余地がない。しかし区域外避難の場合、「福島から避難する／避難せず福島に留まる」という 2 つの真逆の選択肢が存在するので、被曝のリスクをどう捉えるかを軸にして異論が生じ、争いが起きるのである。被曝のリスク認知は、科学的知識の多寡、情報リテラシー、パーソナリティ、政府への信頼度、経済状況(避難可能性)などの要因によって影響されるので多様である。被曝による子どもの健康被害を予防的に防ぐことを最重視する考え方は、リスク認知の低い人の眼には、「政府を信頼せず、すべてを捨てて苦勞する道を選ぶ」理解不能な行動に映る。そこでは理性的説得よりも感情的対立が発生しやすい。そして感情的対立の先にあるのが決裂である。

次に示すのは、孫の被曝を避けるために子ども夫婦と避難した老夫婦(の妻)の語りである。

福島を出てきた時点で(夫の)兄弟 6 人とは疎遠になった。お前たちとはもう縁を切ったとも言われた。子ども夫婦にそそのかされて、その歳になって出て行くこともないのに。3 番目の姉に、「一生 S と Y【子ども夫婦の名前、引用者注】を恨んでやる」と言われて、頭にきて喧嘩した。(2018 年 B 家インタビュー)

人生の恩人と慕っていた仲人と決裂したケースもある。その仲人は娘の名前をつけてくれ、毎年誕生会に呼んでくれていた人である。

(私たちが避難したことがわかったとき)もうお前達のことは知らない、勘当だと言われた。自分の孫は(放射線を気にして)福島に呼ばないのに、他人の子はそこに住めと言うのか。いじめか。その後、誕生会に呼ばれなくなって、いまは関係なし。(2018 年 A 家インタビュー)

一)

第三に、喪失とは同僚、友人・知人との間で、人間関係が消滅することを意味する。喪失は、関係消滅を意図するかどうかによって二つのバリエーションに分かれる。一つのタイプは、空間的距離のために会う機会が減少し、それを意図しているわけではないが自然消滅に至る場合である。いま一つは、意図して会うことを避けて自然消滅に至る場合であり、潜在的決裂とも言える。次の語りは後者の例である。

避難したことに後ろめたさはある。(避難して1年後)夏に福島に一時的に帰省して、前の職場(病院)にあいさつにいったとき、「逃げて行った人」と喧嘩腰で言われ傷ついた。(福島が住める環境になったら戻って看護師を)続けますと言っているが、(福島に戻っても)もう一緒には働けないと思った。(2012年B家インタビュー)

次の語りは、自然消滅タイプの喪失の例である。

福島にいるときは、旦那の愚痴を話せる人がいて、年に1回青森から4、5日泊まりに来てくれて、お酒飲んで話すんです。いい毒抜きでした。母くらいの歳の人だけれど仲が良かった。そういう人が(名古屋には)いない。(2018年A家インタビュー)

以上見てきたように、当たり前のようにそこにあり、人生の土台を構成していた社会関係が、原発事故をきっかけとして失われていった。静かにフェイドアウトするように消滅していく関係もあれば、良好な関係を取り結んでいた相手が表出する敵意に傷つきながら決裂する関係もあった。それらすべては原発事故によって突然前触れもなくもたらされたものである。原発事故がなければ社会関係は剥奪されることもなく、存在論的安全を支え続けていたであろう。原発事故は、回復不能な不可逆的被害をもたらしたのである。

3-5 二次被害としての自責感情と周囲への警戒心

区域外避難による被害は、避難という行為が直接的にもたらす一次被害に留まらない。避難した後に、二次被害が生じるのである。二次被害として、ここでは自責感情と周囲への警戒を指摘したい。

自責感情とは、福島から避難したことに対する自分を責める感情である。区域外避難の場合、避難しなかった人が多数派である。そのような状況下においては、避難したことは福島を見捨てたことだという意識、あるいは福島を裏切ったことだという意識が生じても不思議ではない。少し長い引用になるが、2013 年質問紙調査の自由回答から典型的な自責感情を表出している例を示そう。

今になり、PTSDの症状が出ている。子供や夫がいるのでずっと元気にふるまってきたが、自分へのケアを怠り、今、人と深い付き合いになり、過去を知られることがこわくなり、人からの誘いを断ってしまったり、素直に人とつきあえなくなっている。まるで過去の犯罪を隠して生きているようです。当時SNSで傷つき、現在のコミュニティでLINEに誘われても参加できない。付き合い悪いと思われていると思うが、その理由を説明することもできない。主人が社会的責任の大きい職業であり、私も同業の資格を持っているため、ずっと避難してきたことを恥じてきた。多分一生自分を許せない。ゆえに、幸せな日常を、幸せに思っているわけではないのではないか、とか、旅行に行っても、幸せな反面、罰当たりなことを・・・と自分を同時に責めている。やっと最近、福島のニュースを見られるようになってきた。それは少し前進。ただ、自信を持って生きられなくなり、家族の前でも、誰の前でも泣けず、元気にふるまい、正直とてもつらいです。(2013 年質問紙調査・自由回答 102)

周囲への警戒心とは、避難先において自分たちが福島から被曝を避けるために避難してきたことが知られたら差別を受けるかもしれないという懸念を意味する。避難者が避難先で集住しているような地域（たとえば北海道）では、周囲が同じ境遇の人々なので、自分たちが福島から避難している事実を周囲に隠す必要はない。しかし、愛知県の場合、避難者は分散して居住しており、周囲に住むのは福島第一原発事故に関する詳しい事実関係についてほとんど知識のない一般の人々である。区域外避難者が恐れるのは、すべての福島からの避難者が巨額の賠償金を受け取っているという誤解であり、また子どもが学校で「放射能がうつる」というような理不尽ないじめに合うことである¹⁵。

福島から来たというだけで補償金をたくさんもらっていると思われる。実際自主避難のため生活が苦しいが、そのように思われているので、今は被災者ということを隠して生活してい

¹⁵ 「原発避難いじめ」は社会問題になった。社会問題となる契機となった横浜市の中学1年生の男子生徒のケースはまだ記憶に新しい。

る。(2012 年質問紙調査・自由回答 37)

(名古屋に来て) 幼稚園は年少からだったからスムーズに輪に入れた。でもまだ被災したことも、福島から来たことも言っていない。言って(相手の態度が)変わったらいやだなと思って。どういう形で言おうか、迷っている。(2012 年 B 家インタビュー)

上の 2 つの語りに示されているように、区域外避難者は福島から避難してきたことが周囲にばれないかと常に心配しなければならない状況に追い込まれている。それは、明日も今日と同じように安定した人間関係が続くだろうという感覚をもてない状態であり、存在論的安全が疎外されている状態、言い換えれば存在論的不安に置かれているといえるだろう。

4 おわりに

意見書陳述者は、原理的に原子力利用に反対する者ではない。原子力利用のための研究を進めることは人類史的に意義のあることだと考えている。

しかしながら、原子力利用はリスクがある。言い換えれば、原子力発電所にひとたび重大な事故が起これば、当該地域はもとより広汎な周辺地域に深刻な災禍を人の一生を軽く越える長期間にわたって引き起こすというリスクである。原子力使用に付随して起こる事故は、通常の事故とは異なる次元において捉えなければならない。

したがって、原子力利用を試みる主体には、高度の倫理感とそれに立脚した現実的管理能力が要請される。原子力を利用するのであれば、極めて低頻度であっても想定外の事故が起こりうるという認識の下に、事故がもたらす被害を完全に補償する制度を社会に整備しておかなければならない。もしも一国の政府が原子力利用を国策として推進するのであれば、起こりうる事故への対策は自国を越えた国際的義務であり、補償制度の整備は国民に対して当然果たすべき義務である。

今回の原発事故の社会的処理は、国際世論の注視のもとで行われている。諸外国は、チェルノブイリ以外に発生したことの無い未曾有の原発事故に対して、わが国政府がどのような政治理念に立脚し、どのように法的に処理するかを注視している。誇張ではなく、原子力利用という人類史的な挑戦に必然的に付随するコスト（原発事故）をどう処理すべきかに関して、他の諸国からモデルとされるような創造性をわが国の法曹界が生み出せるかどうかがこの裁判で問われていると思う。

付録 I 2011 年 愛知県広域避難者質問紙調査の分析

目次

1. 愛知県に避難するまで
 - 1.1. 被災時の住所、世帯の離散
 - 1.2. 愛知県を選んだ理由
 - 1-3. 避難者受入制度の情報の獲得
2. 愛知県での暮らし：居住形態、世帯構成・離散、戸惑い、利用サービス
 - 2.1. 居住形態
 - 2.2. 現在の就労状況
 - 2.3. 避難先で生活を始める苦労
3. 今後の避難生活に関する方針
 - 3.1. 行政に期待する支援
 - 3.2. 定住志向
4. 小括

1. 愛知県に避難するまで

この章では、回答者が愛知県に避難するまでの経緯について記述する。具体的には、避難者の被災時の住所、被災前後での世帯構成の変化、愛知県を避難先を選んだ理由、避難の際に活用した情報収集の方法について明らかにする。

1-1. 被災時の住所、世帯の離散

表 1-1：被災時の住所

	度数	相対度数 (%)
岩手県	19	10.9
宮城県	45	25.9
福島県	102	58.6
その他	8	4.6
計	174	100%

愛知県被災者支援センターに登録する避難者の大部分は、東北 3 県から移っている。そのうち最も多いのは福島県で、全体の 58.6%におよぶ。

表 1-2：被災前に同居していたが、現在も被災地に残っている人数

	度数	相対度数 (%)
いない	84	48.3
1 人	43	24.7
2 人	17	9.8
3 人以上	30	17.2
計	174	100%

回答者の 48.3%は被災前の世帯構成を維持して、いわゆる一家全員で避難している。一方で、一緒に暮らしていた成員と離れて避難してきた避難者も、51.7%に達する。

表 1-3：被災時の住所と被災地に残る世帯成員数

		被災地に残る世帯員				N
		いない	1 人	2 人	3 人	
被災時の住所	岩手県	31.6%	31.6%	5.3%	31.6%	19
	宮城県	57.8%	11.1%	6.7%	24.4%	45
	福島県	50.0%	25.5%	11.8%	12.7%	102
	その他	12.5%	75.0%	12.5%	0.0%	8
全体		48.3%	24.7%	9.8%	17.2%	174

上掲の表は、被災時の住所と被災地に残る世帯構成員との関係を示している。福島県からの避難者については、被災前に暮らしていた全員で避難してきた割合は、5 割である。

1-2. 愛知県を選んだ理由

表 1-4：愛知県に避難した理由（MA3）

	度数	相対度数 (%)
家族・親族がいる	134	77.0
知人・友人がいる	26	14.9
自分や家族が以前に住んでいた	20	11.5
会社等の関係がある	17	9.8
仕事を探せる	16	9.2
行政や地域の支援が期待できる	12	6.9
地震・津波の不安が少ないと思った	21	12.1
原発・放射能の不安が少ないと思った	60	34.5
特に理由はない	2	1.1

(N=174)

避難先として愛知県を選んだ理由のうち、最も多いのは「家族・親族がいる」77.0%、次いで「原発・放射能の不安が少ないと思った」34.5%である。

愛知県は南海トラフ巨大地震の懸念が喧伝されている地域である。しかし、ほかでもない愛知県を避難先に選んだ理由として、そのような地震・津波の不安より放射能の不安が、まず考慮されている態度がうかがえる。

表 1-5：被災時の住所と愛知県に避難した理由

		愛知県に避難した理由	
		家族・親族がいる	原発・放射能の不安が少ない
被災時の住所	岩手県	78.9%	0.0%
	宮城県	73.3%	20.0%
	福島県	78.4%	44.1%
	その他	75.0%	75.0%
全体		77.0%	34.5%

(N=134)

(N=60)

また、避難先として愛知県を選んだ理由「家族・親族がいる」「原発・放射能の不安が少ないと思った」と被災時の住所との関係を確認する。家族・親族を頼って避難してきたのは、いずれの住所にも共通する。しかし、原発事故や

放射能への懸念については、東北 3 県のうち、福島県が相対的に高い値を示している。ちなみに、「その他」も顕著に高い割合を示しているが、その内訳のほとんどは関東圏に住んでいた避難者である。

1-3. 避難者受入制度の情報の獲得

表 1-6：愛知県の避難者受入の情報をどのように入手したか (MA)

	度数	相対度数 (%)
避難所や自治体等の情報	16	9.2
自分で調べた	32	18.4
友人や家族	67	38.5
事前に入手できなかった	28	16.1
愛知県に来てから入手した	90	51.7

(N=174)

上記の表 1-6 は、愛知県が整備した避難者受入れ制度に関する情報をどのように獲得したかについて表している。最も多いのは「愛知県にきてから入手した」51.7%である。次に「友人や家族」38.5% がつづく。反対に、「避難所や自治体等の情報」は 9.2%に過ぎない。愛知県に行政や自治体から直接に情報を受け取り避難してきた者は少ないようだ。

避難者がこの制度にたどり着くまでの経緯について、表 4：愛知県に避難した理由と併せて推察する。避難を決めた者は、まず原発事故による放射能の被曝から逃れることを最優先に考えていた。その避難先として念頭に浮かんだのは、身寄りを期待できる家族や親戚の住所であり、それが愛知県であった。そして、愛知県に避難してきた後、避難者世帯が自力で、あるいは親族の紹介で、愛知県が整備した避難者受入れ制度があると知った。このような経緯であったとすれば、避難は一刻の猶予もない問題として理解されていたこと、それが突然に始まったこと、十全に準備をする余裕がなかったことが想像できる。

2. 愛知県での暮らし

この章では、愛知県に避難してきた人々の暮らし向きについて記述する。参照する項目は、避難先の居住形態、就労状況、愛知県で生活を始めるにあたって直面した問題や苦勞、愛知県で利用した健康福祉サービス、日々の情報の入手方法である。

2-1. 居住形態

表 2-1：現在の居住形態

	度数	相対度数 (%)
県営住宅	59	33.9
市町村営住宅	31	17.8
その他公営住宅（県公社・名古屋市公社・UR ・雇用促進住宅）	15	8.6
実家・親戚・知人宅	40	23.0
民間賃貸住宅	18	10.3
社宅	9	5.2
その他	2	1.1
計	174	100%

避難者が愛知県に身を寄せてからの住まいのうち、最も多いのは「県営住宅」33.9%である。その後に「家族・親戚・知人宅」23.0%、「市町村営住宅」17.8%とつづいた。

2-2. 現在の就労状況

表 2-2：現在、主たる家計維持者の就労状況

	度数	相対度数 (%)
就労している	86	53.4
仕事を探している	25	15.5
仕事をする予定はない	21	13.0
その他	29	18.0
計	161	100%

主に家計を維持する者の就労状況については、「就労している」53.4%が最も高い割合を示している。しかし、それ以外、すなわち現時点で就労していないと答える割合も、およそ半数におよんでいる。

2-3. 避難先で生活を始める苦勞

表 2-3：愛知県に避難して当初、困ったこと (MA3)

	度数	相対度数 (%)
住宅が決まらない	19	10.9
入居した住宅の設備環境が良くない	26	14.9
生活物資や家電製品がない	82	47.1
生活資金が少ない	69	39.7
相談相手いない	14	8.0
家族が離れて生活する	58	33.3
介護事業所や医院がわからない	12	6.9
アレルギー対応食等が入手できない	0	0.0
体調を崩した	37	21.3
見知らぬ土地で生活環境が変わる	82	47.1

(N=174)

表 2-3 は、愛知県に避難し暮らしていくにあたって、どのような問題に直面したかを尋ねている。比較的に割合が高いのは、「生活物資や家電製品がない」47.1%、「見知らぬ土地で生活環境が変わる」47.1%、「生活資金が少ない」39.7%、

「家族が離れて生活する」33.3%、「体調を崩した」21.3%であった。避難者のおよそ半数が生活を新たに立て直すうえで、被災以前に使用していた調度品の買い直しや生活する土地について覚えることが負担だったようだ。

表 2-4：愛知県で利用した健康福祉サービス (MA)

	度数	相対度数 (%)
介護保険	14	8.0
障害福祉	8	4.6
保育所への入所	27	15.5
保健センター等での健康相談	10	5.7
こころの健康相談	4	2.3
妊婦・乳幼児の健康診断	13	7.5

(N=174)

愛知県には、市井の生活を手助けする行政サービスが整備されている。上述では避難者が抱える生活課題を確認したが、彼・彼女らはそのような制度を活用しているのか。表 10 に列挙するサービスに限れば、概して利用する割合は低い。だが、そのうち比較的に高いのは、「保育所への入所」15.5%である。

表 2-5：現在、どのように情報を入手しているか (MA3)

	度数	相対度数 (%)
新聞	63	36.2
テレビ・ラジオ	85	48.9
インターネット	59	33.9
家族や親族との連絡	50	28.7
知人・友人からの口こみ	33	19.0
愛知県や市町村からの郵送物	129	74.1
被災時の自治体からの郵送物	29	16.7
地元に戻る	6	3.4
入手できていない	8	4.6

(N=174)

記述に先立ち、あらかじめ断っておきたい。上掲の表題は、アンケートの設問をそのまま引用している。ここで言う「情報」がどのような内容に関しての

情報であるかは、判然としない。原発事故や復興、愛知県の行政サービス、あるいは全国に散らばっている避難者の現状についての情報かなど、幅を持って解釈できる。しかし、直前の設問が「愛知県の避難者受入れの情報」（本稿の表 6）と表現しているので、ここでも同様に「愛知県の避難者受入れの情報」として取り扱う。

表 1-6 では、制度そのものを知る経緯は、「愛知県に来てから入手した」以外には「友人や家族」の比率が高かった。しかし、その後は「愛知県や市町村からの郵送物」74.1%が最も高く、以下には「テレビ・ラジオ」48.9%、「新聞」36.2%、「インターネット」33.9%とつづく。反対に、「家族や親族との連絡」28.7%や「知人・友人からの口こみ」19.0%は、相対的に低い割合である。

3. 今後の避難生活に関する方針

この章では、愛知県の避難者が考える今後の暮らし方について記述する。参照する設問は、行政に期待する支援、定住志向である。

3-1. 行政に期待する支援

表 3-1：行政に期待する支援（MA）

	度数	相対度数（%）
住宅	61	35.1
生活物資	55	31.6
資金支援	60	34.5
健康福祉	45	25.9
教育	24	13.8
就労	41	23.6

(N=174)

行政に期待する支援については、「住宅」35.1%、「資金支援」34.5%、「生活物資」31.6%が比較的に高い割合を示している。愛知県に避難して、生活の立て直しにまず必要なことは生活の拠点となる場所、必要なものを得るためのお金、生活を助ける物資だったようだ。

平成 30 年 8 月 24 日

3-2. 定住志向

表 3-2：今後の予定について

	度数	相対度数 (%)
このまま愛知県に住む	45	26.9
愛知県ではないが、地元以外に転居する	3	1.8
夏休み頃までに地元に戻る	2	1.2
年末頃までに地元に戻る	2	1.2
来年 3 月頃までに地元に戻る	3	1.8
時期はわからないが、いつか地元に戻る	29	17.4
原発事故後の見通しによって決める	53	31.7
見通しがたたない	27	16.2
その他	3	1.8
計	167	100%

この調査が実施されたのは、東日本大震災の発災から約 4 ヶ月の時点である。この時点で、今後の定住の展望として最も多かった回答が「原発事故後の見通しによって決める」31.7%である。次いで「このまま愛知県に住む」26.9%である。

表 3-3：被災時の住所と定住志向

		定住志向					N
		このまま 定住する	被災地以外 に転居	帰郷する つもり	原発事故の進捗 で判断する	見通しが 立たない	
被災時の 住所	岩手県	41.2%	0.0%	35.3%	0.0%	23.5%	17
	宮城県	51.2%	2.4%	26.8%	7.3%	12.2%	41
	福島県	15.3%	2.0%	17.3%	50.0%	15.3%	98
	その他	25.0%	0.0%	25.0%	12.5%	37.5%	8
全体		27.4%	1.8%	22.0%	32.3%	16.5%	164

表 3-2 の選択を 5 つに整理し被災地の住所との関係を表示しているのが、表 3-3 だ。福島県の回答を確認すると、「原発事故の進捗で判断する」50.0%、「見

通しが立たない」15.3%を合わせて約6割が今後暮らしていく場所を決めかねていることがわかる。これは他県と比べて顕著に高い割合である。

4. 小括

第 1 章では愛知県に避難するまでの経緯や理由を確認した。避難者にとっては原発事故による放射能から逃れることが喫緊の課題であり、突然に始まったこの問題に一刻の猶予もないまま対応した様子が窺い知れる。それは被災当時、福島県に在住していた者によく該当する。

第 2 章は、避難者の愛知県での暮らし向きに焦点を絞った。上記の通り、特に放射能の被曝から急いで避難した世帯にとっては、いわば着の身着のままの避難だったと考えられる。愛知県への移動は、万全に準備をしたわけでもないし、事前に計画していたわけでもなかった。それはいわば強いられた転居であった。そのため、住居の手配、職探し、生活資金の工面、生活用品の確保、そして新しい土地での生活に慣れること、それらすべてが突然に課された負担であったと推察される。

第 3 章は、今後の避難生活に関する方針について注目した。暮らし向きを立て直すための援助、たとえば住居や生活資金の手当などが求められている。また、今後どこに住まうかについては、放射能汚染を懸念している避難者にとっては、自分自身だけで判断して解決できる問題としては受け取られていない。というのも、2011 年のこの時点においては、原発事故がこの先収束するかどうかもわからず、したがって身の安全も保障されていないからである。たとえ元の土地に帰りたいとしても、自分だけでは手に余る、あるいはとても解決できそうにないということで、見通しが立てられなかったのではないかと思われる。

以上が、東日本大震災を契機に愛知県に現れた避難者、特に原発事故によって飛散した放射性物質による被曝を避けるために避難を選択した人々の現状についての考察である。

付録Ⅱ 2012 年 愛知県広域避難者質問紙調査の分析、および自由回答

1. 回答者の属性について
2. 愛知県に避難するまで
 - 2.1. 被災時の住所、世帯の離散
 - 2.2. 愛知県を選んだ理由
 - 2-3. 避難者受入制度の情報の獲得
3. 愛知県での暮らし
 - 3.1. 居住形態、世帯構成
 - 3.2. 就労状況、家計の状況
 - 3.3. 交流会への参加
4. 今後の展望、定住志向
5. 小括
6. 自由回答

1. 回答者の属性について

この章では、回答者の属性データを記述する。内容は、性別、年齢、婚姻、学歴である。

表 1-1：性別

	度数	相対度数 (%)
男性	53	34.2
女性	102	65.8
計	155	100%

回答者は「男性」34.2%、「女性」65.8%である。性比は、およそ 1 : 2 である。

表 1-2：年齢

	度数	相対度数 (%)
20 代	15	9.8
30 代	66	43.1
40 代	22	14.4
50 代	12	7.8
60 代	18	11.8
70 代以上	20	13.1
計	153	100%

回答者の年齢を 10 歳階級別に整理して表示したのが、表 1-2 である。顕著に割合が高いのは「30 代」43.1%である。

表 1-3：婚姻

	度数	相対度数 (%)
未婚	12	7.7
既婚	116	74.8
離婚	16	10.3
死別	11	7.1
計	155	100%

回答した時点での婚姻の状態については、「既婚」74.8%が、最も多い。

表 1-4：学歴

	度数	相対度数 (%)
中学校	11	7.2
高等学校	62	40.5
高専、短大	22	14.4
大学・大学院	40	26.2
専門学校	18	11.8
計	153	100%

学歴については「高等学校」40.5%が、最も高い。次いで「大学・大学院」26.2%である。

2. 愛知県に避難するまで

この章では、回答者が愛知県に避難するまでの経緯について記述する。具体的には、避難者の被災時の住所、被災前後での世帯構成の変化、愛知県を避難先に選んだ理由、避難の際に活用した情報収集の方法について明らかにする。

2.1. 被災時の住所、世帯の離散

表 2-1：被災時の住所（都県別）

	度数	相対度数 (%)
岩手県	11	7.2
宮城県	31	20.3
福島県	102	66.7
関東地方	9	5.9
計	153	100%

愛知県被災者支援センターに登録する避難者の大部分は、東北 3 県から移っている。そのうち最も多いのは福島県で、全体の 66.7%である。

表 2-2：被災時に同居していたが、現在も被災地に残っている人はいるのか

	度数	相対度数 (%)
いる	70	46.1
いない	82	53.9
計	152	100%

回答者の 53.9%は、被災地に残っている世帯構成員はいない。一方で、回答の時点で、一緒に暮らしていた成員と離散してしまっている避難者は、46.1%におよぶ。

表 2-3：被災時の住所と被災地に残る世帯構成員

		被災地に残る世帯員		N
		いる	いない	
被災時の住所	岩手県	45.5%	54.5%	11
	宮城県	27.6%	72.4%	29
	福島県	49.0%	51.0%	100
	関東地方	77.8%	22.2%	9
全体		46.3%	53.7%	149

被災時の住所と被災地に残っている世帯構成員との関係を示しているのが、表 2-3 である。福島県に限れば、世帯を離散して避難を続けているという回答が、拮抗している。

2. 2. 愛知県を選んだ理由

表 2-4：転居の理由（MA）

	度数	相対度数（%）
住宅に損害を受けた	51	32.5
家族・親族を失った	4	2.5
仕事を失った	32	20.4
原発事故による放射能被害を避ける	106	67.5
その他	29	18.5

(N=157)

転居の理由については、「原発事故による放射能被害を避ける」67.5%が顕著に高い割合を示している。

表 2-5：被災時の住所と転居の理由

		転居の理由（MA）			N
		住宅の損害	失業	被曝の回避	
被災時の 住所	岩手県	91.7%	33.3%	0.0%	12
	宮城県	56.7%	50.0%	26.7%	30
	福島県	18.6%	12.7%	85.3%	102
	関東地方	11.1%	0.0%	88.9%	9
全体		31.4%	20.9%	67.3%	153

上掲の表 2-5 は、転居の理由のうち比較的に割合の高い 3 つの回答と被災時の住所の関係に着目している。そのうち、「被曝の回避」を選んでいる割合が高いのは「福島県」85.3%と「関東地方」88.9%である。

表 2-6：愛知県に避難した理由（MA）

	度数	相対度数（%）
愛知県に住む親・子ども・孫から避難を勧められた	44	28.0
愛知県に住む親戚から避難を勧められた	33	21.0
愛知県に住む友人・知人から避難を勧められた	22	14.0
支援制度が整っていると聞いた	12	7.6
親戚や近所の人々、知人などが愛知県に避難した	5	3.2
自分や家族が以前に住んでいた	37	23.6
仕事が見つかりそうだった	24	15.3
原発や放射能の影響が少ないと考えた	73	46.5
その他	29	18.5

(N=157)

避難先として愛知県を選んだ理由のうち、最も多いのは「原発や放射能の影響が少ないと思った」46.5%である。それに続くのは「愛知県に住む親・子ども・孫から避難を勧められた」28.0%、「自分や家族が以前に住んでいた」23.6%、「愛知県に住む親戚から避難を勧められた」21.0%である。

放射能の被曝への懸念と家族・親族をきっかけとする理由が、比較的多数である。

2-3. 避難者受入制度の情報の獲得

表 2-7：愛知県の受入体制に関する情報をどのように入手したか (MA)

	度数	相対度数 (%)
避難所の掲示板等	1	0.6
避難所での避難者同士の口コミ	3	1.9
市や県の職員から	52	33.1
テレビ・ラジオ	16	10.2
インターネット	42	26.8
twitter や facebook などの SNS	4	2.5
先行した避難者の方の情報	7	4.5
その他	46	29.3

(N=157)

愛知県が整備する受入体制についての情報は「市や県の職員から」33.1%、「インターネット」26.8%という経路で入手する割合が比較的高い。一方で「その他」29.3%の方法を使って獲得する場合も少なくないようだ。

表 2-8：愛知県の受入体制について重視した項目 (%)

	重視	まあ重視	あまり重視せず	重視せず	計
住宅の提供	50.7	6.4	19.3	23.6	100%
生活資金	11.4	17.4	30.3	40.9	100%
生活用品	13.6	17.4	37.9	31.1	100%
子どもの教育	28.7	13.9	18.0	39.3	100%
周囲の人々の理解	20.9	16.4	33.6	29.1	100%
雇用相談	14.4	10.4	32.8	42.4	100%
母子避難の受入	14.5	9.4	31.6	44.4	100%

また、愛知県が整備する受入体制のうち「重視」「まあ重視」された項目は、「住宅の提供」が約6割と最も高い。「子どもの教育」についても4割弱に達するが、反対に「重視せず」39.3%におよんだ。

3. 愛知県での暮らし

この章では、愛知県に避難してきた人々の暮らし向きについて確認する。参照する項目は、被災時・避難先の居住形態、世帯構成、家賃支払いの見通し、生活費の工面、家計の状況、交流会への参加などである。

3.1. 居住形態、世帯構成

表 3-1：現在の住所

	度数	相対度数 (%)
名古屋市	55	36.2
三河地方	42	27.6
尾張地方 (尾張・海部)	35	23.0
尾張地方 (知多)	12	7.9
その他	8	5.3
計	152	100%

愛知県における避難先の住所は、「名古屋市」36.2%が最も多い。つづいて「三河地方」27.6%、「尾張地方 (尾張・海部)」23.0%を含めて8割強を占める。

表 3-2：被災時の居住形態

	度数	相対度数 (%)
一戸建て (持ち家)	81	51.9
一戸建て (借家)	18	11.5
公団・公営の賃貸アパート・マンション	8	5.1
分譲マンション	8	5.1
民間の賃貸アパート・マンション	30	19.2
社宅・寮	10	6.4
その他	1	0.6
計	156	100%

被災する以前にどのような住まいで暮らしていたかを示しているのが、表 3-2 である。最も多いのが「一戸建て（持ち家）」51.9%である。

表 3-3：現在の居住形態

	度数	相対度数 (%)
県・市町村営住宅	40	25.5
愛知県および名古屋市の住宅供給公社の住宅	10	6.4
UR 賃貸住宅・雇用促進住宅	4	2.5
民間のアパート・マンション（県の借上げ制度利用）	37	23.6
民間のアパート・マンション	22	14.0
企業から提供された社宅・社員寮	4	2.5
家族・親族宅	31	19.7
知人・友人宅	4	2.5
その他	5	3.2
計	157	100%

反対に、現在（回答した時点）の住まいについては、「県・市町村営住宅」25.5%が最も多い。僅差で「民間のアパート・マンション（県の借上制度利用）」23.6%がつづく。また、「家族・親族宅」19.7%も比較的に高い割合である。

表 3-4：避難先で同居しているか

	度数	相対度数 (%)
同居している	138	89.0
同居していない	17	11.0
計	155	100%

避難先の住居で誰かと同居していると回答する者は、約 9 割におよぶ。

表 3-5：避難先での世帯構成

	度数	相対度数 (%)
単身者	18	11.6
母子・父子家族	43	27.7
夫婦のみ	24	15.5
核家族	40	25.8
三世帯家族	24	15.5
その他	6	3.9
計	155	100%

世帯構成の内訳は、「母子・父子家族」27.7%、「核家族」25.8%が比較的に高い割合を示している。

表 3-6：2年後に家賃を払える見通し

	度数	相対度数 (%)
払える見通しがある	14	17.7
払える見通しがない	22	27.8
今のところ、わからない	29	36.7
その頃には、故郷に帰るつもり	6	7.6
その他	8	10.1
計	79	100%

記述に先立ち、あらかじめ断っておく。この調査は2012年に実施しており、ここで言う「2年後」とは2014年にあたる。その年に「愛知県被災者用賃貸住宅借上制度」が終了し、避難者自身で家賃を支払う可能性があった。

最も多いのは「今のところ、わからない」36.7%である。「払える見通しがない」27.8%は、「払える見通しがある」17.7%と比べて、高い割合となっている。

3. 2. 就労状況、家計の状況

表 3-7：被災前の世帯年収

	度数	相対度数 (%)
100 万未満	4	2.9
100～195 万未満	22	16.1
195～330 万未満	35	25.5
330～695 万未満	53	38.7
695～900 万未満	19	13.9
900～1800 万未満	4	2.9
計	137	100%

被災する以前の世帯あたりの年収については、最も多いのは「330～695 万円」38.7%、次いで「195～330 万円」25.5%である。

表 3-8：被災以前の雇用形態

	度数	相対度数 (%)
正規雇用	49	31.6
非正規雇用（パート、アルバイト等）	31	20.0
会社経営、自営業	14	9.0
家族・親類が経営する会社・店舗等での就業	1	0.6
内職	1	0.6
農林漁業	3	1.9
不動産活用等による収入	2	1.3
働いていなかった	44	28.4
その他	10	6.5
計	155	100%

被災する以前において、回答者がどのように働きお金を得ていたかについて記述しているのが、表 3-8 である。回答は大きく 3 つに分かれている。最も多いのは「正規雇用」31.6%である。次いで多いのが「働いていなかった」28.4%である。3 番目が「非正規雇用（パート、アルバイト等）」20.0%だ。

表 3-9：現在の雇用形態

	度数	相対度数 (%)
正規雇用	30	19.6
非正規雇用 (パート、アルバイト等)	36	23.5
会社経営、自営業	6	3.9
家族・親類が経営する会社・店舗等での就業	1	0.7
内職	1	0.7
働いていない (求職活動中)	24	15.7
働いていない (求職活動していない)	46	30.1
その他	9	5.9
計	153	100%

一方で、現在 (回答した時点) の雇用の状態については、「働いていない (求職活動していない)」30.1%が、最も多い。その後に「非正規雇用 (パート、アルバイト等)」23.5%、「正規雇用」19.6%がつづいた。「働いていない (求職活動中)」15.7%も、比較的には高い割合におよんでいる。

表 3-10：被災前と現在の雇用形態

		現在の雇用形態			N
		正規雇用	非正規雇用 (パート・アルバイト等)	働いていない (求職活動していない)	
被災前の雇用形態	正規雇用	40.8%	20.4%	26.5%	49
	非正規雇用 (パート・アルバイト等)	12.9%	41.9%	19.4%	31
	働いていなかった	2.4%	26.2%	59.5%	42
全体		19.7%	23.0%	30.3%	152

被災前と現在の雇用形態のうち、それぞれ回答の多かった上位 3 つの関係を確認する。被災前に正規雇用で働いていた回答者のうち、およそ 5 割が非正規雇用か失職の状態に変わっている。

表 3-11：働いていない（求職活動していない）理由（MA）

	度数	相対度数（%）
子育てや介護のため、就労できる状況にない	24	42.1
自分自身の体調がすぐれないため、 就労できる状況にない	13	22.4
他に収入があるので、当面就労する必要がない	6	10.3
近日中に帰郷または他地域への転居を 予定しているため、就労していない	4	7.0
その他	21	36.2

(N=57)

回答した時点で働いておらず、かつ求職活動もしていない理由で最も多かったのは、「子育てや介護のため、就労できる状況にない」42.1%が突出している。

表 3-12：被災時の住所と働いていない（求職活動していない）理由

		働いていない理由（MA）		N
		子育て・介護	自身の体調	
被災時の住所	岩手県	0.0%	25.0%	4
	宮城県	33.3%	33.3%	9
	福島県	43.6%	17.5%	39
	関東地方	100.0%	25.0%	4
全体		42.9%	21.1%	56

また、被災時の住所と働いていない理由については、福島県に限れば、子育てや介護を理由とする割合が、他地域に比べてより高い割合である。

表 3-13：どのように生活費を工面しているか (MA)

	度数	相対度数 (%)
自らが働いて得た収入	75	47.8
被災地にいる家族からの送金	33	21.0
こちらにいる親戚・知人の援助	14	8.9
貯金の切り崩し	68	43.3
失業保険	8	5.1
生活資金貸付など公的資金	7	4.5
東京電力からの賠償金	37	23.6
義捐金などの支援金	25	15.9
その他	33	21.0

(N=157)

生活費の工面の方法については、「自らが働いて得た収入」47.8%、「貯金の切り崩し」43.3%が、総じて割合が高い。次いで「東京電力からの賠償金」23.6%、「被災地にいる家族からの送金」21.0%も全体的には少なくない。

以下では、性別、年齢、世帯構成との関係を、順を追って確認したい。

表 3-14：性別と生活費の工面

		生活費の工面 (MA)			N
		自前の収入	被災地の家族からの送金	貯金の切り崩し	
性別	男性	54.7%	0.0%	41.5%	53
	女性	43.1%	32.4%	45.1%	102
全体		47.1%	21.3%	43.9%	155

生活費の工面に関する性別との関係について明示しているのが、表 3-14 である。顕著な違いは「被災地の家族からの送金」を受けているのは、女性だけであることだ。また、「自前の収入」で工面することも、女性の方が若干少ないようである。

表 3-15：年齢と生活費の工面

		生活費の工面 (MA)			N
		自前の収入	被災地の家族からの送金	貯金の切り崩し	
年齢	20代	73.3%	0.0%	46.7%	15
	30代	60.6%	33.3%	40.9%	66
	40代	50.0%	27.3%	54.5%	22
	50代	41.7%	8.3%	50.0%	12
	60代	27.8%	11.1%	38.9%	18
	70代以上	5.0%	0.0%	40.0%	20
全体		47.7%	20.3%	43.8%	153

次に、年齢と生活費の工面との関係についてだが、「貯金の切り崩し」は全世代に共通する方法である。特徴的な違いを挙げれば、「被災地の家族からの送金」が30代、40代に多いことだろう。

表 3-16：世帯構成と生活費の工面

		生活費の工面 (MA)			N
		自前の収入	被災地の家族からの送金	貯金の切り崩し	
世帯構成	母子・父子家族	41.9%	48.8%	53.5%	43
	核家族	72.5%	0.0%	37.5%	40
	夫婦のみ	41.7%	0.0%	50.0%	24
	三世帯家族	25.0%	25.0%	41.7%	24
全体		48.4%	20.6%	43.2%	155

最後に、世帯構成との関係について記述する。世帯構成は、回答の比率が高い上位4つを列挙している。「核家族」と「夫婦のみ」の世帯は、「自前の収入」と「貯金の切り崩し」で切り盛りしている。一方で、とりわけ「母子・父子家族」は、「被災地の家族の送金」を頼りにしていることがうかがえる。

表 3-17：毎月の家計の状況

	度数	相対度数 (%)
余裕がある	3	1.9
余裕はないが足りている	42	27.3
あまり余裕はないが生活はできる	45	29.2
ぎりぎり生活できる水準である	34	22.1
足りない	30	19.5
計	154	100%

毎月の家計の状況については、「余裕がある」または「余裕はないが足りている」との回答は、約 3 割である。一方で、「足りない」の比率は約 2 割におよび、生活の水準を維持する程度に賄えているのは、およそ 5 割である。

3.3. 交流会への参加

表 3-18：交流会の認知 (%)

	度数	相対度数 (%)
知っている	145	94.2
知らない	9	5.8
計	154	100%

避難者同士の交流会が開催されていることは、「知っている」が 9 割弱である。

表 3-19：交流会への参加 (%)

	度数	相対度数 (%)
参加した経験がある	64	42.7
参加した経験がない	86	57.3
計	150	100%

そのうち、参加した経験がない回答者の方が、過半数に達している。

表 3-20：今後、交流会に参加する意思

	度数	相対度数 (%)
参加する	70	47.9
参加しない	76	52.1
計	146	100%

今後、交流会に参加することを考えている回答者は、おおよそ半数ほどである。

表 3-21：参加しない理由 (MA)

	度数	相対度数 (%)
自分は参加する対象にあてはまらないと思う	17	22.4
仕事や子どもの部活動などで日時が合わない	17	22.4
開催場所が遠く、交通手段がない	27	35.5
家族の介護や体調が良くないので参加できない	6	7.9
自分の体調や慣れない場所のため、出かけることができない	13	17.1
場の空気（雰囲気）が自分には合わない	18	23.7
他の参加者が少ない	3	3.9
有用な情報が手に入らない	7	9.2
マスコミなどのメディアの取材を受ける	15	19.7
プライバシーが侵害される	9	11.8
被災者という立場に抵抗がある	16	21.1
その他	16	21.1

(N=76)

交流会に参加しない理由について最も多いのが、「開催場所が遠く、交通手段がない」35.5%である。また「仕事や子どもの部活動などで日時が合わない」22.4%といった、生活の都合も少なくない。ほかには、「自分は参加する対象にあてはまらない」22.4%、「場の空気（雰囲気）が自分には合わない」23.7%、「被災者という立場に抵抗がある」21.1%という心理的な理由も挙げられている。

4. 今後の展望、定住志向

この章では、愛知県の避難者が考える今後の暮らし方について記述する。参照する設問は、行政に期待する支援、定住志向である。

表 4-1：被災前に暮らしていた住所へ戻るつもりはあるか

	度数	相対度数 (%)
はい	44	29.9
いいえ	103	70.1
計	147	100%

被災する以前に暮らしていた住所へ戻るつもりがあるのは、約 3 割である。反対に、戻ることを考えていない避難者が、およそ 7 割である。

表 4-2：戻らない理由 (MA)

	度数	相対度数 (%)
以前住んでいた地域の復興のめどが立っていない	42	37.2
愛知県が気に入った	24	21.2
放射線による被曝を避ける	69	61.1
その他	36	31.9

(N=113)

以前の住所に戻らない理由については、「放射線による被曝を避ける」61.1%が顕著に高い割合を示している。次いで高いのは、「以前住んでいた地域の復興のめどが立っていない」37.2%である。

表 4-3：今後の定住についての見通し

	度数	相対度数 (%)
愛知県に定住することを考えている	59	37.6
被災前に住んでいた住居に戻ると考えている	22	14.0
被災前に住んでいた地域の近くに戻ると考えている	14	8.9
上記以外の場所に定住することを考えている	5	3.2
現時点ではわからない	57	36.3
計	157	100%

(N=157)

今後どこに住居を構えるかの見通しは、「愛知県に定住する」37.6%と「現時点ではわからない」36.3%が、拮抗する結果である。一方で、「被災前に住んでいた住所に戻ると考えている」や「被災前に住んでいた地域の近くに戻ると考えている」といった、いわゆる帰郷を考えている避難者は、表 4-1 でも見た通り、およそ 3 割である。

表 4-4：被災時の住所と定住志向

		定住志向					N
		愛知県への定住	被災前の住所	被災前の住所の近く	左記以外の場所	わからない	
被災時の住所	岩手県	33.3%	16.7%	8.3%	8.3%	33.3%	12
	宮城県	46.7%	10.0%	10.0%	3.3%	30.0%	30
	福島県	38.2%	14.7%	7.8%	2.0%	37.3%	102
	関東地方	22.2%	22.2%	0.0%	11.1%	44.4%	9
全体		38.6%	14.4%	7.8%	3.3%	35.9%	153

また、被災時の住所との関係を参照してみる。福島県に限れば、「愛知県への定住」38.2%と「わからない」37.3%に大きく分けられている。東北その他 2 県と比べて、大きな違いは見られない。

5. 小括

本調査の結果から、東日本大震災を契機に現れた避難者について考察する。2011 年の調査との比較も加味したい。

第 2 章は愛知県に避難するまでの経緯を整理している。福島県の避難者に限って言えば、2011 年の調査とほぼ同じ結果である。避難者にとっては原発事故による放射能から逃れることが喫緊の課題であり、突然に始まったこの問題に一刻の猶予もないまま対応した様子が窺い知れる。

第 3 章では、避難者の愛知県での暮らし向きに焦点を当てた。2011 年の調査では、特に放射能の被曝から急いで避難した世帯にとっては、いわば着の身着のままの避難であり、移住に万全に準備をしたわけでもないし、事前に計画していたわけでもなかった。それはいわば強いられた転居であった。そのため、住居の手配、職探し、生活資金の工面、生活用品の確保、そして新しい土地での生活に慣れること、それらすべてが突然に課された負担であった。

2012 年の調査では、それから 1 年経過した経済的な状況について明らかにしている。避難者の大多数にとって、毎月の家計はあまり余裕がない。それは、被災前後での雇用形態が変わったこと（正規雇用から非正規雇用へ）、世帯の分離（夫は福島にとどまり、母子だけが避難する）に伴う二重家計、あるいは愛知県でもそもも職が見つからないこと等々によるものと推測される。

第 4 章は、避難者が考えている今後の避難生活の展望を分析した。被災する以前の住居や地域へ戻るつもりがない世帯が多数であった。しかし、だからと言って、愛知県あるいは現住所に定住を決めきれない態度もうかがえる。元に住んでいた地域の復旧・復興が進み、被曝からの安全が確認できれば戻るつもりでいる、もしくは戻りたいと考えているが、その判断がつかないので、決断を見送っていると察せられる。2011 年の調査と同様、避難・帰還、それに伴う生活を立て直すという問題は、自分自身だけで判断して解決できる範囲を越えた困難だと受け取られている。

以上の通り、東日本大震災を契機に現れた避難者、特に原発事故による放射能の被曝を恐れて避難を選択した人々は、1 年が経過しても、その生活は容易ではない。愛知における生活は、原発事故によって強いられた、経済的、心身的な負担の連続である、愛知に避難してきた人々が原発事故以前に福島で享受していたライフスタイルと生活水準は、いまだ遠い目標である

6. 自由回答

【1】去年の三月に避難のために日進市に来た。一時避難であった事や被災地の市役所倒壊のため住民票等の異動などができない状態にあっても、小学校、中学校への入学、転入を認めてもらえ子供達は元気に通学できている。一方、今年1月にあった4月採用の介護保険の募集に市役所防災課の職員の方の手伝いもあって雇用志願書を提出した。雇用条件に看護師とあったが自分が准看護師の資格しか持ってないと伝えたところ、その件については面接時にという話になった。しかし面接前日の夕方、電話で「来ていただいても仕方がない」と言われてしまった。被災者、まして福島県からの転入者は受け入れ頂けないのかなとショックを受けた。資格の問題なら面接のときにという話だったはずなのに…。市役所にはとても親切にしてくれる職員もいるが、ショックで誰にも話せず悩んでいた。

【2】こちらに来て区の窓口で支援の情報を知った。宮城県では情報を知ることができなかったのが残念。支援してくれる人には快く対応してもらえ感謝している。自転車、家具の提供、その他多額なカード類も送ってもらえ利用させてもらった。本当にありがとう。メディアの情報を得るにつれて被災地は物理的にも精神的にもかなりの遠さを感じる。「なぜガレキ処理の受け入れはできないのですか?!」やはり“他人ごと”と思わざるを得ない。修学旅行先には被災地を。風評被害も悲しい。国会議員の先生方には国会を被災地で行ってほしい。

【3】仕事オフの日のアポなしの家庭訪問には腹立たしさを感じた。せっかく来てくれたので玄関先では失礼と思い接待したが、3人も来て電話一本なぜ出来なかったのか。そういうやり方が愛知県・名古屋市なのか。けがで入院中のこのお便り（情報誌）の休止を係りの方にお問い合わせしたが配布され、防犯上クレームが来た。名古屋市の陸前高田への支援も美談だが、所詮行って「やってやる」という感覚にしか受け取れない。ガレキ受け入れの問題もそのあたりにあるのではないか…その個人の目の高さを感じてほしい。

【4】離れている家族とはやくともに暮らしたい。子供二人を連れての生活で不安で合ったり張りつめたり、時に子供にあたってしまうこともありつらい。愛知県から様々な支援をしてもらい本当に涙が出るほど嬉しかった。(お米、子供への入園の手作り品等々)被災して本当に大変だったけど、こんなやさしい方がたくさんいるんだととてもうれしかった。言葉では言い表せないくらい感謝している。

【5】ただただ感謝の思いでいっぱい。ボランティアの方も古くからの友人も、現在のご近所さんも。やさしく助けて下さりありがたい。

【6】<困っていること>

帰りたいが帰れない(放射能)

<解決してほしいこと>

???

<良かったこと>

退職後も働きづめ病院に通う時間もないほどの生活が失職によりピリオドが打てた。新規の生活をはじめることができた。被災地を離れたことで、子供たち(東京在住)を支援できる。東京の水道水が放射能汚染された時、名古屋から水道水を送れた。福島で生活していたら孫も呼べない。(一例)

<伝えたいこと>

国、電力会社が推進している原発の瑕疵責任。事故を起こしても誰も責任を取った人がいないこと。政府(行政)は非常に住民を見殺しにすることがよくわかった。事故が起きても個人の生命や財産は守られないこと。この国では地震は無くない。原発のある限りいつでも逃げられるよう持家を持つべきではないという教訓を得た

【7】現在市営にすんでいる。△被災者として手厚くしてもらっている市ボランティア団体のみ感謝している。一般の人たちの無理解さにはほとんどです。

現在の仕事の時間が短く、収入が減ったこと

以前もボランティアに出ていたが、今はボランティアされる立場になり名古屋市の素晴らしい活動にびっくり。私でも何か出来ることがあればお手伝いしたいと思っています

【8】交流会に赤ちゃんも連れて行っていいのか知りたい。方言が違うので出かけても話をするのをためらってしまう。子育てを通じて友達を作っていきたいのでこれから進んで外に出たいと思う。愛知県はとても住みやすいと感じている。いつも手厚い支援ありがとう。

【9】困ったことはいろいろあるが解決できないことばかり

【10】二年目になり生活はだいぶ落ち着いた。でもまだわからないこと、不安なこともたくさんあるので交流会等で情報交換をしていきたい。愛知県への避難は知り合いもない中で、とにかく家族で落ち着いた住宅を求めてという気持ちだったが、支援して下さるセンターの方やボランティアの方に助けられて今こうして生活しており、こちらに来て本当に良かったと思う。

【11】県の借り上げ住宅制度の期間延長を強く希望している。(大内)

【12】娘夫婦が共稼ぎであったので、孫二人(小学5年の女子、小学1年の男子)を生まれた時から10年余育ててきたので、今年三月に娘の夫の都合で宮城県名取市に移住したため孫の面倒を見れなくなって非常に淋しい。孫の成長を楽しみに一緒にくらししてきたので心の中にぽっかり穴があいたよう。いずれ娘も就職すると思うので、孫がカギっ子になることを不憫に思う。私たち夫婦が福島に戻っても娘の家まで車で2時間もかかるため日常的な世話をすることは不可能。孫のこれからが一番心配。

身体一つで避難してきたので、当初親戚のみんなに温かく迎えてもらい、またその隣人知人から日用品の支援をいただき、本当にその厚意にびっくりし恐縮したことを昨日のように思い出す。物心両方から暖かい援助を頂き誠に暗夜に光を見出した気がした。その後常滑市、愛知県から心強い励ましと生活物資の給付と医療費の免除等で生活の基盤ができたことを感謝し厚くお礼申しあげます。

国の原子力政策について

「トイレのないマンション」原発の廃棄物処理方法も最終処分地、中間処分地も確立しないままこの狭い日本。地震国に原発54基も作って、間もなく原発施設内の廃棄物一時保管所もいっぱいになるという、先の見通しもないまま進めて

きたことに強い憤りを覚えます。

私の福島の家は屋内にて線量が 0.2 ミリシーベルト、屋外で 0.6～0.7 ミリシーベルト、側溝の中は 4.0 ミリシーベルトもあります。除染は学校等の公共施設や通学路だけで、一般住宅はそのままです。子供の帰郷しての就学率は小学校で 30%、中学校 40%、高校で 60% (24.4 現在) といわれています。昨年 9 月 30 日に避難準備区域から一部解除になりましたが、幼い子供がいる世帯では不安に思っただけで戻れないのです。子供や若い人のいない老人の多い町になってしまいました。働く場所もなく、病院は医者、看護師不足で安心して暮らせないからです。放射能物質を取り除くのに 40 年も 50 年もかかるといわれております。それとて完全に除染されるとは誰も思っておりません。原子力は 100% 完全にコントロールできないことをこの事故で初めて知りました。私たちの故郷はいつ再生できるのでしょうか？子供達はいつ故郷に戻れるのでしょうか？原発の再稼働は絶対に反対しなければなりません。若い夫婦がせっかく立てた終の住家を手放し二重ローンに苦しみながら生きてゆかねばならないなんて今回限りでたくさんです。乱文にて失礼します。

【13】借り上げ住宅等、申請してから許可になるまでの時間がかかりすぎる（愛知県だけでないと思うが行政の仕事は遅い）

名古屋市、愛知県等いろいろ支援していただき感謝している

南相馬自宅の除染完了予定 26 年 7 月になっているのでそれまで帰る、帰らないの判断ができないので先行き不明。大変困っている。

【14】生活用品の支援、イベントなどの支援、コミュニケーションの支援、with カードなどの支援、とても助かりました。これからもイベントなどの参加をしていきたいです。いつも支援ありがとうございます。

【15】色々な支援をいただき感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。

東電との賠償問題→手続き、問答では時間がかかりすぎる。東電は避難民の気持ちに本当にわかっていない。

【16】なにかまわらず 3 月 16 日、やっと飛行機のチケットをネットで三日がかり

でこちらにすむ姉夫と夫の会社の方にとって頂き、放射能が子供に当たらないよう、毛布でグルグルに巻き空港へ行きました。こちらへついたときは“助かった”の一言しか出ませんでした。そのため、今まで支援いただいた事、人とのつながり、人間に本当に最後に必要なものはなん何なのか。一つ一つがありがたく、一年間は涙が止まりませんでした。私たちはいち早くこちらへ来たため、まだ県も動いてなく、県営へも一カ月かかり入ることができましたが、子供のためとは言え、覚悟は決めて仕事を辞めてきましたが、言葉、県民性の違いに戸惑い、精神的、体力的にボロボロです。子供を預けて少しだけでもゆっくりしたいです。

【17】おかげさまで子供達、いいお友達にも恵まれ、学校に元気に通っています。マスコミに出るたびに愛知の皆さんどう受け止めるのか不安でした。「家族で一緒に生活した方がよいから戻りなさい」「愛知にいる私たちも大変でつらいのよね」という方もいらっしゃいましたが「勇気をもらった」「一緒に頑張ろう」という励ましのお言葉もありました。私たちが愛知にすることで、普段の生活が当たり前でないことに気づいてもらうきっかけになれば幸いです。「足るを知る」福島にいるお母さんたちの不安を解消できる活動をし続けたいと思います。

【18】引っ越して三カ月なので生活していくだけで大変です。

【19】出来ればこのまま定住も考えていますが家のローンも残っておりこちらでのマンション代が払っていけるか不安。

後は仕事を頑張るしかありません。

住所を移しても賠償や支援が受けられるようにしてほしい。

【20】福島にすんでいたなら味わえなかった環境が愛知県にはたくさんあります。またそれのおかげや、市の職員さんのバックアップのおかげで、避難というくらいイメージを、プラスに捉え、楽しみな移住として、切り替えて、住むことができます。子供達も、大変満足しており「福島には帰りたくない」と言っています。県民性も豊かでいい人ばかりです。これからもがんばれそうです。ただ親・兄妹と離れてしまったのは淋しいです。

【21】地元ではなく、毎日、日々の生活をしていくための収入を求め、働いているだけのため、地域の情報があまり分からない。お得な情報（スーパーなどの安売りなど…）とかがわかるような事や、その他支援があれば嬉しい。

【22】まだ一年経ってないですが…
基本的に支援に頼らず生きていけるようになりたいと思っています。
いつまでも被災者ではられない。

「23」外出時など「被災者（地）」に対する心ない言葉。
いろいろな支援を今後も続けてほしい。

【24】原発賠償金の支払いがない、前回の 8 万、60 万（孫）の一回限りに終わるそう。避難者への賠償金を定期的に支給し、生活費を補てんしてもらいたい。無駄な出費と持家の維持管理をしないとダメになり、財産が全部ダメになってしまう。

【25】支援というものが本当に受ける側の人たちに望まれるものとして形をなしていないのではないか。必要とされる物品をはるか遅れたときに届けようとしたり等、何故に受け取る側の意向とかを知らずとしないのだろうか？

【26】このようなアンケートには二度と（戻りたいにきまっているので）答えたくないし、答えない。いくら答えなくても良いといっても被災者感情をあまりにも無視した失礼な質問が多すぎる。自分や家族に置き換えたらこんな質問ができるとは思えない。はっきり言ってしかるべき機関があれば、相談したいと思うくらい傷ついた。

【27】仕事がないこと、週に 2、3 回でもいいから仕事がしたい。
色々免除してもらっていること、ありがとうございます。

【28】愛知県に避難してきて良かったと思う。県において働く場をいただいたり、現在住んでいる市町村においては子供の学習に関する支援もして頂いている。大変ありがたい。

【29】被災者の中で派閥のようなものを感じています。皆さん色々な状況や考えをお持ちなので、多少は仕方ないと思いますが、最近では被災者の方の声などで行われている交流会等も多くなってきましたが、このままでは気の合う仲間がボランティアさんたちの好意を利用した、ただの集まりでしかなくなっていくような気がしてなりません。そういうことを感じて交流会をためらう方々も知っています。

二年目を迎え、もう一度原点に戻って一人ひとりの方の気持ちを大切にしたい支援が続いていけば良いなと思っています。これからもどうぞよろしくお願い致します。

【30】愛知県への移住を検討していますが、住宅、仕事、主人の両親（福島）などあまりに大きな決断のため、夫婦間で意見がまとまりません。愛知での仕事（主人の転職先）も見つけましたが、収入も減り、不安も大きいです。福島に戻れば、生活はそのままですが、放射能の不安があります。私自身も迷いがあります。先のことは誰にもわかりませんが後悔はしないようにしたいです。

△愛知県被災者支援センターの皆様からの情報誌や支援は本当に心強いです。特に郵送での情報提供はとても助かります。避難も二年目になると世間から忘れられているような、取り残されたような気になり、焦ります。今後の生活を考えるにあたって、支援センターはなくてはならないものだと思います。

【31】転勤で福島にすんでいるため、一日も早く家族全員そろって名古屋で再び暮らしたいです

【32】夢にも思っていなかった名古屋の地で1年あまり過ぎましたが、幸いなことに今住まわせて頂いているところは故郷の雰囲気とそれ程変わらない感じがします（都会で人は多いですが）精神的な負担は少ないです。周りの人々も行政の方々も気をつけてくれます。本当に感謝しております。

【33】①高齢の母の今後利用する施設の事（現在デーサービス週3回）
②精神障害（統合失調症）の弟の将来の利用（受け入れ態勢について）

【34】豊橋市の行政再度のご配慮により、県営住宅に入居させていただきましたが、孫、息子夫婦での同居には部屋が狭く、私だけ軽費老人ホームに入居し、現在に至るが家族とのコミュニケーションが取れないのが残念です。

【35】困っているのは二重生活でお金がかかること。少しでも安い住宅へ行きたいのですが市営は被災証明ないとダメなので↓

【36】運よく子供も私も周りの方々に助けられて何とか生活しています。感謝しきれないほどです。一番残念だったのは住宅補助の申請をしたところ、名義人を主人にしたため（住宅管理会社の方が主人にした方が様々な資金が支払わずによいとのことで）愛知県からは、住んでいない人は名義人である場合は補助ができないといわれ、残念でした。県庁まで行って名義人が違うことを話したのにも関わらず、「大丈夫ですよ。」と担当の人は言ったのに、翌日電話だけで「できません」と言われた事がかなりショックでした。住宅管理会社の方も県に色々問い合わせてくれましたが、新しい物件に移り住んで名義人を変更するしかないと言われて、せっかくなれた場所だったので補助を受けずに今に至ります。

【37】福島から来たというだけで補償金をたくさんもらっていると思われる。実際自主避難のため生活が苦しいが、そのように思われているので、今は被災者ということをして隠して生活している。

【38】避難してすぐ長女の小学校入学式があり、落ち着かない状態でしたが、学校も教育委員会も良くして下さって、本当にありがたかったです。長男も 6 月から市立の幼稚園で受け入れてもらえて助かりました。子供たちはすっかりこちらの生活になじんでおり、放射能の影響を考えることもなく外で自由に遊べるので、子供たちにとってはこちらにいる方がいいと思うのですが、このまま家族がバラバラでいるのがいいのかと考えると、いわきに戻ったほうがいいのか…いつも堂々巡りしている状態です。

【39】今一番困っているのは「就職」です。子供がまだ小さいので、定時で終わ

れる仕事で、なるべくなら正社員を希望しております。毎日、ハローワークやパソコンで求職活動しておりますが、なかなか見つかりません。収入が 0 のため、仕事が決まるまでも生活保護を受給希望しています。

【40】愛知県知事がガレキ受け入れを強引に進めている事でとても困っています。せっかく汚染されていない土地に汚染を持ち込むことは、日本全体にとって良くないことと思う。安心にすめる国土を減らす事に何の意味があるのかわかりません。汚染地域で去年から起きている健康被害がメディアの規制で伝えられていない現状や、健康被害と付き合わない医師たちの実情がある中で、原発再稼働、汚染拡大の政策が進む国のあり方に恐怖を覚えているし、このまま愛知に安心して避難することはもちろん、日本にすみ続けていいのかというところから気持ちが揺らいでいます。

【41】震災から一年後、ようやく仕事を辞める決心がつき、愛知県に戻ってきました。福島に嫁に行き 13 年後の決断でした。こちらに来てからも、この自主避難は本当に正しかったのか、福島に残してきた多くの教え子（高校教員だったため）のために何かできることはないのか、と苦悩する日々が続きます。また、いつかくると言われている東海地震のために、実体験したライフライン無しガソリン無し、放射能ありサバイバル生活を多くの人に伝えたいと思います。我が家のサバイバル生活は電気は大丈夫だったので結構楽しく生活出来ました。さらに大飯原発の事、もっと考えなくてはと一人焦っている状況です。何か私に出来る事があればいつでも協力します。こちらに来て多くの優しさやご支援を頂きました。そんなことまでしていただいているのかしらと思うほどです。ありがとうございます。

【42】精神的に参る事が時々ある。原発事故さえなければ、福島で家族一緒の生活が送れていたし、友人たちとも離れ離れになる事もなかった。お金がかかるため仕事を始めたが、忙しく、心に余裕が持てなくなっている。それなのに、それに見合う賠償もされず…。福島で頑張っている人の事を重い、自分をなんとか奮い立たせている気がするが、時々ふと行き詰まる事がある。

【43】今住んでいる地域の人たちとのコミュニケーションの取り方。

平成 30 年 8 月 24 日

震災が忘れられつつあること

付録Ⅲ 2013 年 愛知県広域避難者質問紙調査の分析、および自由回答

1. 回答者の属性について
2. 愛知県に避難するまで
 - 2.1. 被災時の住所・避難の時期
 - 2.2. 世帯の離散
3. 愛知県での暮らし
 - 3.1. 居住形態、世帯構成
 - 3.2. 就労、家計の状況
 - 3.3. 人付き合い、交流会の参加
 - 3.4. 避難生活で感じる事、考える事
4. 今後の展望、定住志向
5. 小括
6. 自由回答

1. 回答者の属性について

この章では、回答者の属性データを記述する。内容は、性別、年齢、婚姻、学歴である。

表 1-1：性別

	度数	相対度数 (%)
男性	64	30.5
女性	146	69.5
計	210	100%

回答者は「男性」30.5%、「女性」69.5%である。性比は、およそ 3：7 である。

表 1-2：年齢

	度数	相対度数 (%)
18~20 代	17	8.1
30 代	62	29.7
40 代	49	23.4
50 代	24	11.5
60 代	30	14.4
70 代以上	27	12.9
計	209	100%

回答者の年齢を 10 歳階級別に整理して表示したのが、表 2 である。「30 代」29.7%、「40 代」23.4%が、比較的割合が高い。

表 1-3：婚姻

	度数	相対度数 (%)
未婚	15	7.1
既婚	152	72.4
結婚後、離別	27	12.9
結婚後、死別	16	7.6
計	210	100%

回答した時点での婚姻の状態については、「既婚」72.4%が、最も多い。

表 1-4：学歴

	度数	相対度数 (%)
小・中学校	20	9.7
高等学校	73	35.4
短大・高専・専門学校	57	27.7
大学	53	25.7
大学院	3	1.5
計	206	100%

学歴については「高等学校」35.4%が、最も高い。次いで「短大・高専・専門学校」27.7%、「大学」25.7%である。

2. 愛知県に避難するまで

この章では、回答者が愛知県に避難するまでに関するデータを記載する。具体的には、被災時の住所、避難の時期、被災前後での世帯構成などである。

2.1. 被災時の住所・避難の時期

表 2-1：被災時の住所（都県別）

	度数	相対度数 (%)
岩手県	19	9.0
宮城県	38	18.0
福島県	133	63.0
関東地方	21	10.0
計	211	100%

愛知県被災者支援センターに登録する避難者の大部分は、東北 3 県から移っている。そのうち最も多いのは福島県で、全体の 63.0%にあたる。

表 2-2：被災時の住所（避難区域別）

	度数	相対度数（％）
A 群	82	69.5
B 群	36	30.5
計	118	100%

避難者のうち、政府が認めた避難区域内から避難した世帯とそれ以外、つまり避難区域外から避難した世帯に大別できる。上掲の B 群は前者であり、後者が A 群である。A 群は、いわゆる自主避難者と呼ばれている。今回は、いずれも被災当時は、福島県内に居住していた世帯についてのデータである。

福島県からの避難者のうち、A 群、つまり自主避難者の割合が、約 7 割に達する。

表 2-3：愛知県への定住・仮定住の時期（年別）

	度数	相対度数（％）
2011 年	136	65.7
2012 年	55	26.6
2013 年	16	7.7
計	207	100%

愛知県への（仮）定住、つまり避難したのは「2011 年」65.7%が最も多い。年を追うごとに割合が下がっている。

2.2. 世帯の離散

表 2-3：被災時の世帯人数

	度数	相対度数 (%)
単身者	20	9.7
2人	47	22.7
3人	50	24.2
4人	51	24.6
5人	21	10.1
6人以上	18	8.7
計	207	100%

被災した当時の世帯人数については、「4人」24.6%、「3人」24.2%、「2人」22.7%に回答が集中している。

表 2-4：現在の世帯人数

	度数	相対度数 (%)
単身者	34	16.7
2人	56	27.5
3人	40	19.6
4人	46	22.5
5人	18	8.8
6人以上	10	4.9
計	204	100%

一方、現在の世帯人数については、「2人」27.5%、「4人」22.5%、「3人」19.6%が比較的が多い。また、「単身者」16.7%も少なくない。

表 2-5-1：被災地で生活している家族 (MA)

	度数	相対度数 (%)
配偶者	41	20.1%
子ども	12	5.9%
親	31	15.2%
その他	13	6.4%
いない	127	62.3%

(N=204)

被災時には同居していたが、現在は愛知県と被災地で離れて暮らしている世帯員の有無を整理したのが、表 2-5 である。「いない」62.3%が、最も多い。反対に、誰かいる場合には、「配偶者」20.1%、「親」15.2%の割合が高い。

表 2-5-2：被災時の住所（都県別）と離れて暮らす世帯員の内訳

		離れて暮らす世帯員の内訳 (MA)					N
		配偶者	子ども	親	その他	いない	
被災時の住所	岩手県	11.1%	11.1%	5.6%	5.6%	83.3%	18
	宮城県	5.6%	13.9%	22.2%	5.6%	63.9%	36
	福島県	19.7%	3.9%	16.5%	7.9%	61.4%	127
	関東地方	57.1%	0.0%	4.8%	0.0%	42.9%	21
全体		20.3%	5.9%	15.3%	6.4%	61.9%	202

また、被災時の住所（都県別）との関係を確認してみる。福島県に限れば、「いない」と答える割合は約 6 割である。反対に離れて暮らす世帯員のうち、「配偶者」19.7%、「親」16.5%が比較的が高いが、全体の割合と比率は近似している。

表 2-5-3：被災時の住所（避難区域別）と離れて暮らす世帯員の内訳

		離れて暮らす世帯員の内訳 (MA)					N
		配偶者	子ども	親	その他	いない	
被災時の住所 (避難区域別)	A 群	22.2%	2.5%	18.5%	9.9%	58.0%	81
	B 群	12.9%	9.7%	16.1%	0.0%	67.7%	31
全体		19.6%	4.5%	17.9%	7.1%	60.7%	112

被災時の住所（避難区域別）との関係についても記述する。「いない」と回答する割合は、B 群：67.7%に対して、A 群：58.0%である。また、A 群のうち、離れて暮らす世帯員は「配偶者」22.2%、「その他」9.9%が B 群と比べて高い割合を示している。

表 2-6：離れて暮らす人との連絡の取り方 (MA)

	度数	相対度数 (%)
電話	81	40.3
メール	51	25.4
直接会う	54	26.9
その他	8	4.0
していない	5	2.5
離れて暮らす人がいない	107	53.2

(N=201)

離れて暮らす人がいた場合、「電話」40.3%で連絡をとる方法が、最も多い。次いで、「直接会う」26.9%、「メール」25.4%とつづく。

3. 愛知県での暮らし

この章では、愛知県に避難してきた人々の暮らし向きについて記述する。参照する項目は、居住形態、家賃支払いの見通し、生活費の工面、交流会への参加、避難に対する考え方、生活満足度などである。

3.1. 居住形態、世帯構成

表 3-1：現在の住所

	度数	相対度数 (%)
名古屋市	82	39.6
三河地方	51	24.6
尾張地方 (尾張・海部)	41	19.8
尾張地方 (知多)	33	15.9
計	207	100%

(N=207)

愛知県における避難先の住所は、「名古屋市」39.6%が最も多い。つづく「三河地方」24.6%を含めて、およそ6割を占める。

表 3-2：居住形態

	度数	相対度数 (%)
県営・市町村営住宅	40	19.1
住宅供給公社提供の住宅	8	3.8
UR 賃貸住宅・雇用促進住宅	12	5.7
民間借上住宅	57	27.3
自己負担による賃貸住宅	41	19.6
持ち家	14	6.7
企業の社宅・社員寮	9	4.3
親類宅	28	13.4
計	209	100%

現在(回答した時点)の住まいについては、「民間借上住宅」27.3%が最も多い。また、「自己負担による賃貸住宅」19.6%、「県営・市町村営住宅」19.1%、がつづく。

表 3-3：借上住宅の家賃支払いの見通し

	度数	相対度数 (%)
県による住宅借上制度は利用していない	21	10.0
家賃を支払える見通しはある	35	16.7
家賃を支払える見通しはない	47	22.5
その頃には故郷または愛知県外に移るため、 考えていない	7	3.3
家賃を支払える見通しはわからない	88	42.1
その他	11	5.3
計	209	100%

記述に先立ち、あらかじめ断っておく。この調査は 2013 年に実施した。翌年の 2014 年には「愛知県被災者用賃貸住宅借上制度」が終了し、避難者自身で家賃を支払う可能性が控えていた。

顕著に割合が高いのは「家賃を支払える見通しはわからない」42.1%である。次いで高いのは「家賃を支払える見通しはない」22.5%である。他方で、「家賃を支払える見通しはある」は、16.7%である。

3.2. 就労、家計の状況

表 3-4：被災前後の世帯年収

	被災前		現在	
	度数	相対度数 (%)	度数	相対度数 (%)
100 万円未満	12	6.9	23	13.6
100～299 万円	39	22.4	44	26.0
300～599 万円	69	39.7	65	38.5
600～899 万円	40	23.0	29	17.2
900～1199 万円	10	5.7	4	2.4
1200 万円以上	4	2.3	4	2.4
計	174	100%	169	100%

被災以前の世帯あたりの年収と現在の世帯年収についての回答を整理しているのが、表 3-4 である。あらかじめ断っておくが、この表でもって個々の世帯が被災前・後で年収が増加した、あるいは減少したかを判断することはできない。全体の傾向が確認できるだけだ。

「300～599 万円」を頂点とする比率の傾向に大きな変化は見られない。だが、「100 万円未満」の割合は増大、「600～899 万円」は微減しているのがわかる。

表 3-5：生活費をどのように工面しているか (MA)

	度数	相対度数 (%)
自らが働いて得た収入	120	59.4
被災地にいる家族からの送金	30	14.9
親戚・知人の援助	10	5.0
貯金の取り崩し	74	36.6
失業保険	5	2.5
生活支援貸付などの公的資金	12	5.9
東京電力からの賠償金	29	14.4
義援金などの支援金	22	10.9
その他	34	16.8

(N=202)

生活費の工面の方法については、「自ら働いて得た収入」59.4%が著しく高い。次いで、「貯金の切り崩し」が36.6%である。ほかには、「被災地にいる家族からの送金」14.9%、「東京電力からの賠償金」14.4%も全体的には小さくない割合である。

表 3-6：毎月の家計の状況に関する経年変化 2012-2013 (%)

	2012	2013
余裕がある	1.9	2.9
余裕はないが、生活できる	56.5	40.3
ぎりぎり生活できる水準である	22.1	34.0
足りない	19.5	22.8
計	100%	100%

(N=154) (N=206)

毎月の家計の状況については、2013年の調査では、「ぎりぎり生活できる水準である」34.0%、「足りない」22.8%である。

経年の変化を記述する前に、あらかじめ断っておく。2012年の調査では毎月の家計についての選択肢は5つであるが、2013年と比較できるように再編してある。

比較すると、「余裕はないが、生活できる」の割合が減少する。対して、「ぎりぎり生活できる水準である」は増加している。

表 3-7-1: : 有給労働の状態 (回答者)

	被災前		現在	
	度数	相対度数 (%)	度数	相対度数 (%)
働いていた/いる	130	62.8	104	50.2
働いていなかった/いない (就職前の学生を含む)	77	37.2	103	49.8
計	207	100%	207	100%

回答者のうち、被災する以前には「働いていた」62.8%で、「働いていなかった」37.2%である。一方で、現在(回答する時点)では「働いている」50.2%、

「働いていない」49.8%である。総じて、「働いていた／いる」の割合が減少し、「働いていなかった／いない」の割合は増加している。

表 1-1 で確認しているが、回答の性比は男：女＝3：7 である。したがって、ここで言う「回答者」の多数は、女性である。

表 3-7-2：有給労働の状態（回答者・現在）と性別

		性別		N
		男性	女性	
有給労働	働いている	37.9%	62.1%	103
	働いていない	22.8%	77.2%	101
全体		30.4%	69.6%	204

また、性別との関係については、「女性」は「男性」に比べて「働いていない」77.2%の割合が高い。

表 3-8-1：有給労働の状態（配偶者）

	被災前		現在	
	度数	相対度数 (%)	度数	相対度数 (%)
働いていた／いる	121	78.1	107	70.9
働いていなかった／いない (就職前の学生を含む)	34	21.9	44	29.1
計	155	100%	151	100%

他方で、回答者の配偶者については、被災する以前には「働いていた」78.1%で、「働いていなかった」21.9%である。対して、現在（回答する時点）では「働いている」70.9%、「働いていない」29.1%である。全体の傾向としては、「働いていた／いる」の割合がやや減少し、「働いていなかった／いない」の割合は若干増加している。

表 3-6 で指摘している通り、「配偶者」の多くは男性である。

表 3-8-2：有給労働の状態（配偶者・現在）と性別

		性別		N
		男性	女性	
有給労働	働いている	18.1%	81.9%	105
	働いていない	72.7%	27.3%	44
全体		34.2%	65.8%	149

また、性別との関係については、「男性」は「女性」に比べて「働いていない」72.7%の割合が高い。つまり、表 3-7-2 で確認するが、女性の方が就労していない場合が多い。

表 3-9-1：労働条件の状態（回答者）

	被災前		現在	
	度数	相対度数 (%)	度数	相対度数 (%)
フルタイム	75	60.0	43	42.2
非常勤・臨時・パート ・アルバイト・内職など	50	40.0	59	57.8
計	125	100%	102	100%

回答者のうち、被災する以前は「フルタイム」で働いていた割合は 60.0% で、「非常勤・臨時・パート・アルバイト」40.0%である。一方で、現在（回答する時点）では「フルタイム」42.2%に対し、「非常勤・臨時・パート・アルバイト」57.8%である。総じて、「フルタイム」の割合が減少し、「非常勤・臨時・パート・アルバイト」の割合は増加している。

表 3-9-2：労働条件の状態（回答者・現在）と性別

		性別		N
		男性	女性	
労働条件	フルタイム	61.9%	38.1%	42
	非常勤・臨時 ・パート・アルバイトなど	18.6%	81.4%	59

全体	36.6%	63.4%	101
----	-------	-------	-----

性別との関係については、「女性」は「男性」に比べて「非常勤・臨時・パート・アルバイト」81.4%の割合が顕著に高い。

表 3-10-1：労働条件の状態（配偶者）

	被災前		現在	
	度数	相対度数 (%)	度数	相対度数 (%)
フルタイム	86	74.8	79	77.5
非常勤・臨時・パート ・アルバイト・内職など	29	25.2	23	22.5
計	115	100%	102	100%

また、配偶者のうち、被災する以前は「フルタイム」で働いていた割合は74.8%で、「非常勤・臨時・パート・アルバイト」25.2%である。一方で、現在（回答する時点）では「フルタイム」77.5%に対し、「非常勤・臨時・パート・アルバイト」22.5%である。全体としては、「フルタイム」の割合が微増し、「非常勤・臨時・パート・アルバイト」の割合は微減している。

表 3-10-2：労働条件の状態（配偶者・現在）と性別

		性別		N
		男性	女性	
労働条件	フルタイム	3.8%	96.2%	78
	非常勤・臨時 ・パート・アルバイトなど	68.2%	31.8%	22
全体		18.0%	82.0%	100

性別との関係については、「男性」は「女性」に比べて「非常勤・臨時・パート・アルバイト」68.2%の割合が顕著に高い。つまり、表 3-9-2 で確認するように、女性の方が「非常勤・臨時・パート・アルバイト」に就労している比率が高い。

3.3. 人付き合い、交流会の参加

表 3-11：現在の個人的なつきあい (%)

	積極的に 参加してい る	あまり かかわっ て いない	かかわっ て いない	計
近所づきあい	33.3	44.6	22.1	100%
職場のつきあい	45.7	28.9	25.4	100%
学校・同窓会などのつきあい	53.2	29.6	17.2	100%
インターネットのつきあい (twitter、facebook、mixi、ブログな ど)	59.5	20.0	20.5	100%
その他	13.0	4.3	82.6	100%

現在の個人的な人付き合いについては、「積極的に参加している」付き合いは、「インターネット」59.5%、「学校・同窓会」53.2%が、比較的割合が高い。一方で、「近所づきあい」は、「あまりかかわっていない」44.6%、「かかわっていない」22.1%と答える比率が大きい。

表 3-12：交流会の参加回数

	度数	相対度数 (%)
0 回	72	34.8
1～2 回	57	27.5
3～5 回	48	23.2
6 回以上	30	14.5
計	207	100%

一度でも交流会に参加した経験があるという割合は、およそ 6 割である。

表 3-13：今後、交流会に参加したいか

	度数	相対度数 (%)
ぜひ参加したい	30	14.7
機会があれば参加したい	104	51.0
形が変われば参加したい	10	4.9
参加したくない	24	11.8
わからない	36	17.6
計	204	100%

今後、交流会に参加する意欲がある回答者は、約 6 割におよぶ。

3. 4. 避難生活で感じること、考えること

表 3-14：避難や避難生活についての考え方 (%)

A	Aに近い	どちらか といえばA	どちらか といえばB	Bに近い	B
避難で家族が離れ離れになることは、やむを得ない	17.0	19.6	24.2	39.2	避難で家族が離れ離れになることは、耐え難い
避難を機に家族の絆が深まった	33.2	36.3	15.8	14.7	避難を機に家族の関係がぎくしゃくしてしまった
避難先で新しい人間関係を形成したい	39.6	44.7	13.7	2.0	避難先ではなるべく人と関わらないようにしたい
自分が避難者であることを誰かに知ってもらいたい	9.8	32.5	40.7	17.0	自分が避難者であることを隠しておきたい
自分も他の被災者もみな同じ被災者だと思う	19.9	20.4	25.9	33.8	被災者の間で格差があると思う
国や社会は、異なる境遇の被災者をみな公平に扱っている	6.7	13.4	29.4	50.5	国や社会は、被災者に対して不公平な対応をしている
自分は周囲の人と比べて、恵まれている	30.2	39.7	21.1	9.0	自分は周囲の人と比べて、不利な状況にある
現在の自分の周囲の人は、震災・原発事故への理解がある	18.7	38.4	26.3	16.7	現在の自分の周囲の人は、震災・原発事故への理解がない
被災者支援センターの支援は避難者各人の気持ちに沿っている	39.4	47.7	11.9	1.0	被災者支援センターの支援は一方的だ

* 降順に、N=194、N=190、N=197、N=194、N=201、N=194、N=199、N=198、N=193

表 3-14 は、避難および避難生活に関連する 9 つの質問を設けて、それぞれの回答が A・B のいずれに近似するか尋ねている。

一番上の段は、世帯の離散についての問いである。「やむを得ない」に近いとする割合が約 3 割に達している。

二番目の段は、被災前後での家族関係の変化については、約 3 割が「ギクシヤクしてしまった」と答えている。

四番目の段では、自身が避難者として扱われる問題を尋ねているが、およそ 6 割が「隠しておきたい」と答えている。

六番目の段は、「被災者は公平に対応されていない」とする割合が、約 8 割におよぶ。

七番目の段では、「自分は周囲の人と比べて恵まれている」に近いとする割合が、およそ 7 割である。

八番目の段では、「周囲の人は、震災・原発事故への理解がある」と考えている割合が、約 6 割である。

避難者の立場となった人々の思いや考えは多様であり、一筋縄で捉えられるものではないだろう。しかし、この設問から大まかな傾向を 2 点、推察することはできる。避難者は一方で、今回の震災および原発事故に対して、回答者の多くは自身や家族の処遇に理不尽さを抱いている。だが他方で、自身の思い浮かべる凄惨な被害と比べれば、自分の不遇などは、まだ幸せな方と言いかせる態度をとっている。突然に始まった事態のやり切れなさに悶々とする様子が浮かび上がる。

表 3-15-1：階層帰属意識の変化

	被災前		現在	
	度数	相対度数 (%)	度数	相対度数 (%)
上	5	2.6	0	0.0
中の上	76	39.6	20	10.5
中の下	77	40.1	74	38.7
下の上	26	13.5	59	30.9
下の下	8	4.2	38	19.9
計	192	100%	191	100%

(N=192)

(N=191)

被災する以前・現在（回答する時点）における自身の生活水準は、日本社会ではどの程度に位置づけられるかを主観的に評価する設問が、表 3-14 である。たとえば、自身の暮らし向きが「一般的」あるいは「普通」よりも少し良いと判断するなら「中の上」と回答する。

全体的な傾向として、階層帰属意識は下降している。「中の上」の割合が「被災前」では 39.6%だが、「現在」では 10.5%に減少している。反対に、「下の上」は 13.5%から 30.9%に、「下の下」は 4.2%から 19.9%に増加している。

表 3-15-2：被災時の住所（避難区域別）と被災前の階層帰属意識

		階層帰属意識（被災前）					N
		上	中の上	中の下	下の上	下の下	
被災時の住所 (避難区域別)	A 群	1.4%	40.5%	41.9%	12.2%	4.1%	74
	B 群	3.1%	37.5%	43.8%	15.6%	0.0%	32
全体		1.9%	39.6%	42.5%	13.2%	2.8%	106

表 3-15-2 は、被災時の住所（避難区域別）と被災する以前の階層帰属意識との関連を記述する。A 群・B 群ともに、全体の比率と近似する。割合は、「中の上」39.6%、「中の下」42.5%に集中している。

表 3-15-3：被災時の住所（避難区域別）と現在の階層帰属意識

		階層帰属意識（現在）					N
		上	中の上	中の下	下の上	下の下	
被災時の住所 (避難区域別)	A 群	0.0%	5.4%	47.3%	27.0%	20.3%	74
	B 群	0.0%	18.8%	40.6%	28.1%	12.5%	32
全体		0.0%	9.4%	45.3%	27.4%	17.9%	106

一方で、表 3-15-3 は、現在の階層帰属意識との関係を確認する。B 群については、「中の上」18.8%の割合が A 群と比べて高い。対して、A 群については、「中の下」47.3%、「下の下」20.3%の割合が、B 群よりも高い。全体的に、A 群の方が、「下の上」「下の下」のように、生活水準が「下」と答える割合がより高い。

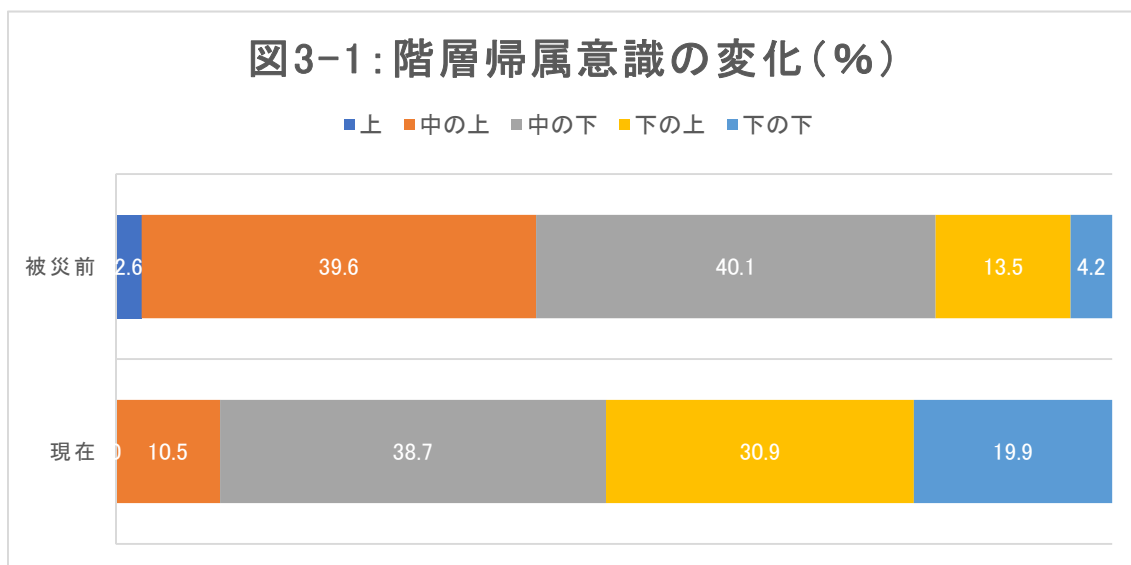


表 3-16：現在の生活満足度 (%)

	満足している	やや満足している	あまり満足していない	満足していない	計
住まい	14.1	19.9	33.5	32.5	100%
健康や医療	19.1	21.1	34.8	25.0	100%
就労	27.7	27.2	33.5	11.6	100%
子育て	17.4	24.2	41.6	16.8	100%
地域とのかかわり	12.6	32.6	41.1	13.7	100%
避難同士の交流	15.3	29.4	38.4	16.9	100%
離れて暮らす家族 ※いる方のみ	50.0	29.8	14.4	5.8	100%

現在の生活満足度については、「離れて暮らす家族」に関しては「満足している」「やや満足している」の割合が、約8割におよんでいる。また「就労」もおおよそ5割と比較的に高い割合である。対して、「あまり満足していない」「満足していない」の割合が高いのは、「住まい」66.0%、「健康や医療」59.8%、「子育て」58.4%である。「地域との関わり」や「避難者同士の交流」も5割を超えている。

表 3-17：必要だと感じる支援（％）

	必要である	やや必要である	あまり必要でない	必要でない	計
住まい	6.5	7.5	14.5	71.5	100%
健康や医療	4.0	7.5	21.6	66.8	100%
就労	13.1	13.1	22.4	51.4	100%
子育て	10.3	8.6	21.3	59.8	100%
地域とのかかわり	10.5	21.6	41.1	26.8	100%
避難同士の交流	7.7	16.5	41.2	34.5	100%
離れて暮らす家族 ※いる方のみ	5.5	6.4	23.9	64.2	100%

今後の生活に必要なと感じる支援については、「あまり必要でない」「必要でない」を合わせて 8 割に達する項目が「住まい」「健康や医療」「子育て」「離れて暮らす家族」である。それ以外の支援についても、およそ 7 割はどちらかと言うと不要だと答えている。先に確認した表 3-15：生活満足度と比べると、意外な結果である。

この設問では、誰からの「支援」かが明記されていないが、おそらく行政からの支援を想定していると考えられる。とすれば、生活を立て直す、あるいは課題を解消するうえで、行政が当てにされていない態度がうかがえる。

4. 今後の展望

この章では、愛知県の避難者が考える今後の暮らし方について記述する。参照する設問は、住民票の移動、定住志向である。

表 4-1-1：住民票の移動

	度数	相対度数 (%)
住民票は移動していない	40	19.0
家族の一部は、愛知県に移動した	46	21.8
家族全員、愛知県に移動した	125	59.2
計	211	100%

住民票の移動については、「家族全員、愛知県に移動した」59.2%が、最も割合が高い。

表 4-1-2：被災時の住所と住民票の移動

		住民票の移動			N
		全員移動した	一部移動した	移動していない	
被災時の住所 (避難区域別)	A 群	65.4%	22.2%	12.3%	81
	B 群	27.8%	11.1%	61.1%	36
全体		53.8%	18.8%	27.4%	117

また、被災時の住所（避難区域別）との関係については、A 群の方が「全員移動した」65.4%と回答する割合が高い。

表 4-2：住民票を移さない理由（MA）

	度数	相対度数（%）
地元との関係を保つため	10	25.6
一時的な避難と考えているため	19	48.7
移動した場合の行政サービス等 支援の影響が心配なため	16	41.0
東電への賠償が心配なため	18	46.2
その他	4	10.3

(N=39)

住民票を移動させない理由については、「一次的な避難と考えているため」48.7%、「東電への賠償が心配なため」46.2%が比較的に高い割合を示している。また、「移動した場合の行政サービス等支援の影響が心配なため」41.0%も少なくない。

賠償や支援に目配せをして、東電や行政の対応に目を光らせている態度が、2年を経ても住民票を移さない理由だとうかがえる。

表 4-3-1：今後の定住先

	度数	相対度数（%）
愛知県に定住する	96	45.9
被災前に住んでいた地域に戻る	15	7.2
被災前に住んでいた地域の近くに戻る	7	3.3
上記以外の地域に定住したい	5	2.4
わからない	86	41.1
計	209	100%

今後どこに住居を構えるかの見通しは、「愛知県に定住する」45.9%と「現時点ではわからない」41.1%に、回答が二極化している。

表 4-3-2：被災時の住所（避難区域別）と定住志向

		定住志向					N
		愛知県 に定住	被災前の住 所に戻る	被災前の住所 の近くに 戻る	上記以外 に定住	わからない	
被災時の住所 (避難区域別)	A 群	51.9%	4.9%	2.5%	0.0%	40.7%	81
	B 群	36.1%	8.3%	13.9%	2.8%	38.9%	36
全体		47.0%	6.0%	6.0%	0.9%	40.2%	117

被災時の住所（避難区域別）との関係については、A 群の方が「愛知県に定住」51.9%と回答する割合が高い。また一方で、「わからない」の回答は、40.7%におよぶ。A 群・B 群ともに、「わからない」とする回答は、およそ 4 割である。

表 4-4：定住志向の経年変化 2011-2013（%）

	2011 年	2012 年	2013 年
愛知県に定住することを考えている	26.9	37.6	45.9
被災前に住んでいた住居に戻ると考えている	21.6	14.0	7.2
被災前に住んでいた地域の近くに戻ると考えている	1.8	8.9	3.3
上記以外の場所に定住することを考えている	1.8	3.2	2.4
現時点ではわからない	47.9	36.3	41.1
計	100%	100%	100%

(N=167)

(N=157)

(N=209)

表 4-4 は、定住志向に関する回答の割合を 2011 年～2013 年ごとに整理して掲示している。2011 年については、上掲のように回答の選択肢が 5 つに整理されていないので、比較的できるように再編している。

これによれば、「愛知県に定住することを考えている」の割合は年々増えている。対して、「被災前に住んでいた住所に戻ると考えている」は減少し

ている。これらとは別に、「現時点ではわからない」と答える割合は、2011 年から 2012 年は減少したものの、その後は微増している。3 年を経過しても、約 4 割を維持している。

5. 小括

本調査の結果から、東日本大震災を契機に現れた避難者について考察する。2011 年、2012 年の調査も参照する。

第 2 章は愛知県に避難するまでの経緯を整理している。今回の調査の特色は、福島県からの避難者には、避難区域外からの避難、つまり自主避難者が多数いることを明示した点にある。本調査には、そのような回答者が避難を選んだ理由を尋ねる設問はない。だが、それは、2011 年からの調査の考察を引き継いで、放射線の被曝を懸念しての行動だったと考えられる。

第 3 章では、避難者の暮らし向きを確認している。2012 年と比べて、生活費を自力で賄う傾向が強まる一方で、借上制度の打切りによる家賃の支払いの見通しが判然としない世帯が増加している。特に女性の場合、正規雇用にありつけることが少なく、家計の状況に逼迫さを感じる事態に追い込まれていると考えられる。また、そのような状況を一般的な生活水準よりも低いと理解している節がある。自主避難者であれば、公認の避難者よりもなおのこと強く、そう理解しているようだ。そのようにして、避難者は現在の生活に理不尽を抱くものの、それでも自身の生活を「まだ恵まれている」と鼓舞しつつ、避難者としてではなく、「普通の」あるいは元の生活を取り戻そうという態度が表れている。しかしながら、避難者の多くは、行政的な支援を求めている。行政的なサービスは煩雑かつ遅くて、しかも割に合わないためか、自分の稼ぎ、貯金で立て直す姿勢を採る。

第 4 章は、避難者が考えている今後の避難生活の展望を記述した。自主避難者のうち、福島県との決別を選んだ人々は過半数におよぶ。しかし、将来も避難先となった愛知県に定住することは決めかねている者が少なくない。2011 年以降、定住と保留の二極化が進んでいる。未だに定住を決めかねているのは、2012 年の考察の通り、自分だけでは解決できない放射能の問題が指摘できる。他には、上記の暮らし向きと併せて考えるに、経済的に苦しいからこそ別の場所に移りたいという切望感、しかし移住を繰り返すことの煩雑さと同じような苦勞が待っているのではないかという諦め、また子どもには落ち着いて暮らして欲しいという責任感などが入り交じった出口のない悩みを抱えての葛藤かもしれない。いずれにせよ、避難者にとっては精神的に落ち着かない状況に立たされていると考えられる。

以上の通り、東日本大震災を契機に現れた避難者、特に原発事故による放射能

の被曝を恐れて避難を選択した人々は、2 年が経過しても、暮らし向きは厳しいままである。経済的な困窮それ自体は、原発事故そのものが原因ではなく、現在の経済のあり方に問題があるかもしれない。だが、そのような経済の世界に放り出された原因は、何より原発事故が端緒である。

6. 自由回答

●は判別不可能な文字

【1】東日本大震災に伴い、娘の嫁ぎ先の岡崎市への避難を決め、2011年3月、友人の助けを得て、交通事情の悪い中、3月18日から高速無料の通知で、南相馬市から飯館村を経て、本宮のインターチェンジから宇都宮まで車で、宇都宮から東京を経由して、名古屋、岡崎へと何とか避難できました。行政からは自力避難のみの通告で、援助はありません。避難してから娘の所では寝起きも大変で●。1週間、10日と過ぎる内、避難先へ前住居の家族から荷物をまとめて、貸家を明け渡すよう、再三連絡が入り、5月に一時帰省、放射能が落ち着けば南相馬へ戻る事を伝えると、家主は明け渡しを強要。娘夫婦に相談の上、家賃7万の借家を見つけ、2011年6月に引っ越しです。放射能汚染を考慮し、寝具とテレビと冷蔵庫、●事な●物だけの引っ越しでした。南相馬の家主は、家賃4万円の貸家を別の借家人へ、5人家族の方へ、9万円で貸したのです。県の条例で3年間はずべて県の負担です。この大変な時に、大震災で金儲けしか頭にないようです。愛知県岡崎市へ引っ越し、家賃7万円の3DKの借家です。2012年8月で、東電からは家賃打ち切りです。支援センター様へは大変にお世話になりました。瀬戸市からカーテン寄贈、愛知淑徳大学から扇風機、交流会への参加、特に蒲郡での一泊交流は、今も鮮明に脳裏に浮かびます。2年に亘るお米の寄贈も大変助かりました。交通手段はタクシーまたは娘の時間が空いた頃合いから利用しています。支援センターから届くようになったニュースソースは心のより所として活用し、岡崎でもボランティア（会津若松出身）の方、自由避難でいわき市から転居された方とも親しく交流しております。地理はまだまだ不案内のため。日常の買物等は自転車で行けるごく近くのスーパーぐらいです。今後も支援センターの方にはお世話になります。宜しく願います。

【2】何時も心から感謝しております。82歳で初めての土地で、こんなに皆様からやさしくまた色々と御支援いただき、お礼の申し上げようもないのです。これからの人生はそう長くないと思いますが、できれば、今のままの生活をさしていただき、終わりの日を迎えられるらと思っております。出来る限り皆様に御迷惑をおかけしないようにと思っております。生活も自分の力にあった生活をしていけば、国民年金でやっていけないはずがないと決心いたしております。足も手も不自由でも、老体なんだから不思議ないと自分に言い聞かせて、日々色々と生活を楽しんでおります。字も書けなくなりました。乱筆乱文ですが、心から名古屋に来られてよかったと思い、感謝の気持ちをお伝えします。

H25.9.7日

【3】避難前に住んでいた友人のほとんどは、その地域に住んでいます。仕事もあるし、私の年代30代は、家を建てたばかりの人が多いため、引っ越すことが難しいようです。そのため避難前に住んでいた友人達とは、毎2泊3日で集まります。でも逃げた気持ちになってしまいます。友人達は今でも野菜や米は関東東北以外のものを割高で買っています。茨城は野菜が安いのに、たとえばキャベツ。80円1玉買えるのに、他地域の物を298円で買います。遠方地域の野菜としてスーパーで売っています。私はスーパーで買ったものを送ろうかと申し出ても、手間がかかるから申し訳ないし、少量だと割高でも、現地のスーパーで買う方が安いからです。なのでヤマトやゆうパックでそのような方たちに送る宅配便は、半額の料金にしてもらえると送りやすいです。うちは転職先を探し、やっと決まり、一家で引っ越しました。1年少し賃貸アパート2DKに5人住んでいました。今は今までの貯金で家を建てましたが、昔に建てようと思っていた大きさの2/3です。年収も下がりました。42歳ですが35歳程の給料です。上場企業に入れていただけただけいいと思われませんが、今まではベンチャー企業でバリバリ働いていました。それが今は家族のために働いています。それでも未来は明るい信じ、今が一番楽しいと思っ暮らしていきます。

【4】福島県双葉郡には、本当のところもう帰れないのではないか。はっきりと政府の人間は言ってほしい！！色々のしがらみで帰れない状況なのに、それを知っているのではないか。(かくしているね！！) はっきり言ってくれる方が、今後の生活設計を立てて、残りの人生を生きていきたい。

【5】「あおぞら」等、支援センターや様々な団体の方々の支援に感謝しています。愛知への移住をしましたが、避難前の生活と比べて、色々と不自由になった為、夫婦間がギクシャクしてしまいました。早く今の生活を受け入れ、夫婦共に前向きに生活していけるよう、努力していこうと思っています。

【6】平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 42 分は私どもにとって忘れる事ができない日、時間になりました。今でもテレビ、ラジオ等で原発のニュースを見たり、聞いたりすると身体が震えます。あの当時のことが鮮明に思い出されて夜も寝れない日も多々あります。津波の怖さ、恐ろしさは体験しないとわかりません。私どもも 60 数年生きて、もう「だめ」だと思いました。あと 5 分遅かったら、私達は今現在ここで生活していないと思っています。命拾いはしたものの、全部津波で流されて、思い出といたら、原発、津波だけです。愛知県へ避難する事になったのは本当に「ラッキー」でうれしかったです。そして今は、女房にパートで働いてもらっていますから、何とかギリギリの生活ではありますが、前を向いて生きていこうと思っています。ちなみに、いわき市から名古屋市への交通費も借金です。少しずつでも返済しています。私達のような事にならないよう、国もそうだけど、元である東京電力も、もう少し考えて欲しいものです。

【7】住宅再建の支援について 被災前の自治体に再建する支援のみ手厚く、やむをえず他の自治体で再建する場合は国からの住宅支援金のみで、同じ被災者として不公平と強く感じております。

【8】未来が見えない。福島へ帰れるのか…。主人の実家は福島で、主人は長男なので後継ぎなのですが、どうしたらいいのかわからない。今は主人の両親とも元気なのでいいが、今後何十年後のことを考えると不安、心配。子どものことを考えるとじいじ、ばあばと接する機会を増やしたいのだが、今現在は GW やお盆、正月の 3 度。帰省しても放射線の被曝の不安はある。

【9】私達は、避難区域からでなく、自主避難域の者です。福島市から来ましたが、市の中でも染量が高く、除染後の数値も庭で 0.5 マイクロシーベルト、家

の中で0.2～0.3マイクロシーベルト、と、低濃度汚染と判断しています。又、学校給食も、気を使うどころか、数値が基準値未満（入ってる）というだけで、県内産の物を使っている状況。爆発で放射能を取り込んでいるのに、さらに地物野菜を使う事に反感もあります。そして、自主避難と言えど、生活やここまでの家庭内の再建に関するストレス、同居している母を残している現実、避難区域の人の方がまだ全員で避難せざるをえないのに、苦渋の選択をし放射能から子供を守る為、親、姉兄、兄妹、いとこの離れた生活。それなのに、生活の保障もない。福島に帰るにも実費。借上げも来年度で終了な為、次のステップを考えなくてはならないが、今までの生活費よりかさむ生活に引越す料金の確保もままなりません。いつどこで出費があるか分からない・・・と思うと、思い切ったおでかけもできず、愛知に来てからも旅行などには行った事ありません。ただ今月。ただ来月。それを暮せば・・・と思い共働きをしている状態。借上げの期間の延長を強くお願いしたい所存です。この様なアンケートを実施して頂き、本当にありがとうございます。

【10】被災者支援センターがあることによって、まずは社会とのつながりを作ることができたと思います。これから3年目4年目と年月が経つにつれての課題は、個人的な事と被災者団体としての事にわけて考えていかなければなりません。今は多くのボランティアさんに助けられている状態です。お互いに気持ち良く、被災者の事を考えていかれるような組織作りが必要かと思います。

【11】市営住宅に入居させてもらい家賃も免除していただき有難く思います。本当に助かります。

【12】県支援センターには大変お世話になり有難うございます。お米は愛知県産も福島県産も子供達はおいしいおいしいと食べてくれています。避難してから身長体重も成長しています。健康な状況になっていると思うので、愛知県に避難して良かったと思っています。先日の集中豪雨で思った事ですが、避難者は避難先の防災要領を知っているのかな？万一の場合、いわゆる二重避難にならないのかな？という事です。各自いろいろな問題はありますが、まずは生命健康を一番に維持出来る様、その地域の防災マニュアルを確認して貰いたい。支援センターからもそのサインを送って欲しいです。

【13】現在、県営住宅に住んでいます。来年 3 月以降も継続して住めるか知りたい。又、住むとしたら、家賃はどのくらいなのか知りたい。住む所がなく困っている。家賃払ってでも住みたいと思っているが。

【14】原発はいりません。事故処理、使用済み燃料処理のことを考えれば、どうなるか、誰でもわかるはず。金のことばかり考えて、うまい汁を吸える人だけ、再稼働させたがる。今年はなぜかエコ・省エネの声は聞こえなかった。これも再稼働したいからだろう。オリンピックも東京会場とはならないと思う。その金で、早く、原発処理してほしい。2013. 9. 6. 記

【15】国の対応、各自治体の対応に関して、復興予算は一体何のためのお金なのか。ただの自由に使う事のできる、あり余ったお金なのか！！ふざけるな！！お役人の方々は観光気分被災地視察に行ったかもしれない。自己満足でボランティアに行ったかもしれない。我々の住んでいた所がまだ更地なんです。まだ前には進めてないんです。被災地の人々の本当の生活、本当の気持ち、これを理解してあげて下さい。今本当にやるべき事、やらねばならない事、分かるでしょ！！

【16】※私は 20K～30K 圏在住であったが、現状の宅地、建物は室外 0.4～0.5 マイクロシーベルト。屋内にて 0.3 マイクロシーベルトである。まだ除染もなにもしていない。こんな所では安全安心で現状にては住めない。※東電の賠償も、宅地、建物の価値減少分も今の時点でいっさい明示されていない。上記の賠償等個人ではむずかしい為、愛知県避難者等集団で訴訟出来る様等、力添え等お願いしたいです。※上記のような事もあり、こちらに移住しようにもお金の面で出来かねる現況である。

【17】現在住んでいる県営住宅の入居期間が来年の 3 月末までなので、更に延長して欲しいです。

【18】離れている家族と一緒にまた暮らしたい。原発を早くなんとかしてほしい。

【19】3年目に入ったのに、いまだ私はテレビなどで震災・津波・原発の映像を見ると涙が出て、胸が苦しくなります。何も終わっていません。何も解決していません。きちんと被災者・被害者と向き合い、私達に平穏な日々を送らせて下さい。私達には支援法しか未来の光はありません。日本の未来を、子供達の未来を明るくものにして下さい。

【20】全て、アンケートが私の気持ちです。1日でも早く、元、住んでいた所で、前の様に暮らせれたら一番幸せです。“つなみ”で、オール電化の家も、3年しか住まず、全壊になり、車も2台流されて、少しずつですが、ローンを払っているのですが、収入が少なく、国民健康保険のお金が払えません。つらくて、泣いてばかりの日々が続きましたが、今は少しずつ前に向かって進むしかないなので、頑張っています。

【21】・除染が全く進んでいない。国県市やる気がない。

・いろいろな理由で一時帰宅しているが、交通費が大変である。線量が高いので、40km離れた米沢市のホテルに宿泊して自宅を往復している。

・東電は避難に要した経費を請求書に記入させながら支払いには全く応じない。

・被曝から逃れる為に避難した。危険から物理的に遠ざかることを津波では当然なことなのに、原発事故では国は認めない。棄民政策が露骨である。おかしいことをおかしいと言えない社会には息が詰まる。

・現制度では、汚染された農産物（山野草を含め）が法目をくぐって全国に流れている。

・加工食品は原材料の産地表示が義務づけられなくなった。消費者はチェックできない。相当高額な金額をかけないと入手できない。

・津波や地震で避難した人と原発事故で避難した人では帰還を含め一緒にできないことなのに、同一扱いをしている。問題が多い。

・モニタリングで放射線量を測定している地点は土を30cm以上除去草木の皮を剥いでいる。その値を公表している。その周辺は0.7~0.9マイクロシーベルト小さな子が地面近くを歩いている。

・天地返しをして耕作して作物を植え付けている。抽出したものを検査して食べている。健康被害と風評被害と復興をあいまいにしている。・原発事故の収束を事故を起こした営利企業に任せておくので解決しない。

・何故日本に原発が作られたのか根元のところを黒田先生教えて下さい。そこが隠されている限り原発問題は解決しない。チョウを研究した大学の研究者が文科省から研究資金を打ち切られた。学究は険しいですね。

【22】津波の被災で、岩手から愛知に避難して2年5ヶ月。原発で避難している方々から比べ、安心(?)して帰れる郷里があることは幸せと思うが、今、今後どうして良いか、岩手、愛知、どちらに暮らし続けるか?家は?等確認作業の為、先月一杯で仕事を辞めた。仮設住宅を申し込んでいる。解決して欲しい事は、ないです。自分自身が、決めて、切りひらいていく事なので。今は、久し振りに両親との(80才代)ゆったりした時間を仕事を辞めたばかりで、ほのぼのと楽しんでいます。

【23】福島に住んでいないが家があるが、住んでいないのに税金がとられているので、なしにして欲しい。又は、減税にして欲しい。

【24】避難当時から様々な御心配りを頂き、家族皆で心から感謝致しております。来年3月末迄は現在の住宅にお世話になりますが、それまでの間もうしばらく宜しく御願い致します。何の不自由もなく日々暮らせて頂いています。今後も宜しく御願い致します。

【25】私はあるボランティア団体(愛知県)の行ったキャンプに2011夏に参加し、それをきっかけにそのボランティア団体の方々と交流を持つようになりました。それがきっかけで1年間かかってしまいましたが愛知県へ自主避難することになりました。ボランティアに参加しているスタッフの方々とは、今も交流があり、私の仕事が不規則なので子供の面倒をみてもらったりしています。また、同じ地域でもともと知人だった方も同じマンションに自主避難されたため、子供も心強かったと思うし、今も、その方にとっても協力していただいて生活しています。仕事も資格があったので、すぐに決まり、収入も得ることができており、私はみなさんに支えてもらいながら自立した生活をする事ができていて、とても幸せだと思っています。(こうした自主避難という形になっても・・・)ただ、子供の健康だけは心配です。健康な体があったらがんばって夢をかなえることもできます。だからこども被災者支援法で具体的に子供の健康、または地域に

住む人（地域設定でも、もめますが・・・）や 3. 1 1 にそこに住んでいた人の医療費の免除や定期的な健診の実施、（一生）は最低限やって欲しい。また、自主避難では、高速道路の無料化は実施されたけど帰省するのに半日かかると長期休暇が必要となり仕事に影響する為、交通手段を限定しないで欲しい。自主避難となり今は住宅の支援がありますが、子供の健康を考え、子供が成人するまで・・・は、支援して欲しい。私は自主避難しているので、その立場からの要望ばかりです。そのためこういった支援法への具体化へ向けた働きをするためには、私達だけではなく福島など被災地へ向けても働きかけをして避難した人も変わらずそこで生活するも精神的にも経済的にも肉体的にも社会的にも少しでも苦悩が減って生活できるようにしてほしい。していきたいです。福島の私の住んでいた地域やその周辺では、支援法のことを知らない人達がたくさんいます。ほとんどの方が知らないも同然です。自分達の生活に関わることなのに・・・。どうしてこんな実態なのか不思議です。県や市や町は、どう思っているのでしょうか・・・。福島の原発の問題は日本の問題となっています。きちんとした国の対策が大切ですよ。

【26】東電に勤めている人は頭の良い学校を出ていると思っているが、頭が悪い。「雨が降り土面に染み込み、川・地下水となる、その後はどこに行く？」と小学生の子供に聞くと「海」と答える。小学生でも解る事を、なぜ東電人は「海には出ていない。地下水は大丈夫」と言っていたのだろう。時間がすごくたってから「海に出てました。地下水にも・・・」馬鹿すぎる。今年の夏、いわき市で海水浴をしていた親子をTVで見ましたが、海に汚水が出ていた事を知らずに入ってから今後、子供に申し訳ないと親は思い続けることでしょう。「ただちに×××」と当時（原発事故後）言っていました。症状が出た時は「因果関係は不明」と言って逃げるんだらうと思う、東電も、国も。早く廃炉にして、福島を汚してしまった土地を元に戻して欲しい。大丈夫な土地（福島）なら、国会等を福一の近くに作り、えらい人は住んで下さい。小さな子供がいる人は、特に私達の気持ちがわかるでしょう・・・。馬鹿だから、わからないか！なあ。

【27】震災・原発事故の影響から、30年近く住んでいた「福島県いわき市」より自主避難してきました。名古屋に来たきっかけは、同郷の友人が市内で会社経営をしているという事もあり、仕事の斡旋をしてくれるというものでした。はじ

めは慣れない仕事、土地柄に少し戸惑う事もありましたが、周囲の方々の助けもあり、徐々に良い方向に向かい始めました。しかし、そんな矢先、私が特定疾患である[潰瘍性大腸炎]という病気になってしまいました。一時、静養を余儀なくされ、無収入のまま半年以上を過ごしたのです。現在は病気に理解のある経営者の元で仕事に従事させてもらっていますが、体調不良の時が多く、休みがちになってしまいます。こんな状態では、福島に戻り、静養しながらのほうが良いのですが、いま携わっている仕事をどうしても成功させたいと思っております。つきましては、「愛知県被災者用賃貸住宅借上制度」の期間延長を望むところであります。

【28】福島へ帰るとTVでは毎日、原発のニュース、各地の放射線量のニュースが大部分を占め、1日たりとも放射能、原発を思い出さない日はない。愛知では、原発に関するニュースは、何か特別な事が起こった時のみ放送される程度で、被災者本人ですら原発の事を忘れてしまうような、温度差がすでにある。きっと、愛知県民の方々にとって、震災は遠い過去となってしまったのでしょうか。でも、このように支援して下さっている方々がいることに感謝しております。

【29】母子避難と言う形での二重生活は、経済的にも、精神的にも負担があります。そんな中で、愛知県や名古屋市の支援センターから送られてくる定期便で、ほんの少しでも気持ちを明るくしてくれるイベント等、色々な企画をして下さっていることには感謝いたします。

【30】もう少し支援をして欲しかった。？

【31】私は交流会が苦手でした。話す事は好きでも、自分は避難してきた事を隠したいので、テレビに娘が映ってしまって、主人の会社の奥様に何気なく言われたのは、すごく嫌でトラウマになりました。避難者同士での話で、気持ちが沈む内容が嫌でした。その中で、自分が話しやすい人ばかりを探していました。しかし、「自分に合った人じゃない」とか思ってしまう自分も嫌です。そんな考えがあったと思うと……。バカだったなと思います。その時に出会った人や、私に話してくれた人、合う合わないではなく、大切にしていかなければいけない。小さな世界にいるよりも、たくさんの人の意見を聞く事が大切だと気付きました。

今私に出来る事は何か、考えていきたい。交流会は子供の為のイベントが多くて、私の気分転換になります。交流だけにこだわらず、自分のペースで、自分が楽しみたい。良い所。自分に余裕が無い時は、イライラしてしまい、子供との接し方がダメだなと思う時があります。もっと自分自身を成長させたい。広い心を大きい気持ちで持てる様になりたい。しかる事が多くて、子供の性格とか大丈夫かな？原発の事もあり、健康不安もあります。普通に生活していく中で思いやりを持ち続けたい。感謝の気持ちも忘れてはいけない。私達家族は、普通と思える暮らしを普通に送っていききたい。避難者だからといって、あきらめたりしたくない。子供達には自分のなりたい様になれる様に手助けできる様に仕事をして節約してお金を貯めたい。愛知県被災者センターのみなさん、いつもありがとうございます。私達家族は愛知県に来て良かったと思っています。

【32】2年半不便と不自由な生活で精神的にも疲れ果てました。最近精神が不安定になってきました。年も取ってきていますので、この先、健康状態が悪くなっていきます。先の見えない不安が続きます。病気になって動けなくなったら、私一人と犬を福島県から持ってきています。二年間は弟の家に置いてもらっていたが四月から追い出されたので、引っ越しをしたし、1人になり、精神不安定になってきました。心から話せる人、助けてくれる人はいません。やはりよその土地から来たせいかな、皆冷たいです。暖かい心の人はいないようです。冷たいです。人の不幸を喜ぶかのようにと思う。買物に困っています。医者に行くにも電車と地下鉄に乗り換えるのが出来ない。タクシーで行かないと。以前は自分で車でどこでも行けたのに不便と不自由な生活です。あとそんなに生きないのに、老後困らないように心掛けて計画と計算していたのに、こんなことになってしまいました事は残念です。

【33】簡介：我はの母来〇〇是残留遺孤、1999年母来と子供5人家定帰日本定住。定住在宮城県女川町。2011年3月11日我は女川町〇〇商店“水産加工仕事”、午後1時ころ、商店の電力切れた。我は左腕の神経力が切断しました救●車送到石巻赤日医院救急センター、手術治療、手術中発生東日本大地震、海●。我は6時女川町走で帰りました。見に自己のうちない、家●人ない、〇〇商店なし、〇〇会長家と人ない、女川町変平地です。後我は6人なくなった知りました。今3人見だ、3人見でない。一人生活が苦ですね。救助：我は被災支援住

宅 1. 熱田区：船方荘 2. 南区：弥次工荘 3. 港区：新稲永荘 一、遠い
です。二、喧噪声大。三、人口密集。“精神病”休養残念です。愛知県被災
者支援センター申請政府調整 我は被災支援住宅的場所、批准我込住喜多山
西の県営住宅と喜多山市営（荘）の住宅。原因：我は住在ここに2年多、いろ
いろわかりました。→医院—予約、→食品商店、→日用品商店、→交通工
具、→王国会●館—集会、→小幡北山緑地→我は今年6月からこちは毎日
7：30分—9：00掃除（務）※回扱①政府对我生活也扶持。②被災支援セン
ター、我は提供、いろいろ扶持。喜多山便利です。我は好きです。喜多山安静
にです。求助方向：●●：求助センター幫助我引越喜多山西（県営住宅）喜
多山県営住宅図 ●花 OK 養病 OK 1号好住宅 2号 3号 4号 空家1,
2, 3, 4あります 喜多山市営住宅8階 空家ある
（○＝固有名詞につき伏せ字、●＝判読不能）

【34】今年の夏に福島に帰りましたが、お昼のNHKや地元TV局も被災地や被災者を取り上げて毎日放送しています。名古屋に来てから、震災や原発に関するTV放送の番組はほとんどなく、関心のある人にもあまり出会っていません。神戸の時のように着々と復興していると思っていたと言われたこともありました。自分も他国の原発事故など無関心だったことで、無知であり、福島原発の事故も自宅までは遠いと感じて、外に子供と水汲みに並んでいたことを後悔しています。安定ヨウ素剤を福島の人、事故の時全員飲んだんだよと、子供の高校の先生が皆の前で授業中に発言したそうです。教職に就く人間が誤った情報を流していると憤りを覚えました。情報を正しく伝えるメディアが足りないと感じます。安定ヨウ素剤は町の判断で町民に飲ませたのは三春だけ。いわき市は配ったのに県の指示が出るまで飲まないでと文書付きで、服用まで到らず……。郡山は何もなし……。だから今、甲状腺のガンの子供が44人もでているのです。無事に手術が終了しているなんて言葉で片付けないで下さい。大人じゃありません。子供が全身麻酔で尿管や点滴につながれて、絶望を味わいながら受ける手術や検査を想像して下さい。親の悲しみも知って下さい。少子化の時代に東日本の健康な成人になれる子供が残れる方法は何か探してほしいです。

【35】来年の4月以降、住む所がないので困っています。

【36】原発のような危険なものを動かしてはいけない。時間もお金も労力もかかるが、すべて廃炉にすべきだ。もう二度とこのような事故を起こしてはならない。次世代を担う子供達のためにも……。福島や他高線量の地域住民は、国や東電が責任をもって早急に避難させてあげて欲しい。日々被ばくしながら、いつか具合が悪くなったり、時には死んでゆく人も次々にでてくるかと思うと泣けてくる。「焼け石に水」の除染にお金をつかわず、1人でも多くの人々を安全な地へ移住する費用として欲しい。いつも事実は“あと出し”……。マスコミや政府は信じる事が出来ない。正確な情報が欲しい。

【37】被災者支援センターを通じて、中学校の生徒さんから手紙などを頂くことがあり、とてもうれしく思います。学校全体で被災者の問題に取り組んでおられるとのことで、震災の風化をくいとめるためにも、とても良いことだと思います。ありがとうございます。

【38】借上げを延ばして欲しいです。

【39】(困っていること) 食に関しては、ずっと困っています。非汚染地に引っ越してきても、汚染の可能性のある食材は全国で気をつけなくてはならない。小学校の給食問題で、仲間と市の教育課と何度も話し合いをしているが、気にしている人が少ないということで、あまり理解してもらえず、進展があまりありません。それでも保育園の方は干しいたけの使用を中止したり、少しずつ変わってきているので、継続して活動して行こうと思っています。また、主人と一緒に暮らせないのが辛いです。なかなか転職も気軽にはできないようで、いつまで単身赴任なのかわからず、この先が心配です。(良かったこと) やはり引っ越したことで、汚染から食以外は、開放されたことで、気持ちが全く違います。また、同じ意識の人と知り合えて、良い出会いもたくさんあり、良かったです。

【40】まだまだ原発事故の収束どころか、汚染水もれとかあって福島に戻れる可能性は極めて低いです。出来れば、住まいの延長をぜひお願いします。

【41】☆良かったこと

1) 学校の先生達の対応がよかった。

2) 美術館やミュージカルなどの招待券がうれしかった。娯楽は使うお金の余裕がないので。その他 1) 東京は汚染地であると認識されていないので、全て自費なのが納得いかない。2) 修学旅行が東京であること。(公立中学) うち、欠席しました。

3) 家族揃って暮らしたい。

4) 東京で被曝、娘には甲状腺異常がみつかっていて心配。中学を卒業してしまうと医療費負担が発生する。

5) 名古屋にいても食生活にものすごく気を使い、九州などから取り寄せている。国がもっと対策をしっかりとってくれない限り、これは続く。

【42】お米の配布や子育て援助等々、地域の方々にとっても助けられています。どうもありがとうございます。

【43】また原発の汚染水の問題。愛知に来て、福島：被災地は遠く感じます。大変な状態なのに安倍さんは原発の売り込みをされていて驚きです。子供達の被ばくもとても心配です。東電のいい加減さにうんざり、まるで他人事、とても悲しいです。いつになったら……。先日、「ホラ、あの人、震災で避難してきてるんだって！」と指をさされ傷つきました。何か悪いことをした訳でもないのに……。悲しかったです。この先、どうなるのか不安だらけです。そんな中、楽天のマー君にアッパレ。希望の光です。名古屋大学大学院環境学研究科 皆様方へ、お世話になります。東北出身者は打たれ強いので、これからガンバ！！皆様のご活躍をお祈りしています。

【44】震災から 2 年半たち、愛知県の生活に慣れました。主人は福島にいますので、2 重生活を送っており、金銭面で大変な状況です。子供達はこちらの生活に慣れ、私は放射能を気にしながら生活(子育て)するのは嫌なので、福島に戻るつもりはありません。せめて、借上げ制度だけでも継続してもらえれば、生活はなんとかなるのかな、と将来のことを考えています。米を届けてもらったり、花火の招待などありがとうございます。私は避難中でも子供達にたくさんの経験をさせ喜んで欲しいので、子供向けのイベントに参加させてもらえると、とてもうれしいです。

【45】愛知県に来て、早 2 年半。その間に、長男は小学 2 年生になり、次男は 3 才になりました。いずれは南相馬市に帰る予定ですが、長男は転校する事に対して、少しためらいがあるようです。県外に避難していた子供に対して、ずっと被災地で生活していたお子さんたちはどう感じているのか心配です。私自身も以前勤めていた会社に戻る予定ですが、受け入れてもらえるかどうか、考えることがあります。現在、思い悩んでいるのは上記のような事なので、支援センターの方に相談する事はありませんが、毎月 2 回送っていただける情報等、支援センターの方々には感謝しております。

【46】住宅のことについて。2014. 3. で契約が解消になりますが、その後のことについて、情報を知りたいと思います。

【47】・収入が減ってしまったこと。

- ・被災地と愛知県との往復の交通費の負担が大きすぎること。
- ・被災地の除染の対象になっておらず、状況が一向に変わらないこと。
- ・今までの生活費の賠償を東京電力（国）に一刻も早くしてもらいたいこと。
- ・生活再建、事業再建の見込みが立たない。

【48】交流会への参加ですが、同じ福島から来た人でも立場が違い、ひとつ言葉を間違えれば傷つけてしまうこともあり、二の足を踏んでいます。以前、支援センターの方から、現在住んでいる場所の近くに住んでいる福島の方を紹介されましたが、一方的に金銭的な話をされて、とてもつらかったです。好意でご紹介いただいたのかもしれませんが、いろいろな人がいるわけで、こちらも様々な事があり、まだ気持ちが不安定な時だったので、受け入れがたかったです。でも、様々な立場の人に、寄り添いたいというセンターのお気持ちは素晴らしいと思います。本当に感謝しております。

【49】 ○復興はまだまだ。がれきもまだまだ。多くの知人友人が仮設に、元の生活にはなっていない。時間と共にそのあたりがうすれていくのは悲しい。けれど、昨今では東北の被災だけではない。大雨の被害を受けた多くの方々にも支援の手をと思う。○今日まで、また、これからも感謝です。支援して下さった事、やはり一番「独りじゃない」と思えた事は、こうした前向きな気持ちになれる大

きな大きな力になった。

ここにいる私は、現在私が住んでいる地域の方々、福祉職員の方々、支援センターの方々、同じく被災してこられた同郷の方々のおかげだと思う。

【50】・子育てについて 避難前には両親、姉、友人のサポートを受けていたが、知り合いもない愛知県での子育てに不安とストレスを感じる。夫にはなかなか理解されない事や、サポートを得られず、精神的に不安定になる事がある。

・定住地について 私は福島に戻りたいが、夫は反対。子供の事を考えれば当然の事ですが、寂しい。でも放射線を気にしながら生活する事にも疲れを感じていたので、矛盾する気持ちと葛藤する毎日です。

・原発について 東電が出来る事には限界があるので、国が前に出て対応して欲しい。(汚染水、廃炉など)

・支援について 避難してから多くの支援を頂いて本当に有難く思っています。東北人は、何事も声に出す事が苦手ですが、同郷愛が強いので避難者同志の交流はとても力強く感じます。皆さんの力を借りて笑える毎日が増える気がします。

【51】『無関心』という罪です。日々の学校生活や家庭や学校教育に自然と調和しながら生きる教えが、全くないこと！人間の都合が優先で、自然を楽しみながら破壊している。偽善。全てが嘘の世界。見えないものへの感謝や尊敬の念が、ゴソッと抜け落ちてしまっている。人間。脳しか働かせておらず、我先にと、分かち合う心や時に辛抱する心が欠けている。人からの評価がなければ善い行いをしない。生物、動物は全て知っている。知らないのは人間だけです。生きとし生けるものを犠牲にして自然界の掟を守る者を戒めたり、罰しているこの世で一番、獣が人間である。山から下りてくる動物達を獣のようにニュースで扱う度に、獣は人間であると強く感じる。しかしニュースに出てきた動物達から被害にあった者は、まるで自分が被害者の様にそれを正当化するシーンを毎回毎回見てウンザリする。伝えたいことというより、一人一人が、考えるな！！感じる！！っと思っている。風を読める人間に動物本来が持つ本能、つまり直感をみがいて目を覚ましていただきたい願いが、昔から自分の中に潜在しています。今一度考える機会を与えていただき、ありがとうございます。→アンケート自体も考えている。考えるな感じる！！です。

【52】愛知県や名古屋市の支援はとても助かりました。現在感じていることは、私は運よく以前と同じような職に就くことができ、なんとか安定した生活を送れるようになりました。収入はある程度というか、ある方だと思いますが、福島の家ローンがあり、また、実家のローンに援助と、支出もかなりあるので、かつてのような生活レベルではありません。しかし、実家のことで相談したり、借り上げ住宅を相談したりしても、現収入があるからと、相談にもならないと悲しくなります。支出の面も考慮して頂けると助かります。なるべく、支援に頼らず、自分でできることはやろうと思い、やっとの思いで、正規の職に就けましたが、それが、いろいろな面で影になっています。交流会でも「職があるから、もう生活をこっちに決められるよね」と言われると悲しくなってきました。

【53】・被災者の雇用も住宅も3月までで、困っています。故郷は復興住宅もまだ、建っていません。延長を訴えたくても、どこへ言ったらいいのか……。・両親や息子の友達に合わせるために、帰省の支援があれば心救われます。
・被災者は原発被災者だけじゃないのに……。

【54】・高速無料化について、愛知県から福島に一時立入する場合や親戚、友人に会いに行く場合にも無料となる仕組みにしてほしい。
・借上住宅制度について、特例措置拡大希望。震災後一度東京に避難して借上げ制度を利用した。(1年在住)仕事の都合で愛知に移ったが、借上げ制度が一度しか認められない仕組みはおかしいのではないか。上記の希望を訴えていいのか？声をあげていいのか？わかりません。

【55】世界の中でも安全安心と言われている国で、まさかと思う出来事。天災は仕方ないとしても人災に近い原発事故は、許されないと思う。この年齢になって、県外での生活は予想だにできなかったこと……。しかし、前向きに生きていくべきと考えて、支援を受けて家族で過ごす毎日、3年目となり、こちらでの生活にも慣れて来て、地域の支援して下さる皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

【56】私達は車はありません。1年に1回でもいいので、貸切バスで紅葉とか見に行きたいです。(出来れば被災した方と)

【57】・国全体が震災の事を忘れかけている様に思う。・全く復興のめどが立たない（前住所）のが腹立たしい。・希望が持てない。・楽しくない。・意欲的になれない。・将来が不安だ。

【58】民間借り上げ住宅の期間が不安です。打切られると生活が困難となります。

【59】困っていることは、不安がなくなる限り続くのかと思います。私の住まいも来年4月までと期間があり、エアコンも暖房もないまま、（つけられないまま）1年間体調不良で薬づけでした。一時は社会復帰も出来、安心して生活できる環境に引越したいと夢をもっていました。交通事故で頭がおかしくなると、何も考えられなくなりました。そんな中、裁判をすることになり、法律などむずかしい話の中には、矛盾点が多く、不安で仕方がないですが、一人ぼっちで味方がいないのでこわいから、いいなりになってます。被災地の両親は、金がないヤツは出て行けと役所に言われたとか、震災前の税金滞納額の0円に利息がついたから6万、今すぐ払えと言われただけの悩みが増える話ばかりで辛いです。せめて南三陸の職員がまともな人であったらと、くやしくてなりません。南三陸の役場にふりまわされすぎです。

【60】・以前の生活水準に戻せるくらいの保証をしてほしい。

・東電の後手後手の対応を、すみやかに出来る様に国も対策を考えてほしい。

（うそばかりでどうにもならない）

・子供・被災者支援法を早く基本方針等を進めてほしい。

・原発問題が全然進んでないのに、なにオリンピックでもりあがってんだ！！

「怒」

【61】私は茨城県からの避難者なので、ふとした時に、今関東にいたらどうだったのだろうと考えることがある。震災時妊婦だったこともあり、避難・移住という考え以外は全く考えず、まず子供達を守ることが使命だと思って迷わず行動したけれど、人と比べるとはよくないが、関東にいたら自分のキャリアが少しは保てただろうかと、思う時がほんのたまにある。きっと関東にいればストレスで

押しつぶされていただろうと思うし、今より子供達に厳しい母親（アレに触るな、コレは食べちゃダメ！など）になっていたと思うので、避難できて本当に良かったのだけど、友人の活躍などを見聞きすると、たまに切ない気持ちになる。愛知に来て、理解してくれる人（一緒にボランティア活動などしてる友人）と全く理解を示さない人（子供の幼稚園のママ友など）の温度差がすごくあって、移住できて本当によかったと思う時と、どうしたら原発事故は現在進行形であるということを伝えられるだろうかと悩む時がある。夫婦共に仕事に関して満足していないし、茨城だから、国や東電の補償はないだろうと初めからあきらめているが、もう少し経済的に余裕ができれば、心の持ち方も変わるだろうに・・・と思うことがよくある。（些細なことだが、子供に欲しい物を滅多に買ってあげられないなど、みじめだなと感じることがたまにある）健康面も、私自身、階段から転げ落ちそうになるめまいが時々あるし、いつも頭が重い。少し前は手のふるえが止まらない時があったり、放射能と結びつけるのはやめようと思っても疑ってしまう自分もいて、しんどい時がある。子供達の定期検診も、いつも祈るような思いで受けている。つい最近、2020年の東京オリンピックも決まり、自主避難している人達（特に母子避難者）の立場は悪くなるだろうと心配になる。国はもう世界に向けて、東京は安全と言い切ったので、今までより、生きづらい世の中になるだろうと思う。とにかく、自分はこう生きたい！というビジョンをしっかり持って、周りがどうであれ、信念を持って生きていこうと思った。それにしても、本物の情報を国には出してもらいたい。今の願いはそれだけ。情報を元に国民が自ら選択できるようにしてもらいたい。震災以降、国は国民を守ろうとしないのだという姿勢がはっきり見えたので、誰かに頼って生きるのではなく、全て自分の責任で物事を選択していこう、そのために色々なことに関心を持ち、勉強していこうと思えたので、自分の中のその変化はすごくよかったと思う。夫も私もまだまだ捨てたもんじゃない！生きていく力があるのだ！と感じられてよかった。

【62】借り上げ住宅の2年契約の期限がせまってきているので、延長できるか。今いるところの金額は援助がないと多分払えない。引越しへの不安。

【63】早く震災前の生活水準を取り戻したい。

【64】私の家族は現在、愛知県に避難していることで安心して生活をしていると感じています。水、空気、農業、水産業等、生活に必要な、安全なものがいわき市ではもう全て手に入りません。「もう故郷に戻ることはできない」このことが今後どんなに満ち足りた毎日を過ごしていても、胸の内からなくなることはないでしょう。3月12日に避難して、愛知を定住先と決めるまでに12府県の自治体の担当者と話をし、実際に訪ねて確認した上で、この愛知を選びました。愛知県の方々には、とても感謝しています。「ありがとう」故郷のいわき市では、被災者の格差が大きな問題になっています。日本は東京オリンピック開催にむけてお祭りムードになるでしょう。しかし、その陰には解決できない大きな闇があるのです。このことを忘れないで下さい。

【65】東京オリンピックが決まったり、経済優先の流れの中で、福島原発事故の事や津波被災地の事など、根本的なところに全く目を向けられていないことに日々悲しみや憤りを感じています。地道に支援活動を続けて下さる方々に感謝いたします。

【66】一年半程ずっと母子避難で子供がチックになり、夫が避難を決めてくれましたが、被災者の再就職枠なんてどこにもありませんでした。どれほど厳しかったことでしょう。結局、静岡県になりましたが、愛知県は厳しいと被災者の中でもよく話題になりました。母子避難の生活はあまりに大変です。どうか、こういう時は枠を広げて欲しい。積極的に。

【67】子供の医療費の支払いを、以前住んでいた地域への申請ではなく、窓口無料化にして頂きたい。国の被曝検査など、愛知県でもできるようにしてほしい。

【68】・車等の免許がない為、買い物がいけないので大変。(高齢の為)
・東電と国の今後の基本方針をしっかりとしてほしい！！

【69】江戸時代の土地、特に田は一体誰のものだったのだろう。収税対象としてのあり様を見れば、課税される側、個人の“もの”ではなかった、一面には自分達の“生”を維持存続していく為の“もの”でもあった。米を育てる為には我田引水の字の如く、勝手気ままに自分の“もの”に水を引き込む事は許されず、掟

の従って上流から下流域へと順次行われて来た事で豊かな黄金色の“もの”に変わって行った。今回の事は一企業の“もの（発電所）”であるからといって、そこから受ける影響は単にその企業の●だけでは済まない事を如実に証明している。人口、産業の少ないあの地域であったからこそ、あれだけの被害であったので、この事を大都市近郊で起きたら、どの様になっていただろうか。口先では“申し訳云々”と言うけれど自分達が流した流し続けている“もの（毒、放射線、放射性物質）”の効果、結果を見る様にしか情報を流して来ない。上流に位置する人としての立場でその企業の責任を考えるべきであり、“法人”というのはいさういう“もの”ではないだろうか。国も然り。会津地方だっただろうか、孫が産まれたら桐の木を植えると聞いたのは。いずこの地にもあるものと思う。自分が見る事の出来ない孫の嫁入り簞笥を造る為に植える。隣の田、下流の田にけがれの無い水を、土を残そうという考え方こそが今、本当に必要であろう。フロー経済では何も伝える事や、渡す事は出来ない事を国は考えるべきだ。我々の先祖とも、子孫とも断絶されてしまうから、放射性物質によって汚された我々の生まれた地は手渡すべき“もの”としての価値を失った。あたかも放射線が遺伝情報のDNAを断ち切った様に。あなたはこれをどう思いますか？

【70】東日本大震災後は多面的な情報弱者だったと思う。発災後はすぐインフラが全て使えなくなり、避難中の情報はテレビ音声のみ。東日本太平洋一帯の大津波も原子力発電所の爆発も見たのは発災後10日を過ぎていた。土地勘のある所での生活ながらも、同じ避難者との接点を持つ気になかなか出来ずにいる間、あまりにも沢山の方達が広域避難で愛知県へ意志を持って決断した上での避難は、どれほどの苦悩を伴ったものか……。共有したい思いはあれども、避難区域の線引きに、何度も言葉を失ってきた。近寄りたいたいものがすでにあつたことに気付いて切ない日々が続いています。決断した上での一步を踏み出した方々と私達強制的避難者の避難生活のスタートする感情の相違が少なからず尾を引いており、曖昧な喪失にひたすら苦しみ、そこにあるのに“ふるさと”“ともだち”“家”に帰れない、会えない、住めない……。そんな思いを忘れることは無いのだと思う。しかし、うずくまっているばかりではなく、「できることから」家族から、子供から、夫婦から、始めていきたい。

【71】震災に合い名古屋に身一つで来ました。流され助けられ自分の物は下着1

枚も有りませんでした。色々ボランティアの方や福祉の方々に助けられ、今は一応普通の生活が出来る様になりました。未だに時折夢を見て飛び起きる事も有ります。でも、74才になっても助かった事は、まだ生きろと云う事かと何か出来る事がないか、新聞でエコバックを作って貼り広告用紙で折り紙作りをしてみたり、でも何か私で出来る仕事がないかと探しております。1つの事に夢中になっているうちは考えもせず、1日がすごせる様な気がします。外に出る事はおっくですが、家の中で出来る事があればと探しておりますが、時間と過ごせる事がほしいです。若かったらとくやしいです。毎日テレビと本とにらめっこでは1日が長すぎます。1人でいるとつい生きてて良かったのかなとか、いらない事を考えてしまいます。私で出来る家の中でやれる事が有ればとさがしております。でも名古屋に来てほんとうに良かったと思います。岩手にいる時も色々ボランティアでお手伝いしましたが今はお世話になるほうになりましたが、名古屋の福祉は本当にありがたいです。岩手にいたら私の様に1人住まいの生活者には今の様な生活が出来なかつたらうと有難く感謝しております。

【72】他県の人から、「東日本大震災？終わったことでしょ？」と言われることが悲しいです。今も余震が続き、復興途中なのに。地元に戻ると、震災前と雰囲気が違う。精神的に病んでいる人が多いし、一見明るくふるまっているが、元気がない。被災地の人たちが明るい方向を向いて、歩めるように私も努力したい。原発の問題がなければ、地元に戻り、地元で生活したいと思っている。ただ、知人の中でも甲状腺の病気になったりしているので、心配。実家に帰ると両親が「魚はあぶないから、食べるな」と言ってきたりする。子育てするのは難しそう。

【73】今現在私にも仕事が見つかり、パートではありますが、生活を少しでも良くなるように頑張っているところです。子供達もこちらの生活に慣れてきているので、何事も良い方向にいてくれれば幸いです。

【74】愛知県に来て良かった。

【75】仙台に移転して半年目に被災知り合いがいなくて、とても不安でした。アパートもいつ修理をして下さるか見通しが見つからないので、体力の限界、名古屋の知り合いからTELが通じ被災受入で名古屋へ移住しました。最近分かりまし

た。一部破壊での事で義捐金もNPOからの見舞金もなく自分の貯金ほとんど使い果たしました。来年から家賃が発生しますが金額によっては……。現在、精神的な病気は回復にむかっていますが、デイサービスは半年でやめ足腰が悪く要支援（掃除）を受けています。今少しの間家賃の支援をお願いしたいと思っています。交流会等参加したいのですが100mぐらいしか歩けません。外出も思う様にゆきません。現地の人達は、借家アパート住いの人達は見舞金をもらったとの事ですが……。

【76】・色々な事実が明らかになり、すぐに帰郷する事は難しいと考えています。住宅借上げ制度の期間を被災者の方で決められるようにしていただけたら、いつ出なきゃいけないのかと日々不安を感じる事がなくなるので、できればそのような方向に向かっていけばと思っています。

- ・月2回送っていただく情報は、非常にありがたいです。
- ・放射性物質による汚染の考え方が被災地に住む親族や主人とでは温度差がありすぎて、気まづくなったり口論になったりする事があって辛い。

【77】問13について、宮城では、すでに来年も無料で借りられるとのことを聞きましたが同じにしてもらいたい。

【78】気になっているのは ①金銭面②人間関係についてです。①金銭面について 私は借上げのアパートに住んでいますが、これは補助あつてのことです。できるだけ家賃の低いところを選びましたが、借上げが終了すると貯金すらできない状態になり、安心して暮らすことができません。あと2～3年程度、借上げの期間延長をお願いしたいです。また、私は最初の避難先である静岡市で心療内科の先生、カウンセラーさんの治療を受けました。特に心療内科は人があふれているので紹介がないと初診は断られます。また自分と相性がよくない方や、患者の心に沿えない方もいるので、4～5件まわってやっと心を素直に吐露できる医師に出会いました。（合う方を探すのが大変なのです）愛知に来てからも何度もそちらへ伺っています。そういった遠方のかかりつけ医に通う費用の補助を出して頂きたいな、と思います。（勿論、現在住む地域でも探せるでしょうが、仮に相性の良い医師に出会えても、震災の際の心の動きを1から話さないといけないのは精神的につらいものがあり、当時からお付き合いをしている医師に

診察をしてほしいのです) 東電の賠償ではある期間までしか帰省費用を認めてもらえませんでした。5～10年程、本人と被災地に残る家族が会いやすいよう、二者間(私の場合ですと、福島県郡山駅～愛知県三河安城駅)の電車新幹線の割引を検討して頂きたいです。交通費の負担は大きいので。②人間関係について 同じ被災者で集まるよりは、同世代の方(女性)と友人になりたいと思います。(勤務先は40～60代の方しかいないので) スポーツイベントなど参加型のイベント(名古屋～安城付近)のチラシをあおぞらに入れて頂けると嬉しいです。

【79】住居が心配です。3.11から2年半が過ぎようとしています。年々生活基盤が愛知県になってきています。住宅の支援が無くなってしまうと、どこに行き生活するか不安です。住宅の支援をお願いしたいです。

【80】住民税が高くてヤバイです。米の配布はかなり助かりました。

【81】・H25.8.25(日)豊橋市民センターカリオンビルに於いて 愛知県被災者支援センター事務局長さん瀧川裕康さん、大学生の方、ボランティアの方々に依り故郷の懐かしい相馬盆踊りを開催して下さい、癒を受け深く感謝いたして居ります。

・支援センターから定期的に戴いて居ります広報により情報を知り得て助かっています。私も広報に掲載されましたが、被災者の方の心情を知り得ることが大変参考になっています。今後も宜しくお願い致します。

【82】私達は長女の住む名古屋の方へ避難しましたので、他の人達と比べ恵まれているのではと思っています。近所に住んでいますので3人の孫達とも毎日逢うことが事が出来ますし、現在の生活に不便も感じないです。今後の生活の事を考える時、何が何でも、生まれた土地で、との思いは強くないのですが都会での住居事情とか考えた時に、難しいのでは思ったりしています。名古屋での生活も2年半になります。初めての経験でいろいろととまどう事もありましたが、現在は落ち着いた毎日です。私の一生で人の情と云うものを考えさせられた出来事でもあります。本当に感謝しております。

【83】愛知の人は原発事故について意識が低い場合が今も多い。原発事故などなかったかのように暮らしている人達との心のギャップを感じる。子供も甲状腺のうほうがあり、私も腫瘍があり、細胞を調べた。現時点でガンと断定できるものではなかったが、将来どうなるのかという不安を抱えながら生活している。こういったことが他人事ではなく、身近に起こっているということに日本国民は気付いて欲しい。全国の子供達の健康調査を国にはして欲しい。子供達の健康をフォローする世の中になって欲しい。

【84】私は、福島県いわき市から原発事故の為、まだ幼い子供達がいた為、放射能が心配で愛知県へ避難しました。しかし、いわき市は心配いらないと東電や政府は考えているのでしょうか。私達は過剰なののでしょうか。現在も汚染水もれや、海へも汚染水が流れているとか問題があるのに、住んでいて本当に大丈夫なののでしょうか？いつも、東電は「大丈夫です」と言いながら、後で、「やはりダメでした。」とか言ってますよね。どこまでが大丈夫なのかわかりません。政府は除染したから帰っても大丈夫などと言っていますが、本当に大丈夫ですか？除染で出た土砂などは、どうなっているのですか？自分達は住む覚悟はありますか？本当に大丈夫なら福島に政府の方々、東電の方々家族と一緒に住んでみて下さいと言いたい。

【85】10年間孫二人（被災時小4年女子、幼年中男子）を毎日預かっていたので、孫の成長を楽しみに生活していたので、今は宮城県に離れてしまい孫に中々会えないので淋しい限りです。老妻と互いにはげましあってふるさとの復興が進むことを望んでいます。

【86】被災者が家を建てる時、就職するとき、税金など相談の窓口がわかりづらい。というかわからず受けられる支援を受けていない人がいると思う。

【87】被災者支援センターからの情報は、いつも目を通しています。ありがとうございます。様々なイベントも参加してみたいとは思いつつも、子供達の部活動があるため、ほとんど参加できずにいます。また、毎月ぎりぎりの生活をしているため参加するための交通費でさえもつたいなくて我慢しています。今、一番疑問に思っていることは、子供達の就学支援は十分に受けれているのかどうかと

ということです。中学生は市から給食費と教材費等の援助をいただいています。でも高校生は何もありません。本当に何もないのでしょうか。失ってしまった生活を取り戻すために多額の借金をし、共働きで頑張っています。しかし、二人分の収入があると高所得とみなされ受けられない支援もあります。県への問い合わせも何度かしましたが、良い解答は得られず、もう二度と電話はしたくないと思えるほどでした。我家の結論は、家族全員で働けるようになれば、なんとかなる。早くてあと7年半、耐えれば何かいいことがあるかもしれません。追伸 ボールペンありがとうございました。息子がとても喜んでいました。

【88】支援センターの皆様には多彩なお世話をいただきありがとうございます。一宮に自主避難して2年2ヶ月になります。右、左も分からない土地で住居、職探し生きる事に無我夢中でした。施設から内定が来た時は感謝の気持ちでいっぱいでした。介護職の経験を生かして頑張る事が施設にそして親切な方々皆様に少しでも恩返し、しないと生きている意味がないです。淋しい時、ふっと電話が来て、一人ではないと思ひ人の暖かさが伝わってきました。本当にありがとうございました。交流会を通じて自分に何か地元役に立つかを考えています。ありましたら、教えて下さい。お願いします。暑さのためかこの頃フルタイムがきつくなり、9月から休憩無しで5時間勤務にお願いしました。施設側から収入が少なくなると大丈夫ですかと聞かれ、身体の方が大事ですから、住宅借り上げ制度ができるとありがたいです。生活が少しは楽になると思います。宮城復興プレスを読むのが楽しみです。工業大学ボランティア部の皆様ありがとうございます。

【89】子供の私立高校学費や甲状腺腫他諸々の定期通院の費用がキツイです。こちらに移住し転職し、年収が半額以下になりました。食いつぶす貯えも底をつきそうです。私立学費や無料塾などの援助、被曝している子供の医療費の援助を希望しています。フルタイムで働き生活費を稼いでいるので休日の交流会等は参加したくないです。のんびり休みたいので。工作中ケータイにボランティアさんからT e l が入るのも困ります。緊急時だけにさせていただきたいです。←勝手な事を書き連ねまして申し訳ありません。

【90】今は幸い仕事もあり、娘も私も元気で暮らしていけます。不満を感じるこ

とは、原発や放射能についての認識の違いです。少なくとも事故前の食品を始め全ての物品の安全値に戻すべき。その為の検査体制も整えてほしい。実際にベクレルとして数値が出ているのに「風評被害」とはどうしたものか。国が真剣に取り組んでいないから。安全性を懸念すると逆に批判される。保育園でもらう小冊子も電力会社から依頼を受けて書いているものがある。(原発推進の内容) フクシマから何も学ばず、さらに原発を動かそうとしている。放射能とは残念ながら一生つきあっていかななくてははいけません。その話し合う機会や場所をうばうのはおかしい。むしろ話し合われるべき。若い皆さんも、これからの人生において何が必要か考えて下さい。お願いします。

【91】「交流会」に何度か出席させていただき支援センターの方々のあたたかいお人柄、配慮に感謝しております。震災後、TV等で被災者の声 flowed 時に一部、「被災に甘えているのではないか？」と疑問を感じた事もありましたが、最近地に足をつけて頑張っている姿がみられる様になり嬉しく思っています。東日本大震災は確かに大きな災害でした。昨日、一緒に笑い合った人、朝にあいさつを交わした人が午後には津波の被害にあっていました。悲しい想いや辛い事もたくさんありました。しかし、今は台風や大雨による被災地が全国にあります。「被災者」と呼ばれる方たちもそうです。自分が特別な立場ではないという事を常に思いながら、その一方で支えて下さる方がいると思える事が、大変心強く、心の支えとなっております。

【92】宮城県では、家賃の無料が又1年延長になるという事を聞きました。が、現在住んでいる市では、来年以降も延長になるのか不安。同じ被災者でも、地域によって差が出るのはどうかな・・・と思います。今年も私達の住んでいる地域だけ家賃の無料がダメと言われました。でも知人の女性が市役所等に、かけ合っただけで何とか無料にしてもらいましたが・・・。来年以降のことを考えると不安・・・生活が苦しいのに、家賃が発生すると、生活出来ない・・・。小さい子供達を抱えているが、不安でしょうがない・・・。

【93】自主避難のため、アパートは自分で借りているし、避難区域に住んでたわけじゃなかったのでお金の面ではけっこう大変ではあるけれど、お米を送っていただけたり、交流会やプロ野球に招待していただけるなど、本当に愛知に來れ

で良かったです。困ってる事はそんなにないけれど、……。里帰りが気軽にできるような定期バスとかあったらすごく助かるなあとは思っています。

【94】言葉の違いで誤解が生じる事がしばしばあり伝えたい事があってもなかなか伝わらない、それがストレスになって円形脱毛症になっている、こんな事長く続いたら……。死んだ方がましだと思っています。

【95】原発事故がどんどんなかったことにされてしまい、日本で子育てするのが恐いです。海外に出ていく人々もいますが、うちは無理です。安全・安心（本当か疑わしい）ばかりの中でどうしたら子供を守れるのかわからない。

【96】・平成 23 年 5 月より名古屋に避難しお世話になってますが、誠に手厚い支援のお蔭にて無事、安心して今日迄至って居ります。有難く御礼申し上げます。

・これまでに気の付いた事を書いてみます。1. 家族の絆の大切さ 2. 本人の意志力の強さ 3. 本人の健康の維持・増進 4. 環境への順応力 5. 支援窓口の開設 以上。

【97】主人と離れて暮らしているので、娘となかなか会う事が出来ないのも、高速道路の無料化があるのだから、公共交通機関の補助もおこなって欲しい。家賃の補助も毎年々では困る。何年間というふうにもう決めて欲しい。毎年、来年はどこに居るか心配。

【98】縁もゆかりもない愛知県に避難して来たが、親戚、知人などがいない中、支援センターなどの主催の交流会のお陰で同郷の同じ境遇にある方々と知り合うことができ、気持ちを分かち合うことができ、とても救われました。支援センターを始め、いろいろな団体の方々支援を受け、とてもありがたく、感謝の気持ちでいっぱいです。（定期便、交流会をふくめ）支援センターが心のより所となっているので、今後の存続を強く希望します。

【99】被災当時（長男 2 歳 8 ヶ月、長女 1 ヶ月）幼かった子供達がそれぞれ成長し、来春には 2 人そろって幼稚園に通う事が出来ます。これは私にとっても子供

達にとっても大きな節目です。津波の被害が大きかった地区ではありますが、無事にここまで育ってくれた事に感謝です。原発事故がおきて難民になって3年目。国はこれからも何もしてくれないと思いますので自分達で、しっかりと歩んでいくしかありません。これから先何年、何十年かしたら、今の生活に満足して本当に笑える日が来るのか、それさえも今はわかりません。ただ、津波で被害にあってしまった方々の事を思うと、こうして助かった命を大切に、日々何とか穏やかに過ごしていけたらと思うこの頃です。

【100】子供達の甲状腺検査がやっと8月末に行うことが出来ました。2年以上経ってやっとのことで国への不信感が増した。こちらに家族4人で来て相談出来る人もいず、ひたすら子供の為に必死で生活してきました。愛知県の支援団体の皆様方には感謝しております。こちらに来てから心身の限界の為、病気がちになり、慢性じんましん、顔面麻痺、甲状腺機能低下症、胃炎と、ここ1年、仕事、家事、子育て、と休むヒマもなく、救急車ざんまいです。「心のケア」が欲しい。辛すぎます。帰りたいけど、水、食への放射能の影響を考えると、まだまだ、こわくて帰れない。けど、身体がボロボロでいつたおれてしまうんだろうの毎日。いつ倒れてもいいように子供の為に貯金している。人の地域性が違う為、なかなかなじめず、なじんだふり、結局、あの体験は自分がしないと皆、日に日に忘れてしまう。先日の緊急地震アラームがなった時もこわくて震えが30分も止まらなかった。いずれくる東海地震の備えもおかしいと思うくらいの量を半年に1回買い替えてます。何万円分も。心のケアを・・・。

【101】被災者支援センターのみなさまにはいつもお世話になっており本当にありがとうございます。また飛島のみなさまからも何度もお米を頂き本当に感謝しております。故郷大槌町からも広報や色々なお知らせが届き、復興の状況を伝えてくれますが、これから盛土を始めるようで、いつになったら地元の復興住宅に入れるかわかりません。実は震災前からのローンもあり、月々8万位の年金から支払っておりますので、県営住宅に無料で住まわせて頂いて、本当に助かっています。脳梗塞や色々な持病のため病院通いもしていますが、現在は有料となっているので団地の共益費等も支払うようになったため、正直生活が楽ではありませんが、近くにすむ娘家族に色々とお世話になっています。出来れば復興住宅が完成し、地元に戻れるまでは、無料で住まわせて頂ければ本当に助かります。福

島の方だけではなく、岩手、宮城からの被災者もみんな同じ様に対応して頂けたら・・・と思います。現在 82 歳です。老人会やたくさんの方々と出会え、支援して頂き、安城市の福祉の方々や市のお世話になり、本当にありがたいです。どこに流されたかわからない長男の分も一日でも長生きすることが恩返しだと思っています。

【102】今になり、PTSDの症状が出ている。子供や夫がいるのでずっと元気にふるまってきたが、自分へのケアを怠り、今、人と深い付き合いになり、過去を知られることがこわくなり、人からの誘いを断ってしまったり、素直に人とつきあえなくなっている。まるで過去の犯罪を隠して生きているようです。当時SNSで傷つき、現在のコミュニティでLINEに誘われても参加できない。付き合い悪いと思われていると思うが、その理由を説明することもできない。主人が社会的責任の大きい職業であり、私も同業の資格を持っているため、ずっと避難してきたことを恥じてきた。多分一生自分を許せない。ゆえに、幸せな日常を、幸せに思っただけではないのではないか、とか、旅行に行っても、幸せな反面、罰当たりなことを・・・と自分を同時に責めている。やっと最近、福島ニュースを見られるようになってきた。それは少し前進。ただ、自信を持って生きられなくなり、家族の前でも、誰の前でも泣けず、元気にふるまい、正直とてもつらいです。人より多少、金銭的に余裕があるので。そんなことも、辛いなんて、言っただけではない気がする。自分に自信を取り戻すには、どうしたらよいですか。ずっと自分の傷を見ないふりしていても、精神の安定を保てるのでしょうか。

【103】2012年頃から私と子供共々甲状腺を患い健康を害してしまっています。放射能の被曝の可能性が高いと思うが、病院で断定もできず、国の、東電の保障も受けられないでいます。早々に自主避難したのに、この状態です。家計の為地元に残り働いている主人の健康も心配でなりません。子供も進学どころではありません。健康被害に対する受け皿はないこと！日本中に放射能汚染は広がっているけど、安倍さんはオリンピック誘致で世界中に大丈夫と嘘をついている。その影で同じく、健康被害を受けた人々は葬られてしまうのではないかと・・・！？又、生活の不安です。2014年2月に愛知県の借り上げ期間が満了になります。今まで乏しい仕送りできりつめてなんとかやってきました。家賃は大きいですが。福島県の放射能汚染量では、チェルノブイリで人が住んでいる所

はありません。そこへは絶対に帰れません。子供を守る親としての責任もあります。本当は地元で残って働く主人もこちらへ避難して欲しいのですが、お金なくては暮らせません。せめて、今現状維持だけでもでき、子供を守れるように、家賃借上げ期間をもっと延長していただけないでしょうか！！どうぞ宜しくお願いします。あと愛知県は福島から離れているため、放射能に関して大丈夫だと安心しているようです。福島原発の汚染水問題も2年経た今、ばくろされました。すでに海は広く汚染されているし、被災地のゴミも日本中で燃やしています。体に入れる食べ物からの被曝がすでに日本全土で始まっていると思うのです。ぜひ「食」にもっと気をつける（放射能野で測るとか）必要があります・子供は大人の2倍吸収されます。すると被災地の人でなくともどんどん病んでいきます。大げさではなく本当に大事なことだと思います。学校給食など子供の口に入るものも特に気をつけてほしいです。被災者として、不安、心配、恐怖は尽きません。もう2年名古屋の暮らしにも慣れてきて、特に被災地の人と交流がなくても、どうにか人間関係も広がっています。ですが健康、生活、展望を考えたとき、同じ被災者がどこかで繋がっていること、お互いの情報を交わし、まとめ、発信する意味でも、結束できる繋がりには必然的に必要だと思います。支援ボランティアの方々には、そんな余裕のない私たちを本当に支えてくださって、ありがたく、頭が下がります。ありがとうございます。私たち避難者はこの先も生きるだけで必死な人がほとんどだと思います。今後も変わらぬあたたかい支援を頼りにしております。よろしく願いいたします。

【104】 来年の4月から、今の市営を出なくてはならないのか?!心配です。

【105】 福島で生活していた時も、ギリギリの生活を送っていたのに、愛知県への避難でその月の給料を使い果たし、生活費もなく、原発から50km離れていた為、被災証明や、り災証明ももらえず、自主避難扱いになり、義捐金等も一切もらえず、こちらで被災者支援資金の貸し付けを受け、生活してきました。返済は、来年の4月まであり、今のタクシー乗務員の給料では、貯金する事もできず、来年から家賃の支払いも発生する為、どうしたら良いものかと、悩んでいる次第です。今は愛知県の支援で、公団住宅に住んでいますが、ここの家賃は割と高いので、支払いができるかどうか不安です。市営か、県営の住宅に移れば良いのですが、そうすると今度は引っ越しの費用等を考えると、それも難しいのです。

【106】 臨時雇用枠で 1 年余りは働くことが出来たものの、各市町村によって市職員の対応は様々かとは思いますが、特に津島市は苦難であった。精神的に持続させる事は無理だと自主退職するも、今後の仕事の・・・生活の安定の目処は立っておらず、原発事故前に戻れたらどれだけ・・・と落胆してしまう。おおよそ人に会う等という気もおきない。(交流会等)住宅の支援を、少しでも続けて頂けると有難い。家賃の全額でなくても・・・しかし、一方で、充分して頂いたのでこれ以上は申し訳ないとも思う。自分が時々ものすごく惨めに思えてくる事がある。原発の影響さえなければ福島に戻りたいのだが・・・。幼い子に対して不安は拭い去れない。

【107】 避難者との交流会を同年代で開催してほしい。名古屋市内での交流会を増やしてほしい。開催地が遠いので参加できません・・・。

【108】 大震災直後の 4 月から名古屋市 (UR 賃貸住宅：みなし仮設扱い) にお世話になっています。近くに娘が二人、住んでいて孫も 4 人おりますので淋しくはありませんが、やはり心配は住宅の再建です。被災地の復興は遅れており、高台移転の見通しも立っていません。当分の間は今のスタイルを継続したいと考えていますので、そういう方向性での支援を続けていただければと願っています。

【109】 今離れて暮らしている主人の仕送りで生活しているのですが、主人のお給料が以前よりも減ってきていて、貯金を切りくずす生活をしているので大変です。この生活をいつまで続けられるかわからず、不安な生活を送っています。私も「働かなくてはいけない」とは思っているのですが、体調があまり良くなく、病院で薬をもらって飲んでいます。はやく、どうにかして、気持ちも生活も安定できるようになると良いと思っています。

【110】 ・家賃支援がいつまで続くのか？不安です。

- ・ 県民健康管理調査が簡単に受けられるようにしてほしい。
- ・ 内部被ばく検査も避難先で受けられるようにしてほしい。
- ・ 甲状腺検査も避難先で受けられるようにしてほしい。(手続きは簡単に受けら

れるようにしてほしい。)

- ・住民票を移動しなくても前の自治体の子ども医療費受給資格者証を使えるようにしてほしい。
- ・高速道路料金をどのルートを通っても無料にしてほしい。
- ・月に 1 度は新幹線で家族に会いに来れるように、往復の料金を無料にしてほしい。
- ・国は被災地にもっと目を向けるべきだと思う。オリンピック招致にあんなに頑張っ、一丸となって力を入れることができたのだから、そのくらいの気持ちで福島第一原子力発電所の事故を収束させてほしい。人の手でコントロールできるようになるまで必死になって動いてほしい。
- ・福島に不安定な原発がある限り安心して戻れない。そこが安定された状態になってはじめて福島の復興が始まるのだと思います。

【111】東日本大震災、津波、原発事故から、もう 3 年目を迎えようとしていますが、私は昨日のような気がしてなりません。愛知県の皆さんに大変お世話になってますので、感謝しつつ毎日幸せな生活をして居りますが、私の幸せの反対に、被災地からの電話、手紙のやり取り等のやりとりで、又、毎日のように、テレビのニュースを見ますと、大震災のあの真っ黒い大津波に仕事場から大小のたくさんの漁船、その他、住宅から、自家用車様々な諸道具をいっきにひとのみしてゆく姿を、この目前で見た、つらい時の事を思いますと、とてもつらい思いになります。仮設住宅生活をなさっている皆さんに（頑張れ、負けるな、くじけるな）必ず幸せが帰ってくるからと陰ながらお祈りしています。◎必ず復興するがんばろう 一、はるばる来たぜ瀬戸の町 逆巻く津波のりこえて たどりついたは苗場町 とても素敵な人たちばかり 明るい笑顔で迎えられ ほんとうにうれしくてありがとう 二、黒い●黒い大津波が恐かった 大口開けた獣のようだった 故郷一気に呑み込まれ あっという間の爪の後 残るは瓦礫と霧散（むざん）な姿 とてもつらくて生きる力を失った 三、大和魂ある限りある限り 力を合わせて立ち上がろう なせばなる何事も 復興めざしてがんばろう 一人一人がこの世の宝だよ すばらしい大きな絆 華を咲かそうよ ◎どこへ行ってもこんにちとはとあいさつすると、明るい笑顔が返ってきますので、ほんとうに大好きな瀬戸の方々で幸福な日々でした。感謝しています。

【112】私と子どもたちは、原発事故による放射能の影響が不安で、実家のある愛知県へ来ました。主人は仕事があるので福島市に残っています。震災については、自然が起こしたことであるので、起きてしまったことは仕方ない、前を向いて進んでいこうと思えます。ただ、原発事故に関しては、その後の東電、政府の対応が、あまりにも、信頼できないために、大きな不安があります。福島は本当に大丈夫なのか、というよりも、福島だけでなく、日本全体の問題として、今となっては多くの人が忘れてしまったのか、無関心なのか、そのことが気になります。福島原発の問題を国民全体で考え、解決しない限りは、3年前で時間が止まったままの人たちが数多くいるのです。表面上は前向きに生活し、進んでいるように見えても、心の中では時間が止まってしまっているのです。被災者だけでなく、日本国民全体に、もっと、原発に対する意識を向けて欲しい。“風評被害”なのではなく、本当に福島は、日本は、安全なのか、真実を明らかにし、適切な対応をすることで、全ての被災者が前を向いて、進んでいけるように、被災者だけではなく、国民全体の意識の変化が必要なのだと思います。

【113】築5年のマイホームを手放して来ました。無担保ローンだけが残りしました。転職の為、無職の間の生活費、低い給料からの再スタート・・・貯金も底をつきました。綱渡りの生活です。それでも娘が今後病気になる、不妊になる、と心配すること、なってしまった時の後悔を考えたら、避難という選択肢しかありませんでした。病気で苦しい思いをするなら“お金がないよー(泣き)”と半ベソかきながらでも笑って暮らす方がずっと幸せだと思っています。なので生活は苦しいですか？と聞かれればそうですが、不幸ではないと言えます。支援はありがたいですし、もらえるものは頂きたいですが、優先順位、他にやるべきことがあると思っています。(原発の終息 今も福島で暮らす子供たちのことなど・・・) 色々大変ですが、国とは、政治とは、生きる、とは・・・知らなかったことが多くて知るきっかけにはなったことが、今回の事故で私が得たものです。

【114】・愛知県に避難している同郷の人の情報が掴めず寂しい思いをしている。
・一番は将来的な不安が大きい。(生活、健康、病気持ちの子供等)

【115】生活の保障。

【116】私は宮城県山元町「から避難してきた者です。愛知県名古屋市について右も左も判らない者にとって県や市からいただいた情報誌は大変有効に活用させていただきました。感謝申し上げます。尚名古屋市に居住することに決めましたのは、娘がこちらに嫁いできていた関係です。

【117】住まいについて 今現在は無償で使用させて頂いてますが、H26年4月1日以降に家賃を支払って住み続けたいと思っております。その手続き内容について、夏ごろに連絡をくれるとの事でしたが、まだありません。住むところについて早く安心できればと思います。

【118】仙台の友人に会いに行く為の費用を出してほしい。原発を早くなんとかしてほしい。

【119】被災者支援センターの方々には本当にお世話になっています。他県にもこの様な機関があると良いと思います。自主避難した事は大変でしたが、他の人の為にいろいろ支援して下さる方々がいるという事でとても心強く、嫌な事ばかりじゃないなど、これからの人生を思いなおす良い経験になったとさえ思える様になりました。この感謝の気持ちを忘れずにいたいです。

【120】・民間の借り上げ住宅に住んでいるが、家賃の支払いが発生したら住めなくなってしまうので、今後がとても不安。

・駐車場代を自己負担しているので、きびしい。

・受験生の子がいるが、塾に通わせる余裕はないので、自分で勉強するしかなく、本人が限界を感じている。

・子供の医療費は無料だから良いけれど、自分は支払わなければならないので、病院へ行きたくても行けない。

・国民健康保険の金額が高くて、家計を圧迫している。

・貯金も賠償金も底をついてしまい、自分も仕事を始めたけれど、子供に手がかかりあまり働けない。

【120】1歳の子供がいるため、愛知県にまだ、住み続けようと思っています。

- ・不安な点は、住宅の事。仕事の事。
- ・周りの人々は大変良くしてくれますが、感謝していますが、自分が疲れていると思う時がよくあります。

【121】・福島を少しでも早く、安心して住める土地に戻してほしい。

・今、県営住宅に住んでいるのですが、平成 26 年度 4 月以降の方針はどうなるのか不安です。家賃を支払えば住み続けられるのか、転居を考えなくては行けないのか、その費用のこととかもあるので、なるべく早く決めてほしいです。

・名古屋市のボランティアセンターの方々や、色々と支援して下さった方々には、本当に感謝しています。何もわからなく、何もない所からの始まりは、とても不安でしたが、ほんの、ささいな事でも、嬉しく思いました。気にかけてくださり、支援して下さった事、本当にありがとうございます。

・名古屋弁がわからない私にとって、話していると、一線おかれた感じがするのが少し気になります。私は福島弁だし……。気にしすぎなのでしょうか？でも気になります。名古屋の人は、あまりうけいれない人なのですか？

・東電は何をやっているー！！！！というのが本音です。

【122】お陰様で、今はこちらでも満足な生活を送ることができています。しかし今でも福島には戻りたいと強く願っています。残り数カ月で戻る予定ですが、これまでの支援に、本当に感謝しております。

【123】愛知県始め、被災者センター様、その他はかなりやってくれていると思います。ただ、福島の方が西日本等では多い事もあり、私の様に宮城岩手の津波による移住の人間はあまり支援や情報が無いとも感じます。福島、その他関東からの原発絡みだけ対象と言うか。(自主避難の方たちは正直どうかとも思います。家とかあるだろうに、仕事も地元であるのにとか……。ごめんなさい) 私は、これまで、全て一人で働いて義援金や賠償金もなく、一人で借金もして現在ここに居ます。生活をする為です。正直知らない土地に一人、イヤだけど、戻るに戻れなく、仕方ないから我慢して一人でいます。宮城県は県外からの帰還策も情報が無いし。津波損です。全部一人で立て直すしかないんだな……。国とかもアテにはしてません。被災者センター、市役所等からの交流や支援情報も、原発絡みの人達だけ対象ばかり。あの人達はたしかにかなりキツイけど、その人達

だけじゃない。正直、自主避難の人ってなんなんだとも思います。単なる自己申告で支援受けてるだけではと・・・ こんな意見するなんて、私たぶん疲れてますね。余裕が無い。 ごめんなさい。読み流して下さい。ホント、津波損って感じですよ。まだまだ言いたい事はあるけども、まとまらないし、今思うままに書いたの、駄文長文、汚い字で書きなぐってスイマセン。このようなアンケートは、唯一、自分の意見・思いを言えるので、ありがたいし、もっとドンドンやってほしいです。ゴメンなさい。

【124】愛知県被災者支援センターの職員様へ お世話になっています。ほんとうに、ありがとうございます。職員様に毎日の仕事がおつかれさまでした。

【125】いつも県、ボランティアセンターその他色々な企業、周囲の方々に本当に助けられていると感じます。感謝の気持ちでいっぱいです。毎日 TV では「汚染水・・・」という言葉が出てきます。安倍首相の「コントロールされている」や「東京は安心だ」＝福島は危険？と腹立たしい発言がありました。もうあきれてしまいます。何も良くなっていないし、むしろ悪い方へいっていると思えないです。戻ろうという気がどんどん失せていますが、残っている自宅、主人のこともありどうしよう・・・そんな毎日です。

【126】何時もお世話様になってありがとうございます。月日の経つのは早いもので、名古屋に来て、もう 2 年 6 カ月になりました。年をとってくるので、体が少しづつ弱ってしまいます。先月の 25 日は相双地区の交流会に出させて頂き、皆の元気な姿を見て、1 日何き忘れて楽しい 1 日をすごさせて頂き本当に、ありがとうございます。あの日から少しづつ元気になり、家の片付けや掃除などさせて居ります。今オリンピックで、日本中は皆元気です。私達避難者は心の底からは喜ぶ事は出来ないのです。でも国民の 1 人としてオリンピックを成功する事を、7 年後も元気で居てテレビで見られるようにしたいと思っています。今も東電では放射線が出て居ますが、何年か過ぎたら帰る日が来るかも解りません。その時まで元気な体で、自分の足で帰りたいと思っています。何時になるかは解りませんが、その時が来る日が有ると思いますので、どうか、これからもお世話になりますので、よろしくお願いします。支援センターの皆様には、心から感謝させて頂いております。年はとりましたが、がんばりますのでどうぞよ

ろしくお願いします。くだらない事ばかり書いて済みません。9月23日

【127】・避難後に出会った方々と新しくつながることで、私も子ども達も前向きな気持ちになることができました。

- ・状況がそれぞれ違いますが、話をする事で少し気持ちが楽になりました。
- ・母子避難者に対する高速道路の無料措置はとても助かりますが、600kmの道を往復する体力に限界を感じます。他の交通手段にも目を向けてほしい。ありがとうございました。

【128】・困っていること 今後、借り上げ住宅制度がなくなってしまう前に、愛知県内に居住したい方(全員)に対して、何らかの支援をして頂きたいです。(引越し代援助、引越先等) 私個人的には、市営住宅等の提供をして頂きたいです。現在の住居では、とても賃料をお支払いしていくのは困難です。もし、なんの支援も無い場合は、福島に帰る事になりかねません。(現在、低収入の為)どうか、お助け下さい。

・解決してほしいこと 現在の福島県の状況をしっかりと把握していただきたいです。年に2回しか帰れませんが、今だ(住居)何の除染もしておりません。そのような状況で本当に安全だと言えるのでしょうか?また、放射線量も高い場所(ホットスポット)も数多くあります。福島県民を1日も早く安心して生活できるようお願いしたいです。また、福島県民の賠償金に格差があるのも不満に感じます。もちろん帰宅困難者が1番賠償を受けるのは当然かもしれませんが、他にも沢山の方々が困っております。日本が福島が平和を来る事を祈るばかりです。(被災者支援センター)いつもボラセンの方々に感謝しております。温かいお心に救われています。

【129】何時もお世話になって居ります。お陰様で閑静で良い処へ住まわせて頂きご近所の方々も良い方に恵まれ感謝して居ります。週二回デイサービスに行っておりますが、私達の唯一の楽しみです。皆さんとお話しが出来ますのでこれも、息子の嫁が忙しい中を、私達の知らないうちに手続きをしてくれていたお陰と感謝しています。蓄えが僅かになりこの先不安では有りますが、体に気を付けて頑張っておりますので、何卒、今後共宜しくお願い致します。

【130】 私は 6 人兄弟の長男で、現在は震災後に結婚もして、子供もいますが、1 日も早く安全な環境で自由に川や海で遊べるようになってほしいです。私の父は毎年、夏になると川、海でキャンプやバーベキュー、釣りなどに家族で行くのが恒例でした。福島で以前のように自由に自然環境で遊べるように、1 日でも早く回復する日を願っています。

【131】 震災により、被災の状況は地域によって異なると思いますが、現在に於いては、福島の原発だけが問題とされている様に思います。被災者の集まり（話し合い）の案内なども福島の被災者向けになっていて、同じ被災者としてその会場に足が遠のいてしまっています。（仕方ないと思っていますが・・・）環境としては、他の方から比べれば、良い方かも・・・と考える努力はしていますが、全てを失い築 8 年の家のローンを支払った今、経済的な部分で全然安心などできません。年齢を考え、又、家庭環境からも、このままで良いのか？と焦りと不安でいっぱいです。そんな中、支援金が適切に運用されていないなどと情報を受けた時、最初は有難いと思っていた支援が、損失に対して全然足りてない不満に変わり、そう思う自分が情け無くなるという精神的悪循環を伴う現状です。明るく楽しく、前向きはもちろん大切ですが、実際、生活基盤の安泰なくして、とうてい大切なポジティブな心持ちにはなれません。私の場合、失った財産も大変な物ですが、家族として一緒に生活していた愛犬を失ったショックが大きく、人が多く亡くなった現状の中、動物の死に関して、悲しみを共有できる人がいないのも、辛く感じています。又、家の中で仕事をしたいと考えていますが、ネットに関心をもち実行したい事があるのですが、一步を踏み出せずにいます。そういう時の相談にのって頂ければ心強いと考えています。支援センターの皆様には、大変、お世話になりありがたく感じております。時々釜石に帰ってやり残した事や、今の状況を確認したいと思いますが、移動する為の電車の料金など安くなるなどの支援があればいいのにと 생각합니다。

【132】 住宅借り上げ制度も 3 月で終わる予定なので、その後の生活がとても心配です。子供の将来を考え愛知県に来ましたが、家賃を払い子供と 2 人生活していく事は余裕もなく厳しいです。いろいろ悩むと福島へ帰ろうかとも思ってしまいます。原発さえなければと思うばかりです。

【133】・仕事先が見つからない。

・収入が安い。

【134】原発に関しては安心して生活できているので良かったと思います。自主避難の為、自力での生活ですが、高齢の為いつまで元気で働けるか、生活していけるのか、不安でたまりません。こちらへ来て貯えもだまし取られ人を信用出来なくなりました。今は前を向いて生きていく事に必死です。

【135】はじめに 3. 1 1 大震災で尊い命をおとされた方々の御冥福を心よりお祈り致します。

◎困っている事

・避難して来て以来の悩みの種・・・住まいです。来年 3 月で愛知県は支援打ち切りの方向で話をすすめています。その先、どうすればいいのか？全くわかりません。

・3. 1 1 を毎日思い出しては涙が流れている。精神的ダメージはとてつもなく大きいです。

◎伝えたい事 備えあれば何とやら・・・災害が起きてからでは精神状態が不安定なのを経験しました。子供の頃年寄りから教えてもらった“準備事項”を改めてかみしめています。

・水なし水洗トイレは×、電気×、ガス×、TEL×、これでは全くの原始生活です。

・地震だけでなく原発事故の激しさに、国は全く打つ手なしでどうなっているのか？

・余りのショックに歩くのもトボトボ、神経だけがとんがってしまって、避難した学校ではまわりの人の一部始終が気になり仕方ありませんでした。

・1 1. 9 の検診では自覚症状なしの胃潰瘍になっていました。翌 1 2 日朝食にもらった塩のついた 4 0 g 程のおにぎりの味のおいしかった！！こと忘れられません。

◎現在の被災地の様子

・復興という名に程遠い。お金が回る所に回っていない理不尽さに腹立たしくて仕方ありません。被災地の復興なくして日本の笑顔、未来はないですね。

◎ 3. 1 1 で自分の意識変化

・今やる事はできるだけやっておこう。この先は何がおきるかわからない。
・日々の生活のふとした出来事に、生きている喜びを以前より強く感じています。
・命あればこそ・・・健康と多少のお金があれば十分です。”原発に頼りすぎて、ぜいたくに溺れているのでは？人間が扱いに困るのは使用すべきではありません。どうして、どうして日本人の考え方が貧しくなったのでしょうか？
・東北人は我慢強いので、その我慢強さが反対に復興への道がスムーズになっていないという考えもあります。要するにもっともっととがめつく動かないとね、という事なんです。

◎震災を忘れないで、復興の道を歩き続けている被災地、被災者の背中を押し続けてください。よろしくお願いします。

【136】・借上げ住宅、年度更新ではなく例えば5年で打ち切りなど長期見直しを出してほしい。来年から家賃がかかると急に言われれば計画も変わる。

・家賃がかかるなら今のところを出るつもり→急には見つからない。→早めの情報がほしい。

【137】私は震災当時、福島市に住んでおりました。震災後1ヶ月で私の実家のある名古屋へ子供と2人母子避難を決めました。主人は仕事があるのでそのまま福島に残りました。今年の4月に主人は東京勤務を命ぜられ、現在、横浜に1人で暮らしております。(福島には転勤で住んでいましたので、もともと横浜に自宅があります。) 主人が横浜に戻った時点で、主人の考えは、もちろん私も子供も名古屋を離れ、横浜で一緒に暮らすのが当然という雰囲気だったのですが、私は関東全域、子供が安心して暮らすには不安があると思っておりますので、とりあえず、今年1年は名古屋にとどまれる様、説得しました。来年には子供が小学校に入学しますので、横浜に帰る約束になっていますが、横浜に住んで大丈夫なのだろうか？できれば、このまま放射能の少ない名古屋にとどまりたいが、父親の居ない生活もまた子供に悪影響なのでは？など、毎日、毎日、考えに考えておりますが、決断できません。被災者支援センターには私と同じ様に関東からの母子避難の方々も多く登録されておられ、そのお母さんたちも、私と同じ悩みを抱えておられる方が多くいらっしゃいます。私だけでなく、そんなお母さんたちを悩ませているのが、周りの社会(ご近所や子供の幼稚園のお母さんなど)に自分たちは放射能を気にして避難してきたとか、日々の生活も食材な

ど放射能を気にしている、のはとてもとても言えない、という事です。時には身内家族の中でさえも放射能を気にしすぎだと、対立し、気まずくなるのです。

「子供を被ばくから守る」のは当然の権利だと思います。その権利を世間に認めて欲しい。被災者子ども支援法は自主避難の権利を認め、被ばく防護の権利を認めてくれている法律ですが、8月に出た基本方針も骨抜きで、世間にも広く認知されていません。もっと広くこの法律が人々に知られ、被ばく防護は権利であり、自主避難は当然の選択であると、社会に認めて欲しいと思っています。この様なアンケートを実施していただけるのは、避難者の声を聞いていただける、ありがたい機会だと思っています。またいつでも協力させていただきたいと思っています。

【138】 東日本大震災、本来の風化が心配。

【139】 はじめに、当アンケートに避難の理由を問う項目が無い点に腹立たしさと不満を感じた。理由次第で支援の方向も変わるはずだ。避難者が何に不安を覚えどう判断で避難しているのか、その理由を支援者やこういうアンケートを企画する人に把握、認識してもらいたい。東京電力が大事故を起こした「福島第一原発」から今も大量に新たな放射性物質が出され続けていることによる追加被曝に憂慮している。また、流通する食料品、物品も放射能検査が十分にされているとは言えず、汚染された食物を摂取することによる内部被曝が懸念される。こうした理由があり、愛知県に定住したいが正社員で採用されず仕事が無い生活が困窮している。この先どうやって暮らしていけばいいか、わからない。大事故が発生してから2年以上が経過しているのに、避難者対象求人にも有期限のものばかりであり、「定住」には足りない。今後は避難先での「定住」を目的とした支援に切り替えてもらいたい。

【140】 愛知県民の皆様方のご支援に感謝しております。

【141】 被災地は東北地方だけではなく、関東の地域でも被害があり、被災者がいるという認識を広く分かってもらいたい。

【142】 「アンケート」と称しつつ、質問事項から個人の特定が可能な内容はどうか

かと思えます。(他にも同意見を複数名から聞きました)

【143】県内から、支援センターから、いろいろ助けてくれました。私本当に感じる気持ち持っています。今なら、私幸せとおもう。私だけじゃなくて、みなさんも幸せにして希望したい。

【144】津波のため、沿岸部にあった工場が、閉鎖され、転勤という形で愛知県に来ています。なので、福島からの原発避難の方々とは少し違うかも……。でも、長年住み慣れた宮城から、離れざるをえなかった、さみしさや、家族が宮城に暮らし、離れてしまったことを思うと、今の生活がよかったのか・・・宮城に残った方がよかったのか、自問自答の毎日です。石巻の家のローンとこっちのアパート代と出費がかさむのが悩みです。家族に会いに石巻に帰りたいが、交通費がかかりすぎ・・・なかなか、会いたくても会えません。でも、支援センターから、いろいろな行事の案内が届くと、ちょっとうきうきして嬉しくなります。又、河北新報の切り抜きも、宮城の情報があまりない愛知なのでとても参考になります。作業して下さっている皆様、ありがとうございます。感謝します。様々な立場で、いろいろなケースの被災者がいると思います。その方々に合った生活が送れば良いと思います。(うちも含めて) ※主人は愛知県の方々の気質になじめず仕事が面白くない・・・と話しています。根っからの東北人なので、難しいかもしれません。

【145】1日も早く帰還できるよう願って居ます。

【146】「被災者、避難者というよりも普通にデイケアで同じ様な障害をかかえている人とかかわるだけで充分だ。かえって思い出すようで辛い。」というのが、言葉として出てきた母の気持ちでした。家族とデイケアだけの関係では、本当に言いたいことが言えてないのではないかと感じていますが、それが本心なのかもしれません。娘 記。

【147】神奈川でも汚染され、子育てに適さない土地だという事を、調査し、認め、賠償してほしい。最低限でも、家族が月に1回面会する為の交通費がほしい。給食に関東以北(北海道を除く)の食材と、きのこ類を使用しないでほしい。も

しくは給食とお弁当の選択制にしてほしい。

【148】日本国中の人々の中における、原発事故によってもたらされた環境汚染の共有意識。全ての人々の問題だという事に気付いて欲しい。

【149】広域避難の定義が不明。私の場合は、福島の場合がなければ移動していなかったし、愛知に来ることもなかった。対象でないなら無視してください。制度があって、それに該当するか確認して、該当すれば利用させてもらっているに過ぎない。あまり支援を受けている感じはない。避難という言葉も許されそうな場面では使わない。病院で使ったら、子供の甲状腺検査を断られた。症状がなければ検査してもらえない。生活で精いっぱい（生活も仕事も変わって）で、健康も住居も子育ても地域のことも何もできないまま時間が過ぎ、子供は成長していく。支援に対応する余裕もなく、逆に負担になることもあるかもしれません。（対応を求められると）自宅も地域も学校も汚染された事は間違いないのに、それでも安全だということで何もなかったことにされ、このまま泣き寝入りするしかないのでしょうか。それでなぜ社会が弁護士が法律が成立するのか不思議です。同じ地震、同じ事故の影響を受けたのに、現地では何も支援はなかった。大きな被害を受けた人でも、個人のリスク管理の問題もあると思う。私であれば、津波や洪水など災害が予想される場所には最初から住まないと思う。何も考えず、住み続け被害を受けたから助けてくれというのは、違うと思うがそういう人が被害者でそういう人を助けるということが大部分になっている。

【150】2年半の時間が経ち、ようやく愛知での生活していく事に前向きな気持ちになれています。震災直後は、突然の環境変化に大変とまどい心的ストレス・悲しみ・不安で押しつぶされそうでした。幼い2人の子どもを守る事だけが、私の心の支えだった気がします。福島で、幸せに暮らしていた日々…もう一度愛知でもあんな日々を送れるようにしたいという気持ちが、やっと今湧いてきます。今までは、やはり、福島にいて辛い思いをしている人々、福島以外でも震災、津波で大変な思いをしている人々の事を思うと、愛知で不自由なく生活している事が申し訳ないという気持ちになり、心をふさいでた気がします。その日によっては違いますが、精神的な事にとっても左右されます。愛知にいる被災者のメンタルケアをお願いしたいです。どんな形であれ、支援してくれる方々がいる

というのは、何より心強く、被災者支援センターの方々には本当に感謝しています。

【151】(困っていること)

- ・家族が別れて住んでいるため生活費が2倍かかってしまって生活水準が下がってしまった。家族で会うために、交通費も何倍にも増えてしまった。子供への影響が一番つらい。(勉強や習い事へお金が使えない)
 - ・実家で同居しているが、人間関係がギクシャクする時がある。(食品のことで)
 - ・放射性物質の影響がはっきりしないため、子どものこれからの体のことが心配。安全な食品の購入も大変。
 - ・今後のことを考えることが多くて心が休まらない。
 - ・子ども(全国の)たちに、早急に健康被害がないか学校などで検診を始めてもらいたい。放射性物質の長期間での影響が心配され始めている。行政の対応が遅すぎる。
 - ・被災前に友人だった人と会いにくくなってしまって。話しにくくなってしまった。
- (よかったこと)
- ・実家に戻ったため、地元の人とのつながりが深くなり、地元の良さに気づいた。
 - ・日本が持っている問題をしっかり見るようになった。

【152】自主避難者は賠償もできず、100%自力で生活しています。厳しいです。そのため、土日の交流会等にも参加する時間、金銭の余裕は正直ありません。(特に私が自営で土、日働いているせいもあり) 「交流を」と企画して下さるのもありがたいですが、正直、お米・図書券・映画の無料招待券(家族が最寄りの所へ行ける)・資格取得のためのサポート(一種の奨学金)などの、厳しいペースの中で、家族がほっとひと息つけるもの、生活の足しになるもの、教育費の負担を軽減できるものをご提供くださるとありがたいです。又、福島や東北の方と同レベルで扱っていただけるとは思えず、こちらも気がひけてしまい、交流会は足が遠のいてしまう気もします。

【153】・現在は家賃が発生していない為、助かっていますが、発生してしまった

場合、生活が難しくなってしまうのが不安です。

- ・福島に帰りたいが、放射線が不安。(子どもが産まれた為)
- ・避難から永住になってしまうのではないかと不安です。
- ・福島に帰ったとしても、職や住居が確保できるのかが不安です。
- ・福島に帰るべきか愛知県に残るべきか悩んでいます。

被災者支援センターから新聞のきりぬきや、いろんな交流会のお知らせをいただいて、感謝しています。愛知県にいと、なかなか情報が得られない為、すごく助かりました。ありがとうございます。愛知県に来たばかりの頃は、なじむことが出来ずに閉じこもってばかりでした。今では、夫の会社の方達との交流が出来たり、周りの人に感謝しています。しかし、子どもが産まれてから、周りの助けが必要だと感じて、頼れる人がいない為、不安でもあります。近くに親族がいればと感じる事が増えました。福島で育てていたら、もっと余裕のある子育てが出来るのではないかと考えてしまいます。でも、これまで交流会を企画していただいたり、色んな事をバックアップしてくれた方達には本当に感謝しています。本当にありがとうございます。そしてこれからもよろしくお願い致します。

【154】避難して来た当初は、自分は柏から避難の為名古屋に来たのだと積極的に話していたが、最近知り合う子供の学校 PTA の知り合いには一切話してはいない。夫と離れて暮らし2年が経過。当初はすぐに名古屋に転勤してくると言っていたが、なかなか辞令が出ない。自分たちの判断が果たして正しい判断であったのか、自問する毎日です。

付録Ⅳ 2018 年 A 家インタビューのまとめ

日時：2018/05/21（月）18 時～

場所：丸の内綜合法律事務所（堀弁護士事務所）

インタビューイ：A 家（A 氏）

インタビュアー：黒田由彦（椛山女学園大学 教授）

同席者：堀龍之（弁護士）、上田敏喜（弁護士）

書記：若山幸大（名古屋大学大学院 博士前期課程 2 年）

内容

> 福島県に住むようになった経緯

- ・結婚を機に、福島県に 2008 年より移住
- ・「自然の中で子どもを育てたい」という夫婦の思いからの決断だった
- ・移住先である福島県に骨を埋めるつもりで、引っ越して来た
- ・夫婦ともに福島県の出身ではないので、福島県や東北地方に親戚はいない

> 避難の経緯

- ・これから避難しようというとき、夫婦で最初に少し揉めたのは、避難先であった。A 氏は実家である名古屋を提案したが、夫は南海トラフ巨大地震を懸念した
- ・まだ起こってもいない地震について考えるのか、それとも原発事故の影響を危惧して子どもの将来を考えるのか、これは最初の課題だった
- ・A 氏は、誰に反対されようと、何がなんでも避難するつもりでいた
- ・15 日には、「昼ごろに放射能が、海から中通りに来る」という情報が出回っていた。出所はわからないが、夫が知り合いから聞いて来た
- ・車で避難することになったが、ガソリンは十分には準備されていなかった。山形では補給できると聞いて、そちらを経由するルートを選択したが、結局なかった
- ・5 日間ほど居候させてもらうが、向こうもこちらも、共同生活がしんどくなった
- ・何もせずに居候はできないので、お手伝いしながら過ごす。掃除機をかけながら、泣いていた。また、夜な夜な黙って泣いてもいた
- ・山形は安全だろうかという不安が続く。ちなみにネットは使えない状況だった

- ・6 日目、精神的にしんどくて「ガソリンを入れてくる」と伝えて、一旦、一人になる
- ・長男夫婦からメール、ガソリンが満タンにできる場所があるから帰ってこいと言われる
- ・この間、行政からの連絡は一切なし
- ・知り合いからのチェーンメールで、電気・ガス会社らしきを出所に「雨の日は外に出るな」という情報が届く。子どもたちに雪を触らせることも、怖かった
- ・子どもの前では冷静だが、自身の中ではパニックで、後先を考えられる冷静さはなかった
- ・兄夫婦の元を目指して再び避難を始めるが、峠越え、道路の寸断、天候などの情報はないまま車を走らせた
- ・名古屋に避難して、妹の元に身を寄せる。仕事を休んで世話してくれる妹に、これ以上負担はかけたくないと、自身の不安や恐怖の感情を爆発させることなどできなかつた
- ・話せることと言えば、震災時の停電、コンビニには何もなかった、という内容ばかり
- ・名古屋はもちろん、新潟ですら、「原発カルチャーショック」に驚いた

> 避難をきっかけとする離別や軋轢

- ・福島には、おすそ分けしてくれたり、頼まずとも子どもの世話してくれたりする人間関係があったが、避難先である名古屋には、ない
- ・ときに、全然知らないおばあちゃんに、スーパーで「お利口に並んでた」という理由で、子どもにお菓子を買ってもらったこともあった
- ・避難する前に、自分によくしてくれた人には、余裕がなくて挨拶もできなかつた
- ・避難後、娘と一番仲の良い世帯とは会いに行けた
- ・「避難して正解だったね」と言われる。「おばあちゃんがいて、避難できなかつた」とも。外に出せなくて、かわいそうな思いをさせたとも話していた
- ・その際、放射線の話はできなかつた。「自分はもうそんな懸念をしなくてもいい場所に住んでいる」という思いもあつて
- ・被災直後は $20 \mu\text{Sv}$ だったが、5 年後は $0.5 \mu\text{Sv}$ だった。「これでも下がったんだよ」と言われ、「そういう感覚か」と思った

- ・避難してから、A 氏の両親と食事する機会があった。その際、A 氏の父が「いますぐ土下座して会社に戻れ」と夫を叱責し、喧嘩となる。2011 年に始まり、2016 年まで絶交状態に

- ・逃げる必要はない、福島を捨てるのかと親しい人（仲人）に言われる。子どもの名付け親になってくれた人。「お前たちは勘当だ」とも言われた。どうせ福島を捨てるやつ、扱い。自分の子どもは被曝が怖くて福島に呼べないのに、わたしたちの子どもは福島に住めと言うのかと愕然となった。いじめかと思った。その後、毎年読んでくれていた誕生日会にも呼ばれないようになり、ここで信頼関係が絶たれた

> 離婚の経緯

- ・現在は、離婚を前提とする別居中。子どもを育てるためだけの間柄に
- ・夫は、なぜ自分が「悪い」のか気づいていない。むしろ、自分は家族を守った英雄だと自負している
- ・関係が破綻した決定的な理由は、夫が避難中も避難後も A 氏に何かと頼るから
- ・大人がもう一人いるのに頼れないというのが、ストレスだった
- ・夫と名古屋で合流したとき、「今日、泊まるとこどうするの？」と聞かれて、（なぜここまで来てわたしに頼ろうとするのかと）A 氏は切れた
- ・警備会社に勤務、前の会社より給料が減る、24 時間勤務で仕事の方法がまるで違う
- ・夫はしんどい仕事だから、帰って来たら寝るだけなので、育児に参加はできない
- ・病院のカウンセリングで、「精神を保つためには、会う必要がない者に会わなくてもよい」と指摘される
- ・（夫の頼りなさというようなところ）「気づかなければよかったこと」に、気づいてしまった
- ・福島では、旦那の愚痴も話せる知人がいた。青森から毎年福島に来て 4、5 泊する。一緒にお酒をのみ、話す。母と同じくらいの年齢の女性。癒やしだった。
- ・子育てしながらの癒しが存在しない、自分を癒す術がなかった
- ・山とか野うさぎとかが日常的に見えないのも、ストレス

>A 氏、子どもの健康について

- ・福島に住む権利を奪われた。あの事故さえなければ、ずっと住めた
- ・A 氏は乳がんに罹った。その原因は放射能ではないかと疑う。というのも、自分は癌の家系ではないから。母はこれをきっかけに放射能汚染について考えるようになった
- ・自身の肺の痛みは、転移ではないかと疑ってしまう
- ・一番上の子は、避難した自分たちはどう見られるのかという意識を強く持っている
- ・三番目の子は川崎病を発症した
- ・一番上の子どもは、自分の遺伝子が傷ついている可能性を理解している。そして、自分が産む子どもへの影響や可能性についても漠然と理解し始めている

>最後に

- ・逃げた際は本能的だったが、いま振り返っても、色々知っても、やはり逃げるべきだったという考えは変わらない
- ・国は守ってくれると信じていたのに、裏切られたのがショックだった。避難者としても扱われないことが衝撃だった

付録V 2018 年 B 家インタビューのまとめ

日時：2018/05/30（月）13 時 30 分

場所：B 家の自宅兼事務所

インタビューイ：B 家（B 氏の妻、B 氏の両親と姉）

インタビュアー：黒田由彦（椛山女学園大学 教授）

同席者：土井洋佑（弁護士）、ほか一名

書記：若山幸大（名古屋大学大学院 博士前期課程 2 年）

内容

> 避難の経緯

- ・いわき市で 32 年間、自動車整備業を経営してきた
- ・自宅の側溝の脇では、測定器が鳴りっぱなし
- ・顧客の車を入庫する際にタイヤの線量を測定し、測定器が鳴ればお断りしていた
- ・店は「自動車整備街道」みたいな場所に構えていたが、他のお店も同じような対応していたわけではない。受け取り方は、店によりけりだった
- ・きっかけは、子ども。血液の成分値に変化が見られた
- ・知り合いの医者からは「今どうなるわけではないから、経過を見よう、あんまり心配しなくていいよ」と言われたが、神様だってわからない、大丈夫という裏づけはないと思った
- ・インターネットで高山市に子どもを保養してくれる場所があると知った
- ・一般の方が主催する保養だった
- ・ほかにも保養できる場所があったが、ここを選んだ決め手は、HP に記載されていた「これは大変なことが起こった。一刻も早く子どもたちを安全な場所に移して、草木水の安全な場所で過ごさせてやりたい」という趣旨の一言だった
- ・全然知らない土地だけど、こんな人なら安心して行けるかなと思った
- ・これをきっかけに、避難先は岐阜に決まっていた
- ・店を閉めるにも手続きに時間がかかる。そこで、子どもたちと妻は、先に群馬へ移った。B 氏と両親は店仕舞を済ましてから合流し、岐阜へ向かった

> 避難をきっかけとする離別や軋轢

- ・B 氏の妻「私はまだ、やんわりしてたほう」

- ・両親からは「(長女だから) ずっとそばにいてくれるもんだと思ってた」と言われた
- ・「もう会えないわ」「一年に、それと生涯であと何回会える？」という問いかけに答えられなかった。もちろん、責めることはできない
- ・「病気で倒れるから、来て」と言われても、来られない
- ・「お父さんお母さんの死に目に会えるか」と言われたときは、怒鳴られるよりきつかった
- ・そのときは「会いに行く」とか言っても、いざ引っ越してくると年1回程度
- ・一回行くのに10万円くらいはかかる。交通費、外食費など。親戚の挨拶回りにも行くが、手ぶらでは行けないし
- ・また、冬行くにも寒いので「子供には温いところで」と気を遣われてしまう
- ・B氏の母によれば、親戚とは出てきた時点で、疎遠になった
- ・B氏の父の姉には、「あいつらとは、縁を切った」と言い触れられる。「出てったお前らは、どこかおかしいんじゃないか？」と言わんばかりの口調と態度
- ・三番目の姉には、「オレは、娘ら(B氏とその姉)ことは一生恨んでやっからな」と言われた
- ・B氏の母は、「お前らは、あいつらにからめとられて、出て行く羽目になった」とも言われ、カチンときて三番目の姉と喧嘩した。「恨むんなら、自分の子を恨め」と思わず言ってしまった
- ・顔合わせれば、挨拶はするけど、心のうちではなんと思っているのか

> 避難先(群馬)の暮らしについて

- ・医師に診断されたわけではない、学校では現在それなりに生活している
- ・今になってぽろっと長男が「僕はあのとき、辛かったんだよ」と言えるようになった
- ・仕事で家を空ける父親のいない生活で、母は下二人(年長、1歳半)の世話につきっきり
- ・B氏の妻も余裕が持てず、長男にはなんでも家事を手伝わせた。下の子が道路に飛び出してしまったときは、思わず責めてしまったこともある
- ・学校の様子は知らないが、授業参観では「なんか、溶け込めてない」感じだった
- ・学力が下がっていった

- ・「友達の名前は？」と聞いて、具体的な名前が出てこなかったときは、しまったと思った
- ・親が二人いることで、両親含めて四人で三人育てることで、接し方に緩急が生まれる
- ・頼んだことをやってもらうばかりだから、互いに気が張る。目もつり上がる
- ・福島に残った B 氏と両親は、子どもたちの成長の過程が見られない。「初めてできるところ見逃したな、俺」と B 氏はこぼしていた

>避難先（岐阜）の暮らしについて

- ・もともと B 氏の父が営業を担ってきたが、こちらでは言葉が通じない。聞き返されることがトラウマになっていった
- ・現在、祖父は畑にも行くし挨拶もするが、外に出てくことは少ない
- ・B 氏の父は岐阜に着いた当初、気持ちをどこにおいていいか、わからなかった
- ・半年くらい毎日おにぎり 2 つ持って金華山へ、ただ自転車を走らせた。歩き回らないと気持ちが落ち着かなかった
- ・「長良の橋の下で首吊ったら、楽だっぺな」といつも思っていた
- ・B 氏「俺は、ほんと不安だった」食い扶持を失ったうえ、知らない土地。妻子を養えるか
- ・ご飯が食べられなかったわけではないが、「何かあった、岐阜で？」とびっくりされるほどやつれた
- ・B 氏の母「老後だけを楽しみにして、一生懸命働いて、自分たちの願ったり叶ったりの我が家を手放してっていう気持ちは、半端ないよね」
- ・子どもが飛んだり跳ねたりできる家を夢見て建てたのに、涙が出る思いで手放した
- ・夢を持って言うけども、年齢重ねてからの夢って何？と聞き返したい。「こういうところに行こう、ああいうところに行こう、このお金はこう使おう」なんて、今は考えられない
- ・友達は多かったけど、その語る友達もいなくなった
- ・「子どもには軽い気持ちで話してみるけど、友達とかとは全然違うじゃないですか」

>帰郷、「ふるさと」について

- ・B 氏の妻「ぜんぶ、なくなっちゃいましたね」
- ・行く度に家がなくなっていたり、田んぼに家が建っていたりする。「どんどん、知らない土地になっていく」
- ・以前の工場は他人に渡って、現在は違う看板が掲げられている。「望んで出て行ったわけではないので、なんとも言えない気持ち」
- ・地元でもらっていた食べ物には「触れることも口にすることもできなくなった」
- ・「汚染された地域」として疑いの目で見えてしまう。「これ（食べるのに）大丈夫なのかな」「そこの草むら、ホットスポットになってんじゃない」と考えて、帰ってきてても喜べない

>子どもについて

- ・生活はなんとかできるかもしれないけども、健康の問題が気になり
- ・甲状腺の異常が見つかる「一生、尾を引いて行く」悪い病気になるとも限らないし、子どもの結婚とかで目には見えない差別に遭ったり。一生の不安の種
- ・「あいつ福島から来たんだ」と言われるとも限らない、と考えると不安
- ・原発さえなければ、心配することも、現実には起こりうることもなかった
- ・遠くに来たから、はい安心というわけではない。どうなるかわからないから、不安

付録VI 2018 年 C 家インタビューのまとめ

日時：2018/06/02（土）10 時～

場所：C 家の自宅

インタビューイ：C 家（C 氏、およびその妻）

インタビュアー：黒田由彦（椛山女学園大学 教授）

同席者：安藤達也（弁護士）、馬路充江（弁護士）

書記：若山幸大（名古屋大学大学院 博士前期課程 2 年）

内容

> 避難するまでの経緯（C 氏）

- ・ 獣医師として動物保護を行っていた。線量の高い地域に、年間 50 日ほど
- ・ 町内会の人が $1.6 \mu\text{Sv}$ を検出した際「これでも低くなった」と話していた。線量が高いにも関わらず、このような反応だったのは、町内会の人に限らず、感覚が麻痺していた
- ・ 健康診断で肝臓に嚢胞、腎臓にも異常が見つかった。加齢によるものと考えているが「ひょっとして（放射能の影響）・・・」とってしまう
- ・ 被曝の危険を認知しつつも、仕事はやらなきゃいけない。だから、あまり意識しなかったし、「将来的には、影響あるかもね」くらいに考えていた
- ・ 実際、日を改めて繰り返し仕事していく（放射能線量の高い地域に入る）中で、マスクをつけなかったり、線量計が高い値を示すことに「ああ、高いわ」くらいで平気に過ごしたり、非日常的な状況に慣れていってしまった
- ・ そのような態度は、勉強していくうちに軽率、無神経だったと思い返す
- ・ 当時は人手も足りないし、急にやめるわけにもいかないのだから、流されながら仕事を続けた
- ・ 子どもたちは 12 月に福島を離れたが、もっと早くできていれば、自分の気持ちも楽だったのかもしれない。今でも、そう思う
- ・ しかし、当時ニュースで、思ったよりも高い津波がバーンと押し寄せているときに、原発は大丈夫かな、なんて想像にも出てこなかった
- ・ しばらく経ってから原発ヤバいという噂を耳にした。原発ヤバいんだ。でも、でも当時の自分の考えとしては、ちょっとしたら大丈夫だって言ってたし、いろんな技術でやっているなら、何日かでおさまるだろうと思ってた。そのくらい知らなかった

>避難するまでの経緯 (C 氏の妻)

- ・ 教員として除染作業に参加。周辺よりも線量の高い信夫山で
- ・ 病気の理由が放射能か年齢か、医者に聞いてもわからないので、モヤモヤが続いている
- ・ 除染作業は、一時間あたり $10\mu\text{Sv}$ の場所も何箇所もこなす
- ・ 「子どもたちのためにやるんでしょ」と言われれば、PTA が手伝ってくれる手前、自分だけ怖いから嫌とは、断れない
- ・ 自分は若くないし子どもも産んでいるから、他人を止めるように促しても、自分は除染に参加せざるを得なかった
- ・ 嫌とは思いつつも、駐車整理とかで外に駆り出される。雨や雪にも打たれた
- ・ 名古屋に来て健康診断をしたら、肺の壁が厚くなっていた
- ・ 甲状腺に嚢胞と結節あり。ホルモン分泌も異常が見つかる
- ・ 今まで異常という診断を受けたことがないので、疑ってしまう
- ・ 防具は何も支給されなかった。市販のマスクと手袋で、防御している気になっていた。というか、しようがないとみんな思っていた

>子どもの健康や避難後の生活について

- ・ 一卵性双生児のうち、ひとりに異常あり
- ・ 嚢胞が見つかる、ホルモン値が基準値を外れてはいないが、注意の段階に入る
- ・ 外に出る、マスクする、長袖を着るなどの行動がそれぞれ正反対で、心配性だった子は罹らず、気にしなかった子が罹った。遺伝子が同じ子で行動によって結果が分かれたと考えれば、放射能の影響は疑ってしまう
- ・ 子どもたちには健康の異常について、隠していない。隠れて話題にすることもしない
- ・ 子どもがいじめられることはなかった
- ・ 中学校のクラスのディベートで、東京五輪のお金を被災地の復興に回すべきという趣旨の話に及んだとき、泣いて叫んで動転したことがあった
- ・ 高校生になってからは、取り立てて福島の話はしない。学友も特に興味を示さない

>避難の経緯

- ・ 2011 年 5 月、夫婦の休みが偶然重なり、一緒に買い物に出かけた。その際、何気なく「ここを離れてもいいよね」と C 氏が言うと、妻も「わたしも」と。二人して、仕事を辞めていいよね、引っ越していいよね、と。
- ・ 背景にあったのは、3.11 以来続いていた異常な生活だった。「主人は連日家にいなくて、子どもたちも学校は再開されたけど、暑い中で窓締め切って勉強したり外に出られなかったりとかあって。非日常が続いている状態だった」
- ・ 母に、離職して移住することを伝えると「正解だよ」と言われた
- ・ C 氏が福島を離れるという話で、氏の母は近所の人から「あなたのところは、そうやって行くところがあるから、いいよね」と言われた
- ・ 妻の近所では「資格とか、仕事がどこでもできる人は、逃げられるから、いいよね」とも
- ・ 帰るつもりはない。もし戻ることができると考えているなら、捨ててこれられない
- ・ 一番捨てがたかったのは、家。子どもも今だに未練をこぼすが、健康には代え難かった
- ・ 子どもたちが大きくなったとき、あのときどうして逃げてくれなかったのと聞かれれば答えられない。でも、どうして逃げたのと質問されれば、きちんと説明できると思った。だから、逃げることを選んだ

> 人生設計について思うこと

- ・ 教育を受ける権利を半分以上子ども自身奪われたな、という感じ
- ・ 福島にいたころは、お金の面とか心配することもなかったし、将来も自分たちの生活も子どもたちがこんな勉強したい、この大学に行きたいと言い出しても、すべてカバーできた
- ・ 避難して収入が半分。加えて、福島にあった新築のローンを完済して貯金が尽きる。さらに、新しく家を買ってローンの返済に追われる
- ・ とてもしゃないが、私立には行かせてやれない
- ・ 大学受験も、お金で制限がかかる。それと正直、東北方面には行って欲しくない
- ・ 広がっていたはずの選択肢が狭まり、子どもたちの権利が剥奪されていくことになる
- ・ 生活の質というか、どこでも心配なく生きていく権利を剥奪されたという気

持ちが強い

- ・移り住んだ当初、今までやってきたことはそのままできないんだ。将来やりたいこととか旅行とかまったくできなくなった、と落ち込んだ
- ・我慢するものとなくなったものは多い。車とかエアコンとか
- ・子どもに我慢させることが増えた。「ちょっと待ってね、それ本当に必要？」と応えたり
- ・結局、教育なんです（しわ寄せが来る）。スイミング、公文、塾、英会話スクールとかステータスの高い習い事は全部だめ。公立の高校に合格させるためだけの学習塾のみ
- ・就学支援金もらっているのは、クラスで二人だけ。「世間的にはそんなもん（低所得者扱い）だから、そりゃあ我慢しなきゃ」と妙に納得した
- ・大人はある分で生活できるが、子どもは見栄や友達との付き合いある。「いつも同じお洋服着てる」と言われたことも。それでも、流行ってるものを買ってあげられない
- ・子ども部屋は二人一つになって、部屋も狭くなった
- ・本当は一戸建てが欲しかったけど、お金がない。これから子どもから女性に成長していく娘には、清潔で、ある程度の部屋の広さがあるところで、すくすく育て欲しかった。賃貸では耐えられないので、残りの貯金をはたいてマンションの一室を買った